

このたねとばそ

大津波を生き抜いた
子どもたちのひみつが
未来の命を救う

特別寄稿

東京大学大学院情報学環

特任教授 片田敏孝氏



2011team 釜石小ぼうさい

加藤孔子編

Trajectory of 2011 Team Kamaishi Elementary School

Disaster Prevention Education
Kamaishi Elementary School

Let's Blow Off These Seeds

—The Wisdom of Children Who Survived
the Large Tsunami Will Save Future Lives —

Special Contribution

Project Professor
Dr. Toshitaka Katada


Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
Tokyo University

Edited by Koko Kato
2011 Team Kamaishi Elementary School



目次

刊行にあたって	1
特別寄稿	
釜石を未来につないだ防災教育	2
東京大学大学院情報学環 特任教授 片田 敏孝氏	
1章 大津波を生き抜いた子どもたちと釜石小学校の防災教育	加藤 孔子 …… 9
1 はじめに	9
2 釜石小学校児童の避難状況	11
3 釜石小学校の『軌跡』	15
2章 大津波を生き抜いた子どもたちが語る あの日のこと そして この10年	
1 魚釣り(港)からの避難	寺崎 幸季 …… 24
2 避難経路の選択	篠原 優斗 …… 27
3 家族の命を救う	内金崎 愛海 …… 29
3章 子どもたちの命を救ったもの	加藤 孔子 …… 32
1 先人からの言い伝え	32
2 心	34
3 地域之力	35
4 学校之力	37
5 Oneteam の力	37
4章 Team 釜石小(当時の教員等)が語る 防災教育の取組の実際と地域との絆、学校再開	
1 防災教育 はじめの一步	大和田 典明 …… 38
2 防災教育・道徳教育の実際	室 明美 …… 41
3 『ぺっこすけっから』	
～できることを、できるときに、できるところから～	寺田 恵美子 …… 45
4 震災後の学校再開へ向けた取組	及川 美香子 …… 48
5章 このたねとばそ Team 釜石小の『たね』は…	
1 このたねとばそ その1	大和田 典明 …… 52
2 このたねとばそ その2	及川 美香子 …… 57
3 このたねとばそ その3	寺田 恵美子 …… 62
4 このたねとばそ その4	加藤 孔子 …… 66
6章 このたねとばそ 未来へのメッセージ	73
賛助寄稿	
大事な「たね」を分けていただいた一人として	78
岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター	
准教授 本山 敬祐氏	
「このたね とばそ」への期待	79
九州産業大学 国際文化学部日本文化学科	
教授 太田 清治氏	
「そのたねとどいた」～釜石と北九州をつなぐ防災教育～	81
北九州市立皿倉小学校	
教頭 木村 敏久氏	
おわりに	83



刊行にあたって

2011team 釜石小ぼうさい

代表 加藤 孔子

2011年3月11日午後2時46分 東日本大震災の巨大地震発生。その後の大津波で甚大な被害を受けた岩手県釜石市。釜石市の釜石小学校の子どもたち184名は下校後で、それぞればらばらのところにおりました。学校管理下外にいた子どもたちでしたが、それぞれの場所から避難をし、全員があの大津波を生き抜くことができました。

現行の学習指導要領（平成29年告示）では、東日本大震災、数多くの自然災害の教訓をふまえ、自然災害とその防災についての知識を授業や地域とのかかわりの中で学ぶ様々な事項が盛り込まれています。東日本大震災から11年の月日が流れました。学校の防災教育も多く多くの学校で取り組まれ、継承されてきました。11年という時間は、当時小学生だった大津波を生き抜いた子どもたちも高校生や、大学生、社会人、素敵に大人に成長させてくれました。

しかし一方、今年（令和4年）1月に発生したトンガの海底火山噴火による津波警報では岩手県で避難した人は避難対象者の4%だったそうです。地震のない津波、寒い冬、夜中という悪条件もありますが、東日本大震災直後の危機意識が薄れてきているのではないのでしょうか。同様に学校の防災教育も11年という月日の経過による危機意識の希薄化や、防災教育の形骸化も懸念されます。

そこで、今一度、あの大津波を生き抜いた子どもたちの命を救ったものは何だったのかを振り返り、東日本大震災前から行っていた釜石小学校の防災教育の実践や、大人になった大津波を生き抜いた子どもたちからの証言や提言を書籍としてまとめ、岩手県内はもとより、全国へ、世界へ、未来へ発信できたらと考えていたところでした。その時に、防災教育チャレンジプランの2022年度の実践団体に認定していただくというチャンスをいただきました。

また、当時、釜石市の防災教育をご指導いただきました現東京大学大学院情報学環特任教授の片田敏孝先生に特別寄稿をいただけるという幸せもいただきました。片田先生には、群馬大学在任中に釜石市にたくさんのご指導をいただきました。平成20年度に釜石小学校で初めて行った下校時津波避難訓練にも立ち会っていただきましたし、震災直後にも釜石小学校にいらしていただき、「学校管理下外にいた釜石小学校全児童が無事」という知らせを共に喜んでいただいたことを今でも思い出します。

「2011team 釜石小ぼうさい」のメンバーは当時釜石小学校の防災教育や地域とのネットワークづくりに取り組んだ教職員等の有志と、大津波を生き抜いた子どもたち（現在は大人）の有志です。

この本のタイトルは『このたねとぼそ』です。釜石小学校の防災教育の実際や提言と私達の熱い思いが詰まったこの本を『たね』として、各地に飛ばし、「新たな防災教育」の芽が出て、各地で防災教育の花を咲かせてくれることを願っています。

釜石を未来につないだ防災教育

東京大学大学院情報学環
特任教授 片田 敏孝 氏



生き抜いたからこそある今に想う

あの日から11年の月日が流れ、当時7歳の釜石小学校1年生は18歳に、12歳だった6年生は23歳になりました。あの津波を生き抜いた子どもたちはもう大人となって、それぞれの道で希望に満ちた日々を過ごしています。彼らが活躍する姿はテレビや新聞などで見かけることも多く、あの津波を生き抜いたからこそ釜石への想いを語ってくれます。そんな彼らの想いを聞くたび、大きな喜びがこみ上げ、時に目頭が熱くなることもあります。

希望に満ちた自分の将来や地域の未来を語ってくれる若者の姿は、どこにでもある姿なのかもしれません。しかし、希望に満ちた自分や釜石の未来を語る彼らの姿は、言うまでもなく今彼らが生きているからこそその姿です。あの大津波にあって小学生だった彼らが、自分の力で生き抜くことは容易なことではありませんでした。しかしあの日、釜石小学校の子どもたちは自分の判断で、精一杯の避難をして生き抜き、11年の月日を経た今、自分や釜石の将来を希望に満ちて語ってくれます。

そんな彼らの姿を見るとき、熱心に防災教育に取り組まれたチーム釜小の先生方の喜びは言葉では言い尽くせないと思います。間違いなくチーム釜小の熱心な防災教育があったからこそ、今の彼らの姿があるのだと思わずにはいられません。そして私自身もそこに少しばかり関わったことを本当にうれしく、内心誇りにも思っています。

釜石における津波防災教育の始まり

私が釜石の防災教育に関わり始めたのは、あの震災の8年前のことです。過去を振り返ると三陸沖の津波には明確な周期性があり、そろそろ次の津波が近いと言われていました。しかし、釜石湾には巨大な湾口防波堤ができ、釜石市民の多くは津波の襲来をあまり警戒しておらず、津波警報が発せられることがあっても、ほとんどの市民は避難をしませんでした。

前の津波から時間が経過したうえ、防潮堤などの対策も進んだことから、自分事とはなかなか思えない心情は理解できたのですが、このままの状況で、万一大きな津波が起こったら大きな被害が出てしまうとの思いから、市役所の防災課にお願いして一般市民を対象に防災講演会を重ねていました。

しかし、津波に対する現実感、我がこと感がない市民の皆さんへの講演会は、参加者も少なく、防災研究者としての無力感と焦りばかりが高まりました。釜石の大人たちがこの状況ですから、釜石の子どもたちも津波を意識するはずはありません。学校での防災教育も行われていたのですが、家庭や地域の大人たちが避難しないなかで、どれだけ学校で防災教育を行っても、子どもたちにとっては単なる知識に留まり、いざというとき、避難するとは思えない状況でした。

私は2004年に起こったインド洋津波の被災地を調査団の一員として訪れました。その地で見た光景は、あまりにも衝撃的でした。海岸で流木を集めて茶毘にふされる親の脇で抱き合う幼い兄弟の姿は、今でも忘れることができません。このままの釜石では次の津波が大きければ、

この光景が日本でも起こってしまう。釜石の子どもたちは、津波の周期性から言って、その生涯の内に必ず津波を経験するにも関わらず、今のままではあのインドのあまりに悲しい光景が釜石で起こってしまう。

私の心の中に明確な目標ができました。子どもたちの防災教育にも取り組んで、いつの日かその日を迎えてもしっかりと対応できる子どもたちにしたい。そしてそれを継続することで、子どもたちの防災教育に留まらない成果があるはずだ。防災教育を10年続ければ、この子どもたちは釜石の大人となり、さらに10年続ければこの子どもたちはお父さんお母さんとなって、しっかり対応できる次の世代を育ててくれる。そう考えれば子どもたちへの防災教育は、10年計画で津波にしっかり対応できる釜石市民をつくるプロジェクトになる。そしてさらに10年続ければ、次の世代にも繋がり、いわば防災文化の礎にもなる。地道な取り組みではあるものの、災害に向かい合う地域のありようの本質がそこにあるのではないか。ひとまず10年を目標に子どもたちの防災教育に取り組んでみよう。教育の専門家でもない私が、釜石での防災教育に取り組み始めたのは、そんな思いからでした。

手探りで始めた防災教育

釜石での防災教育に取り組む覚悟はできたものの、現実はそのようにたやすいことではありませんでした。実際に子どもたちの前に立ってみると、どのように語りかけたらよいのかもわからない自分がいました。日頃、大学生を相手に淡々と授業をしているわけですし、地域で行っていた講演会も大人が相手ですから、自らが思うことをそれほど言葉を選ぶこともなく語ればよかったわけです。

しかし、小学校の低学年を前にしたときなど、最初の一言にすら迷いが生じ、加えて子どもたちの理解度にも気を使わなければなりません。正直なところ、子どもたちに向かい合うことだけで精一杯で、防災教育どころではありませんでした。

年齢に応じた理解力を考える余裕もないなかで、子どもたちに語りかけることと言えば、津

波はどんな現象なのか、なぜ怖いのか、どのように逃げればよいのかなど、年齢に応じた理解力を考慮する余裕もないまま、まくし立てる授業は、どう考えても子どもたちの防災力を高めるに至らない散々たる内容でした。子どもたちのつまらなさそうな顔を見ると、さらに焦りを感じ、焦りがゆえにさらに早口で一方向的に話す授業は、自分でも空回りであることを自認せざるを得ず、落ち込みました。授業が終わると途方もない疲れと自己嫌悪感だけが残り、何を改善したらよいのかもわからない状態だったことを今でも思い出します。

防災教育は学校教員が行うべきだ

教員はやはり教育の専門家です。防災の専門家である私は、災害や防災には詳しくても教育の専門家ではありません。私は釜石の先生方に防災教育を委ねようと考え、当時の釜石市の教育長である河東先生に釜石の全教員を対象とした講演の機会を頂くようお願いをしました。既に一年間の学事予定があるにもかかわらず、河東教育長は私の想いを受け止め快諾して下さいました。

こうして実現した釜石市の全教員を対象とした講演では、今なぜ釜石で津波の防災教育が必要なのかという私の想いを中心に、事前に行ったアンケート調査に基づいて、釜石の子どもたちや先生方、そして子どもたちの親の意識を紹介しながら、このままの状況に子どもたちを育てるのであれば、将来子どもたちが必ず遭遇する津波から彼らは命を守ることができないのではないかという厳しい問い掛けをしました。

事前に何人かの先生にお会いした感触から言えば、釜石の学校の先生方も防災の専門家ではなく、内陸の出身の先生も多いことから、津波に対する現実感是一般の市民の皆さんと変わらないものでした。通常の学校行事の一貫として避難訓練を行い、防災教育も行ってはいたものの、正直なところ、その内容に期待することはできませんでした。そんな釜石の先生方への講演で私の想いは伝わったのだろうか。また先生方の仕事を増やしたと恨まれるだけではないかと少し心配にもなりました。

しかし、それは杞憂でした。当時の釜石小学校の校長である加藤孔子先生も講演会に参加して下さいました。それが一つのきっかけとなってチーム釜小の防災教育につながりました。そして市内の各学校でも防災教育が始まり、先生方との教材開発や研究授業を行うなど、釜石市の防災教育は、ここがすべての始まりだったように思います。

そして研究授業に参加してみると、先生方の子どもたちへの語りかけは、やはり教育のプロでした。年齢に応じた言葉と内容で、子どもたちを引き付け、考えさせ、見事なコミュニケーションを目の当たりにしました。そして私はやはり防災教育は日頃から子どもたちと向かい合っている学校教員に委ねるべきだと確信をしました。

あらためて考えた防災教育のあり方

先生方と防災教育の議論を重ねるにつれて、研究授業に参加して先生方の授業を拝見する機会も多くなりました。相変わらず先生方の子どもたちとのコミュニケーションは見事だと感じながらも、徐々に防災教育の内容や目指すところに二つの疑問が生じ始めました。

一つ目の疑問は、防災教育の実効性への疑問です。防災教育の究極の目的は、その日その時、たとえ一人で居ても自分の持つ知識を最大限活かして、自分の判断で、実際に避難することができる子を育むことです。

しかし、教育の現場で行われている授業は、津波はなぜ起きるのか、どうして怖いのか、避難の必要性とその仕方など、津波防災教育には欠かせない内容ではあるものの、この防災教育を受けた子どもたちは、いざという時に本当に避難できるのかという疑問です。このような防災教育を「知識の防災教育」と言うなら、知識は確かに必要であり、それを否定することはできません。しかし、知識だけでは自分の判断と意志で行動を起こすような主体的な姿勢を育むことはできないのではないかと。私自身も違和感を持ちながら繰り返してきた知識一辺倒の防災教育には、主体性を育むための、言わば「姿勢の防災教育」を加えなければならないのではな

いかと思うようになりました。

「姿勢の防災教育」は命の思い合いから

どうすれば子どもたちに主体的な姿勢を育むことができるのかという問題は、最近よく耳にするアクティブ・ラーニングにも同じ問題意識があると思います。しかし、教育の専門家ではない私は、アクティブ・ラーニングの何たるかを考えるより、自分の幼き頃を思い起こしながら、子ども目線から一生懸命に逃げるに至る子どもたちの心情に思いを巡らせました。そしてそのポイントは、普段は意識もしない親と子の命の思い合いにあると考えました。

津波の時には必ず親は子どもを心配する。子どもたちは日々の暮らしの中で、そんな親の思いは言うまでもなく実感しています。そしてその事実は、いざという時、親の命の危うさに直結することになり、そのことは子どもたちも容易に理解できます。子どもたちには、自分が一人でしっかり避難できる子であること、そしてそれを親が確信できること、命を思い合うことを巡る親子の信頼があって、君の命も親の命も守ることができる。それを子どもたちに語って聞かせることで、子どもたちは心の底から自分でしっかり避難する意思を持つのではないかと考えました。

そして、三陸地方に伝わる「津波てんでんこ」も、一見薄情な教えのようにも思えますが、深読みすれば私のこんな解釈とも整合的だと気づきました。自分の命を守ることができる君であることは、命の思い合いを通じて、お父さんやお母さんの命を守ることにつながる。そんなことに気づいた子どもたちは、自分の内なる思いから「ぼく逃げるもん」と言える内発的な避難意識、主体的な姿勢を持ってくれるようになったのではないかと思います。

釜石に住み続けるためのお作法の防災教育

私が従来 of 防災教育に抱いた二つ目の疑問は、防災教育では避けることのできない災害の恐ろしさの教え方についてです。津波の恐ろしさを教えなければ避難の必然性を語ることはできませんから、防災教育では当然のこととして

津波の恐ろしさを教えなければなりません。

しかし、子どもたちに津波の映像や写真を見せながら、その恐ろしさを語るとき私にはいつも迷いがありました。特に釜石で過去に実際に起こった明治三陸津波や昭和三陸津波の絵や写真を見せるとき、子どもたちには明らかな戸惑いと不安そうな顔があり、この先にある防災教育の効果より、子どもたちは釜石のことを嫌いになるのではないか、大好きな海を嫌いになるのではないか、さらに釜石という郷里を愛する気持ちを失わせるのではないか、そんな不安を感じました。

釜石の先生方の授業を拝見しながら、子どもたちの顔を見てみると、これは自分のやってきた防災教育も含めて、「脅しの防災教育」ではないのかと気付きました。そうであるならば災害心理学の世界では、恐怖喚起のコミュニケーションと言って、効果もなく、やってはいけないこととされています。この「脅しの防災教育」はまさにそれだと思いました。

津波の恐ろしさ、過去にあった釜石の津波の事実を語りながらも恐怖喚起のコミュニケーションにならない防災教育とはどんな防災教育なのか。難しい問題を考え続けて行きついた答えは、過去の事実は事実として教えながらも、その恐ろしさだけに注目するのではなく、その地に住まうことの総体のなかで災害を理解するよう導くことでした。

私は防災教育にあたる時、冒頭で子どもたちに、その地に住むにあたって一番大切なことは何かを問います。釜石の子どもたちは防災教育の授業ですから、「津波の時は逃げること」などと答えて、まさに知識の防災教育の成果を披露してくれます。しかし私はあえてそれを否定し、その理由を子どもたちに話します。

釜石は海に面して自然の恵みが豊かな場所。その地に住むにあたって一番大切なことは、そんな釜石を誇りに思い、未来永劫、恵みをもたらえるよう自然を大切にすることだ。しかし、海に近づき多くの恵みをもたらうのであれば、当然のこととして時に荒ぶる海にも向かい合わなければならない。でも心配することはない。災いなんて数十年、数百年に一回のこと。その時だ

けしっかり対応できる君であればいい。それができれば未来永劫、釜石の自然の恵みを受け続けることができる。防災はそのための手段であり、釜石に住み続けるためのお作法なのだ。海を見ながらいつも津波のことなど考える必要なんてない。いつも通り、大好きな海で遊んだらいいんだ。

防災教育の冒頭でのこのような語りかけは、それに続いて子どもたちに語り聞かせる過去の大きな津波の受け止め方を大きく変えます。津波という災害そのものはどう考えてもネガティブな要素しかありません。しかし、大好きな釜石に住まうというポジティブな面を維持し続けるお作法と理解すれば、子どもたちの受け取り方が変わり、防災を前向きに捉えるだけでなく、地域への愛着、誇りを高めることができるのではないのでしょうか。

地域に住まうお作法と捉える釜石の防災教育は、確実に東日本大震災において効果を挙げることができたと思います。被災後の子どもたちの様子を先生方から聞いたとき、それを実感しました。釜石に住まうお作法は着実に子どもたちに伝わっていたことは、心からうれしく、感動しました。そしてうれしさ余ってその想いを伝えるエッセイを子どもたちに宛てて書きました。少々長いのですが本稿の最後に掲載します。

コロナ禍に学ぶ「with 災害」の防災教育

今になってこのエッセイを読み返すと、大きな災害が各地で起こり、巨大災害の想定が各地に発表される近年のわが国にあって、それをどのように受け止めたら良いのかという点で、防災教育や地域防災に大切な視点を与えているように思います。そしてその視点は、今まだ戦いのなかにあるコロナ禍を通じて社会が学び取った「with コロナ」の考えに通じるものがあるように思います。

コロナ禍が始まって3年。流行し始めた頃は、素性がわからない不気味なウイルスに私たちは言いようのない不安を覚えました。専門家も行政も懸命に対応するも、未知なるウイルス相手の話ですからあてにすることはできません。自分が感染しないためには、手洗い、マスク、三

蜜回避など、自分ででき得る限りの対応をするしかありません。コロナ禍による制約は広く日常生活に及び、社会は混乱を極めるものの、自らの感染予防を最優先に、精一杯の対応をすることしかできません。

しかし、最近になって社会の対応にも変化の兆しが見え始めています。感染は続いているもののワクチン接種が進み、ウイルスの変異によって弱毒化も見られるようになりました。重症化リスクが低下したこともあり、いつまでも抑制的な社会であり続けることの限界から、コロナありきの社会のあり方を模索する動きです。それを「with コロナ」と言い、リスクとの共存の道が模索され始めたのです。

このようなコロナ対応を見ると、災害にも同じような対応が必要だと考えていた私の思いと一致します。with コロナに倣うなら「with 災害」の考え方です。東日本大震災以降、全国各地に巨大災害想定が次々と発表されています。どう考えても対処の方法が見つからないほどの大きな災害想定です。災害大国日本に暮らす私たちは、それであってもその地に暮らさなければなりません。そうであるなら、コロナ対応に倣って、「with 災害」とでも言う思想を持つ必要があるのではないのでしょうか。

巨大災害はどこにでもあり得ることです。そして災害はその地域の一つの属性として理解し、地域みんなで向かい合い、助け合って生きていく。そしてどうしても受け入れられないのであれば、その地での暮らし方を変えながら災害という地域属性に対処していく。つまりコロナ・ウイルスがあり続けることを前提に、私たちは「with コロナ」という社会を模索するように、地域も時に自然の大きな振る舞い、つまり災害があることを前提に、そこでの暮らし向きを考える「with 災害」の考え方が必要なのです。

自然に対する畏敬の念を忘れ、科学技術で自然の振る舞いを制することばかり考える驕り（おごり）は間違っています。地域の災害への対処の処方箋ばかりを考える防災や防災教育には限界があります。時に津波が襲来すること、ときに近くの火山が噴火すること、そしてそれ

らの災害は時に処方箋を描き切れず、被害を免れないことだってあります。

しかしそれであっても私たちは、その自然の振る舞いを前提にその地に暮らします。釜石の子どもたちは、ときに荒ぶる自然に向かい合い、いたずらに恐れることをせず、家族との信頼をむねに、その日その時しっかり対応する姿勢を身に着けてくれました。今となって思えば、お作法の防災教育は、「with 災害」の防災教育と言い換えることができそうです。

おわりに

あれから11年の月日を経て、釜石の防災教育を振り返る機会を頂きました。この11年を振り返ると色々なことがあり、少し釜石から遠ざかってしまいました。しかし、釜石の防災教育、チーム釜石の防災教育を振り返るとき、確かに、今のそしてこれからの釜石に繋がるものだったと思います。あらためて子どもたちに生き抜く力を与えて下さった加藤孔子先生を中心とするチーム釜石の先生方に敬意を表したいと思います。

そして、「釜石の奇跡」と言われるほどの実績を残した釜石の防災教育の過程「釜石の軌跡」を、チーム釜石の皆さんが「このたねとぼそ」として全国に発信して頂くことは、これからの日本の防災教育に大きく役立つと確信しています。全国の学校防災教育に広く活かされることを心から願っています。

最後に、釜石小学校で防災教育を受けて育った今の釜石の青年たちに心からのエールを送りたいと思います。

■■■震災の1年半後のメッセージ■■■

「釜石の子どもたちよ、
それでも海を愛する人となれ」

あの忌まわしい3.11大津波から1年半の月日が流れた。瓦礫は片付いたものの、いまだ復興が進まない釜石の街に立つとき、海の猛威の爪痕の深さをあらためて思い知らされる。この地に住まう人たちは、家族を失い、家を失い、平穏な日々の生活を失った。あの日、この地に住まう人々の大切な人や物を奪い去った海を、被災者たちは、今どのように思っているのだろうか。長年にわたり釜石市の子どもたちの防災教育に関わりを持った私は、とりわけ子どもたちの今が気にかかる。

被災後も釜石に足を運んでいる。先日も、子どもたちの被災後の防災教育のあり方を検討する会議に出向き、釜石の先生方と話し合う機会を持った。会議の冒頭、各学校の子どもたちの様子を先生方に報告して頂いた。恐る恐る再開した防災教育の中で津波の写真や映像にふれると、やはり動揺する子どもたちが少なからずいるとの報告を聞いて、子どもたちの心の傷の深さに胸が痛んだ。

しかし、そんな子どもたちの様子にも少しずつ変化が現れ始めているという。生まれて初めて自らの命の危うさを体験した子どもたちである。どれだけ海を恐れても不思議ではない。家族や大切にしてきた思い出の数々を奪った海である。どれだけ憎んでいてもおかしくはない。しかし、そんな私の思いとは裏腹に、先生方の報告に子どもたちが釜石の海を恐れたり、憎んだりしているという報告はなかった。

先生方の報告によれば、子どもたちの多くが自分を襲った津波とは何かを詳しく知りたがっているという。たとえ津波の映像に怯える子どもであっても、津波が起こる仕組みを示した模式図や、プレート境界で津波が多発することを示す地図を見せると強い関心を示すというのである。それだけではない。海辺の学校においては、津波以前に浜辺を遊び場にしていた子どもたちが、猛暑となった今年の夏、意外にも多く、

いつもの夏のように海に出て遊びたがっているというのである。

そんな話を聞きながら子どもたちの心の今に思いを巡らした。言うに及ばず荒れ狂った海の姿は子どもたちの心に大きな傷を残したであろう。防災教育で教えられ、知識としては知っていたものの、初めて見る海の荒ぶる姿に子どもたちは恐れおののいたことであろう。しかし、あれから1年半の月日が流れ、あの日が嘘のように、子どもたちが知っている穏やかな釜石の海に戻った。そして今、子どもたちの心に傷は残るものの、海に対する畏敬の念が芽生え、冷静に海と向い合おうとしている姿が見え始めている。

津波以前の防災教育において、時にそんな姿もあると教わったままに自分や家族を襲ったあの津波の海も、幼い頃から浜辺に遊び、今こうして穏やかな姿を取り戻した海も、その姿の全てをもって子どもたちが新たに認識する海となった。そして、どんな姿であれその海と関わりを持って暮らすことが釜石に住まうことだと子どもたちは知った。

毎日眺める海も今はかつてと変わらぬ穏やかな釜石の海である。日々慣れ親しんできた海の恵みを食す生活も以前のままたに戻った。こうして次第に取り戻される「今まで通り」の海との関わりの暮らしのなかに、子どもたち自身も海との関わりに「今まで通り」を求め始めているのだろう。今年の夏、浜辺で遊びたいと言った子どもたちは、海に遊ぶこと以上に「今まで通り」に海と向かい合える自分を取り戻したかったのではないだろうか。

時に荒ぶる海の姿を知った今にあって、海との関わりを持ち続けることが釜石に住まうことであるなら、今まで十分に知らなかった荒ぶる海をも十分に理解したいと思う気持ちが子どもたちの心に芽生え始めている。それが故に子どもたちは津波を知りたがっている。子どもたちが「今まで通り」の海との関わりを取り戻すとき、そこには今までがそうであったように、海をいたずらに恐れることや恨むことはあってはならない。恐ろしい体験を経てなお、今まで通りに海に向かい合う自分を取り戻すためにも、

子どもたちは自分や家族を襲った津波の海を知りたがり、恐れず向かい合う姿勢を持ち始めた。それが今の釜石の子どものたちの現状なのではないだろうか。

そんな思いで今の釜石の子どもたちを見ると、長年取り組んできた子どもたちへの津波防災教育が目指したものは、今の釜石の子どものたちの姿だったように思う。海に近く暮らすことは、海の恵みに近づくことであると同時に、時に災いに近づくことであり、災いをやり過ぎず知恵を持って暮らすことこそがその地に住まうお作法なのだと教えることに始まる釜石の防災教育は、ことさら津波の恐ろしさだけを強調し、怯えさせ、避難しなければ君の命は……との文脈で迫る「脅しの防災教育」に陥らないよう努めてきた。それは釜石に暮らすことを恐れさせ、釜石を嫌いにさせる教育だからである。子どもたちとて、怯えながら釜石に暮らすことを望みはしないだろう。

それに代わって重視してきたのは、「姿勢の防災教育」とでもいう防災教育の方針であった。そこではまず、海の恵み豊かな釜石を誇りに思い、未来永劫その恵みを受けられるよう地域や海を大切にすることを強調することを心掛けた。そしてその恵みを受け続けるためには、時々起る海の大きな営みにも向かい合うことが必要であり、そこに生じる人にとっての不都合をやり過ぎず知恵を持つことこそが釜石に暮らすお作法なのだと教えてきた。日々日常までも津波を恐れる必要はない。穏やかな海の恵みに感謝しそれを楽しむ日々であって、津波の兆候を感じ取ったその日その時だけで良いからしっかりと対応できる自分を堅持することができれば良いと教える「姿勢の防災教育」は、あの津波のなかで子どもたちの懸命の避難を導いただけではないようだ。被災後の日々の暮らしにあって、子どもたちが改めて海に向かい合う姿勢を取り戻すことにおいても、「姿勢の防災教育」は有効に作用している。そして、子どもたちはあの津波を経験してもなお、釜石の海を愛そうとしているのだろう。

片田敏孝

昭和35年 岐阜県生まれ

東京大学大学院情報学環 特任教授
日本災害情報学会 会長

平成2年：豊橋技術科学大学大学院博士課程修了
平成2年：東海総合研究所 研究員
平成3年：岐阜大学工学部土木工学科 助手
平成5年：名古屋商科大学商学部 専任講師
平成7年：群馬大学工学部建設工学科 講師
平成9年：群馬大学工学部建設工学科 助教授
平成12年4月～平成13年9月：京都大学防災研究所 客員助教授
平成13年4月～平成14年3月：米国ワシントン大学 客員研究員
平成17年：群馬大学工学部建設工学科 教授
※平成26年：群馬大学大学院理工学府に所属名変更
平成22年：群馬大学広域首都圏防災研究センター センター長
平成29年：東京大学大学院情報学環 特任教授
群馬大学 名誉教授

■委員会・審議会等

- ・内閣府中央防災会議
- 「災害時の避難に関する専門調査会」委員
- ・文部科学省：「科学技術・学術審議会」専門委員
- ・総務省消防庁「消防審議会」委員
- ・国土交通省：「水害ハザードマップ検討委員会」委員長
- ・気象庁：「気象業務の評価に関する懇談会」委員などを歴任

■受賞歴

- 平成12年度 日本自然災害学会学術賞、横山科学技術賞
- 平成14年度 国際自然災害学会賞、土木学会論文賞
- 平成19年度 文部科学大臣表彰科学技術賞
- 平成23年度 日本教育再興連盟賞、日本災害情報学会 廣井賞
- 平成24年度 内閣総理大臣表彰（防災功労者）、内閣総理大臣表彰（海洋立国推進功労者）ヘルシー・ソサエティ賞
- 平成25年度 宮沢賢治 イーハトーブ賞
- 平成27年度 和歌山県知事表彰

■著書

- ・「人に寄り添う防災」 集英社新書
- ・「人が死なない防災」 集英社新書
- ・「3.11釜石からの教訓 命を守る教育」PHP 研究所
- ・「子どもたちに『生き抜く力』を～釜石の事例に学ぶ津波防災教育～」 フレーベル館
- ・「みんなを守るいのちの授業～大つなみと釜石の子どもたち～」 NHK 出版

専門は災害情報学・災害社会工学。
災害への危機管理対応、災害情報伝達、防災教育、避難誘導策のあり方等について研究するとともに、地域での防災活動を全国各地で展開している。特に防災教育については、地域防災と連携した育みの環境ととらえた活動を展開している。また地域防災については、地域の災害文化として、災いをやり過ぎず知恵や災害に立ち向かう主体的姿勢の地域での定着を図ってきた。これら一連の活動が認められ、平成24年には防災の功労者として内閣総理大臣表彰を受賞、さらに同年海洋立国日本の推進への功労者としても、内閣総理大臣表彰を受賞している。また平成26年には皇居に招かれ天皇皇后両陛下にご進講もしている。

また、内閣府中央防災会議や中央教育審議会をはじめ、国・外郭団体・地方自治体の多数の委員会、審議会に携わり、研究成果を紹介しながら防災行政の推進にあたっている。主な学会活動として、日本災害情報学会会長、日本自然災害学会理事がある。

1 章

大津波を生き抜いた子どもたちと 釜石小学校の防災教育

加藤 孔子

1 はじめに

2011年3月11日(金)午後2時46分に発生した東日本大震災。当時、私は震災で甚大な被害を受けた釜石市の釜石小学校に校長として勤めておりました。釜石小学校は釜石港、釜石市役所等がある市の中心部を学区とする学校で、海から約1.3km 海拔約15mの高台にあります。学区は津波により壊滅的な被害を受けましたが、【図-1】学校は高台にありましたので、校舎は無事でした。



【図-1】東日本大震災による釜石小学校学区の浸水域

釜石小学校 ○

地図：東日本大震災 釜石市証言・記録集より引用

しかし、あの日3月11日(金)は、釜石小学校は午前中の授業4時間終了後、給食、午後1時に児童は完全下校という日程の午前授業の日でした。実はその2日前の3月9日(水)も午前授業で午後1時下校の予定でした。ところが、3月9日(水)午前11時45分に震度4の地震が起り、釜石市は津波注意報が発令されました。その時は授業中で子どもたちは学校にいましたので、無

事でした。その時の学校の対応は、各学級では窓や入り口を開け、揺れが収まるまで机下等に潜り、身の安全を確保しました。その後、津波注意報が発令されました。揺れが収まった後、教職員を緊急招集し、欠席児童の家に連絡をし、無事を確認、さらに津波注意報が発令されているので避難場所に避難するよう保護者に促しました。学校にいる子どもたちは、津波注意報が解除になる15時まで下校させず、学校に留めておきました。

だから、3月11日(金)は「今日こそは遊べるぞ。」と、張り切って下校した子どもたちでした。

午後2時46分。巨大地震が起りました。明らかにいつもの地震とは違う大きな揺れ、長い揺れでした。揺れている間に電気が消えました。釜石小学校児童184名は、すでに家に帰っていたり、家に帰ってから公園や友達の家等に遊びに行っていたり、まだ下校途中で歩いていたりで、それぞれ、ばらばらのところにいました。家にも大人と一緒にいるとは限りません。驚いたことに、港で魚釣りをしていた子どもたちもいました。これらは震災後に聞いた話で、あの時は、子どもたちがどこにいてどうしているか、避難できただろうか、知る由もありませんでした。子どもたちのことが心配でしたが、学校坂の下まで迫り来る大津波にどうすることもできませんでした。釜石小学校は、避難場所*・避難所**に指定されていなかったので、私達教職員は、地震発生直後から避難所対応をしました。校舎内外の安全点検、車の誘導、教室の机椅子を廊下に出す、ござやマットを敷く、表示を書く、備蓄毛布を運ぶ。校庭に設置されていた自主防災会の倉庫に保管していた備蓄毛布は100枚だけで、最大700人もの避難者にはど

避難場所*：災害が発生した時、または発生するおそれがある場合に急いで避難する場所

避難所**：災害の危険性があり、避難した住民等を災害の危険性がなくなるまでに必要な間滞在させ、又は災害により家に戻られなくなった住民等を一時的に滞在させるための施設

こにも足りませんでした。

午後4時に、学校（校長、副校長）、市（地域福祉課課長）、地域（町内会長、自主防災会会長）の3者により、釜石小学校避難所対策本部を設置しました。まず、生きるために必要なこと、暗くなる前にしなければならないことを確認しました。一番は電気です。これから間もなく暗くなります。自主防災会の倉庫に発電機が2台保管してありましたので、男性の先生方が発電機から、各部屋に一つずつ明かりをつける作業を行いました。それから水です。この後、断水になります。これは女性の先生方が学校中の鍋や、やかん、バケツをかき集め、飲み水とトイレの水を確保しました。それから、3月でもあの日はとても寒かったので、電気を使わずに使用できるストーブが必要でした。町内会長さんが学校周辺の津波に合わなかった山側の家からストーブを借りに歩いてくださいました。もうすでに、薄暗くなっていて日暮れまで時間がありませんでした。みんな必死でした。少しでも寒さ対策になるように、学校中の暗幕や、タオル、段ボールなど、手当たりしだいかき集めましたが、どこにも足りませんでした。

その日の夜は、夜中まで、水の引いた街中から、びしょ濡れ、泥だらけで避難してくる方々の対応をしました。

夜の避難所で、様々な情報も入ってきました。「郵便局のあたりで、釜小ジャージを着た子が3～4人流されたようだよ。」等々、信じたくない情報でしたが、この大津波に小さな小学生たちは…。最悪の事態になることも考えざるを得ませんでした。

校庭に出てみると、学校のある高台から見えたものは、灯りが消えた暗黒の街でした。遠くに火事が起こっているのが見えました。空を見上げると、これまでに見たことがないほどの満天の星空が広がっていました。

翌朝3月12日(土)。学校坂を下り、街中を見て絶句しました【写真-1】。まるで夢を見ているようでした。夢であってほしい、夢ならば覚めてほしいと何度思ったか。

このような瓦礫、泥の中を釜石小学校教職員は、全校児童184名の安否確認に歩きました。手分けをして大きな避難所から回りました。瓦礫で通られないところは山道を回りました。



【写真-1】3月12日の学校坂の下の様子
写真提供：谷澤通広氏（当時釜石小学校副校長）

様々な情報が流れているので、聞いた情報だけで生存を確認するのではなく、子どもたちに直接会って、確認をすることにしました。無事だった子どもを確認しては涙を流し、家を流された保護者に会っては涙を流し、教職員それぞれが、自身の家や家族の安否を心配しながらも無我夢中で歩いた時間でした。1日目で184名中174名の無事を確認しました。郵便局のあたりで流されたと噂のあった子どもたちがなかなか見つかりませんでした。2日目も私達は子どもたちを捜しに歩きました。そして2日目の3月13日(日)午後3時2分。釜石小学校184人全員の無事を確認しました。職員室に拍手が起こりました。「奇跡だあ。」と叫んだ先生もいました。夜の避難所対策本部の会議でも地域の方もとても喜んでくれました。

【図-2】は巨大地震発生時に釜石小学校児童184名がどこにいたかを示したものです。



【図-2】3月11日巨大地震発生時の釜石小学校児童の居場所

下校後ばらばらのところにいた子どもたちが全員無事というニュースは『釜石の奇跡』と言われましたが、子どもたちは「奇跡ではない。僕達は学校で学習したことを思い出して行動しただけ。実績です。」と言うのです。それは、miracleの『奇跡』ではなく、震災前から取り組

んでいた釜石小学校の防災教育即ち、processの『軌跡』が効果をもたらしたと考えます。

学校管理下外*の子どもたちがどこに、どのように避難したのか、釜石小学校の防災教育はどんなことをしていたのかを紹介します。

2 釜石小学校児童の避難状況

【図-3】は、巨大地震発生後子どもたちがどのように避難したか、7名の避難経路を示したものです。



【図-3】3月11日巨大地震後の釜石小学校児童の避難経路例

釜石小学校では、震災後の平成24年度に、巨大地震発生時の状況等について、当時在学していた児童にメンタル面を配慮しながら東日本大震災の体験についての作文を募集しました。その結果、68名の児童と当時の教職員、保護者が当時の様子を執筆した東日本大震災釜石小学校記録集『いきいき生きる』を作成しました。

次から紹介する[A]～[G]について、[B]、[D]、[F]、[G]は、その記録集からの引用ですので、小学生当時の作文です。[A]、[C]、[E]については、東日本大震災から10年を迎えようとしていた令和2年に執筆してくれたものですので、大人になったあの時の子どもたちが書いたもので、表現の仕方や漢字の使用についてはばらつきがありますがご了承願います。

学校管理下外*：学校の教育計画に基づく授業や教育活動、休憩時間、登下校中等の学校管理下以外の場面

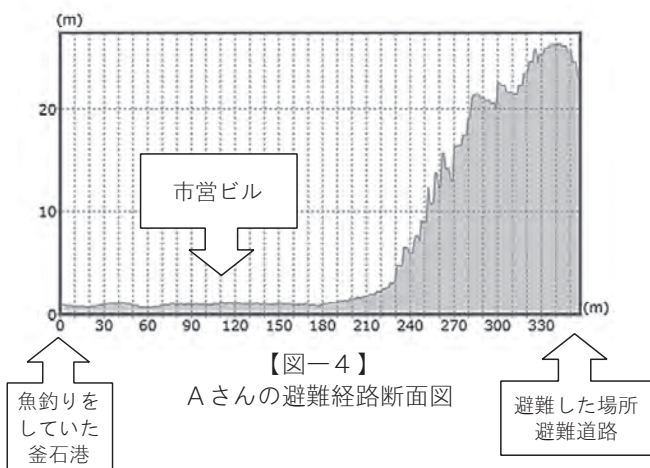
A：当時小学6年生

(令和2年8月A)21歳)

2011年3月11日午後2時46分。私は、卒業前の6年生9人で、釜石港で魚釣りを始めたところでした。大きな地鳴りとともに、経験したことのない大きな揺れを感じました。立っていたコンクリートは地割れし、周りの電柱が倒れていきました。自分のことなのにまるで、映画を見ているようでした。

みんなで近くの市営ビルに避難することになりました。そこには大人もいたので、少しほっとしました。しかし、海の水が引いていくのが見えたのです。おばあちゃんが「海の底が見えたら大きな津波が来る。」と話していたことを思い出しました。見る見るうちに、波がどんどん引いていき、海の底が見えました。「大きい津波が来る。」と確信しました。学校の勉強で50cmの波でも人は流されることも思い出しました。この時、私は12才で初めて、死への覚悟をしました。

その時、こういう高いビルは波が来たら孤立する映像も思い出し、「もっと遠くに逃げた方がいいんじゃない？」とみんなに言いました。そこでみんなで話し合い、「今日の地震は異常だよ。」「ここの方が近いよ。」…あとはどうやって走ったのか覚えていませんが、浜町の避難道路に逃げて、みんな助かりました。とにかく必死で、何日たって母親に会えたのかも覚えていませんが、10年たっても一生忘れることのできない出来事でした。



B：当時小学4年生

(東日本大震災釜石小学校記録集「いきいき生きる」より
平成24年3月B)小学校5年生の時の作文)

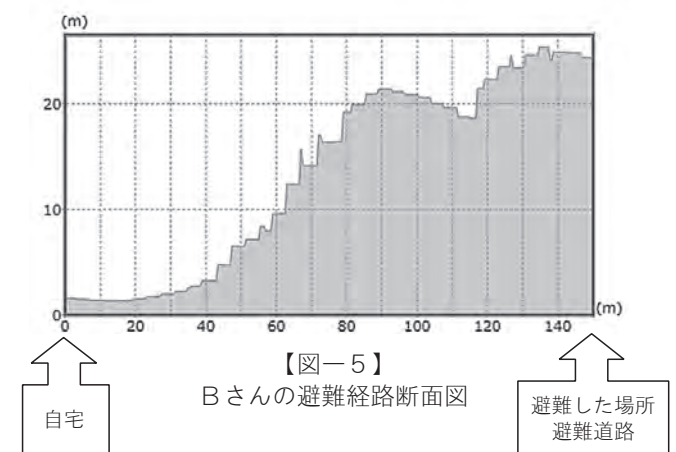
ぼくは、あの時、弟と祖母と3人で家にいました。巨大地震発生時、こたつでゲームをしていたので、こたつにもぐりました。食器が落ちてきた時、家具がたおれて下じきになったらどうしようと思ってこわかったです。

ゆれがおさまった後、ぼくはすぐに幼稚園児の弟にジャンパーを着せて、避難道路に向かって走りました。避難道路について少しして、出かけていた祖父と仕事に行っていた母と会えました。避難道路には多くの人が避難していました。

海の方を見たら、津波が見えて、防波堤をこえた波が白い線のように押し寄せてきて、家や車をのみこみました。自分の家ものみこまれてしまいました。その時、ぼくは、これからどうやって生きていくのかがわからなくなって、涙が止まりませんでした。

その後、避難所の仙寿院に行き、そこで、兄と父と合流しました。みんなの無事がわかってうれしかったです。家が流されてしまったけれど、友達がいて頑張ることができました。

たくさんの人に支援をもらって、食べることもできたし、服をもらって着がえることもできたし、ありがたいと思いました。



【C】：当時小学6年生

(令和2年8月【C】22歳)

あの日、ぼくは、スポ少野球の仲間と友達の家で遊んでいました。巨大地震発生時にはみんななるべく物のないところ（階段）に行き、自分のバックで頭を守り、地震が収まるのを待ちました。防災無線で「大津波警報」と言っていたので、友達と友達の弟とその友達総勢15人で国道45号を天神側へかけ上がりました。あたりを見回すと、電柱が傾き、信号が消え、車両は渋滞し、まるで、この世とは思えませんでした。

避難した場所は旧釜石小跡地です。（当時は浜っ子グラウンドと呼んでいました。）最初はこの友達の家から一番近い避難場所は避難道路なのですが、そこに行くには、海に近いところを走ることになるので、旧釜石小跡地に避難することしました。（詳細は第2章）

旧釜石小跡地には多くの人が集まり、泣いている人、安堵する人など様々でした。そのあと、避難所の仙寿院に歩いて行きました。

【D】：当時小学4年生

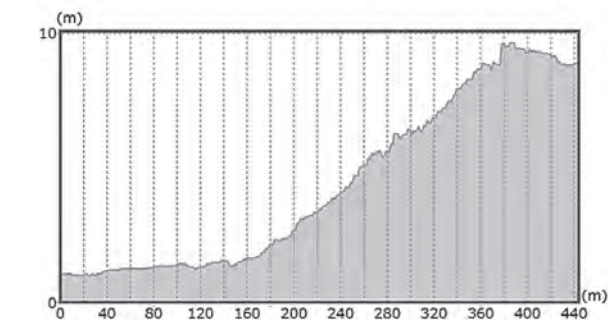
(東日本大震災釜石小学校記録集「いきいき生きる」より
平成24年3月【D】小学校5年生の時の作文)

ぼくは、地震の時、祖父母が経営しているお店にいました。部屋で遊んでいると、今まで経験したことのないゆれで、部屋やお店の中のものがたくさん落ちてきたので、急いでテーブルの下にかくれました。

2日前にも大きな地震があって、先生に「次に大きな地震があったら、津波が来るから逃げるように。」と言われたのを思い出して、祖父母に「早く逃げよう！」と言いました。大津波警報が出て、本当に逃げなければならないとあせりました。祖父が店の中の片づけをやめないで、待ち切れずに何度も「早く！」と言いました。近くの高台にあるお寺に避難することにしたのですが、目の不自由な祖母が転ばないようにゆっくりと歩いていたので、遠く感じました。とちゅうでまた大きな地震があって、トラックがかたむいてきたり、電柱がたおれそうになっていたりしてこわかったです。

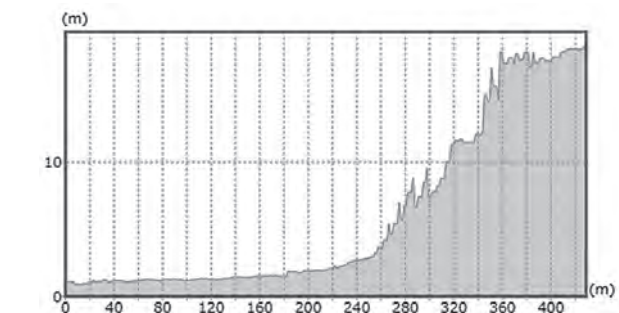
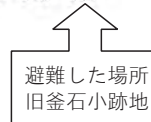
到着して5分くらいで大津波が来ました。さっきまでいた場所が波にのみこまれて、家や車が流されるのを見ました。もう少しのんびりしていたら間に合わなかったので、急いで逃げるのができてよかったです。

自分の命、祖父母の命、みんなの命を守れてよかったです。



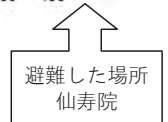
【図-6】

Cさんの避難経路断面図



【図-7】

Dさんの避難経路断面図



E：当時小学5年生

(令和2年8月E20歳)

私は、震災のあった3月11日、友達の家で友達とゲームをしていました。14時46分、ゆれ始めはみんな半分ふざけたように机の下にもぐっていました。しかし地面の唸る音、棚から落ちてくる物や食器、いつまでも終わらない揺れに、この地震がいつもの地震じゃないことは、子どもであった私達にもわかりました。

しばらくこたつやテーブルの下にいた私は、友達の家からすぐ近くの大只越公園に避難しました。母とそこで合流しました。近くでワンセグテレビを見ていた人の画面をのぞき込むと、見ていた人が「これ、サワケンじゃないか…？」と言いました。それは、その時私達がいた公園から1kmほどのところにある会社で、2階の建物の看板が水面から見えかくれしていたのです。皆が呆然としている時、公園の通りの突き当たり、その時私達のいる目と鼻の先の路地から、波が車や家を巻き込んで滝のように飛び出してきました。知り合いのお母さんの「走れ！！」という声で子どもたちはいっせいに高台へ向かって走り出しました。

今思えば、『津波が来たら高いところへ』。避難訓練で身につけていたこの意識のおかげで、パニックを起こす子どもや親を探して止まる子どももおらず、それぞれが夢中で高いところへ向かって駆け出せたのではないかと思います。

あの日はとても寒い日で、上へ上ったあとは皆震えていました。裁判所の方が中に入れてくださいました。

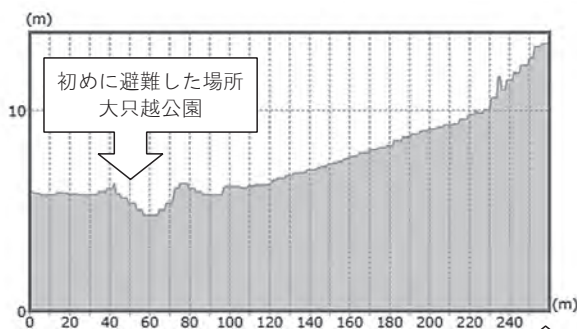
F：当時小学5年生

(東日本大震災釜石小学校記録集「いきいき生きる」より
平成24年3月F小学校6年生の時の作文)

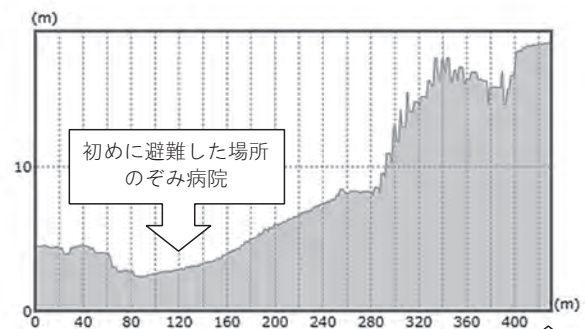
あの日は、学校が5時間授業だったので友達と遊んでいました。そしたら、とつぜん、「ゴゴォ」と大きな地響きがなり響きました。ぼくは、びっくりしてパニックになってしまいました。友達が「のぞみ病院に行くぞ。」と言いました。ぼくは、お父さんとお母さんが心配だったので、「おれは家に帰る。」と言いました。しかし、友達に、「家に帰ったら死んでしまうかもしれないんだぞ。」とおこられたので、ぼくはみんなについていきました。

のぞみ病院で、大人の人達がテレビを見ていました。ぼく達も見たら、友達の家が津波で流れていくところが見えました。ぼくはお父さんとお母さんは大丈夫か心配でした。その時「津波がきたぞー！」と聞こえました。ぼくは1階を見ました。すると、チョロチョロと流れてくる波が見えました。

ぼく達は、病院の上の橋を渡って薬師公園に行きました。そこで、お父さんお母さんが無事ということを知ってほっとしました。3月11日のうちにお父さんとお母さんに会えたのでよかったです。もうおそろしい体験はしたくないです。



【図-8】
Eさんの避難経路断面図



【図-9】
Fさんの避難経路断面図

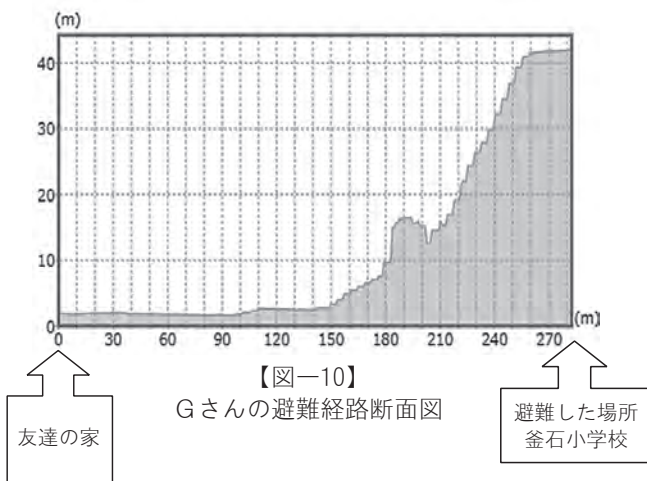
G：当時小学5年生

(東日本大震災釜石小学校記録集「いきいき生きる」より
平成24年3月G小学校6年生の時の作文)

3月11日、ぼくは友達の家に行きました。友達の家に着いた時、最初はこきざみなたてゆれでした。「地震だ・・・。」と思った時、ドンッ」と大きな音とともに、激しい地震がぼく達をおそいました。

ゆれがおさまったら、外で大津波警報が流れました。ぼくは、津波なんてせいぜい、50センチとっていたけど、警報で6メートルと聞き取り、ぼく達は、学校に避難しました。外に出ると、消防車がサイレンを鳴らし、走り回っていました。サイレンが聞こえ終わると、訓練で聞くサイレンが鳴り響きました。これが3月11日のきょうふです。でももっとおそろしい災害がまだまだ続きました。

避難した学校で窓の外を見ました。津波です。想像の倍以上でした。次々流されてくる家や木。すごい音で家をこわしていました。その夜は、寒さと空腹でなかなかねむれませんでした。



3 釜石小学校の『軌跡』

前述のA～Gのように、下校後ばらばらのところにいた釜石小学校全校児童184名は、あの大津波を生き抜きました。自分で自分の命を守り抜いたのです。自分の命だけでなく、家族の命、友達の命をも守った子もいました。

ここからは、釜石小学校の『軌跡』＝釜石小学校の『防災教育』を紹介します。

釜石小学校は、私が校長として初めて赴任した学校です。平成20年度第1回釜石市小中学校長会議で当時の教育長河東真澄氏が「近い将来99.9%の確率で必ず宮城県沖地震が起こる。学校はそれに備えておくように。」というお話をされました。この話を受けて私は、自分の学校でどのようにするかを考え始めました。まず、学校に戻り、前校長から引き継いだ学校経営を見直しました。そこで、学校経営の中に防災教育を位置づけました。その具体策が以下の3点です。

(1) ぼくの わたしの津波防災安全マップ作り

「ぼくの わたしの津波防災安全マップ作り」は以下のような手順で行いました。

① 各自のマイマップ作成

1学期に、低学年は親子で、3年生以上は自分で、家から学校までの通学路の近くの津波避難場所を調べ、自分の地図P17【図-11】に書き込みます。また、「ここは、大きな地震が起こると、建物の壁が落ちてきそうで危険」等と、危険個所も書き込みます。

② グループで確認

5・6年の子どもたちは、下校時に地区ごとの小グループでそれぞれが調べた避難場所や危険個所を確認して歩きます【写真-3】。

③ 大きな地図の作成

総合の時間や放課後に、さらに大きな地区ごとのグループで、①、②で調べたことを交流しながら、地区ごとの大きな地図に、避難場所のマークや危険個所を書いた付箋紙を貼ります【写真-4】。

④ 校舎内に掲示

出来上がったマップを校舎内に掲示します【写真-5】。



【写真－3】危険箇所を確かめる児童



【写真－4】話し合いながら大きな地図に書き込む児童



【写真－5】校舎内に掲示した地図

このマップ作りは、私が釜石小学校に赴任する前年度まで教頭として勤務していた内陸の学校で「不審者マップ作り」に取り組んでいたので、その手法を「津波バージョン」に応用したものです。

平成20年度に、マップ作りを始めるにあたって、児童用マップ【図－11】と、保護者向けと児童向けにマップ作りの解説【資料－1】を配布しました。平成20年度から取組を始め、地図や子どもたちの活動や作業内容にも改善を加えていきました。また、釜石市の地域会議*では、【資料－2】の資料を配布し、学校の防災教育について話をし、これらの活動を共有しました。

P17、18に児童用のマップとその資料を示します。

マップ作りに取り組んだ子どもたちの感想です（平成22年度）。

- ・危ないところがいっぱいあった。（4年男児）
- ・危険なところもたくさんあったけれど、たくさん調べられたし浸水予想範囲が案外広がったので、びっくりしました。（4年女児）
- ・もし、浜町とかにいた時に津波にあっても避難場所を確かめたので心強くなりました。（4年女児）
- ・ぼくの家は釜石港に近いのでとても怖いです。（5年男児）
- ・学区を歩いてみて、他のグループの発表を聞いてみて、私は学区には細かい危険が多いなと思いました。（5年女児）
- ・看板やアーケードなど落ちてきそうなところがあったので、気をつけたいです。ふだん歩いている道にも危険があることに気づいてよかったです。
- ・自分の家が津波浸水予想範囲に入っていたので、もし津波がきたら、危ないので逃げようと思いました。（6年女児）
- ・予想していたよりすごく浸水することにびっくりしたし、こんな近くまでくるのが怖いと思いました。（6年男児）
- ・釜石には避難場所が多いことがわかりました。今までふつうに歩いていただけで、町には危険がたくさんありました。もし、登下校の時に地震が起こったら、近くの避難場所に行こうと思いました。（6年女児）

地域会議*：釜石市では、よりよいまちづくりのために、今後の釜石を住民と行政が相互理解のうえ、「協働」を通してのまちづくりを進めるために市民を中心とした団体「地域会議」が組織されていた。市役所職員、中学校区内の市生活応援センター、学区内の地域代表者、学校、幼稚園保育園等の代表者により構成され、当時は「防災」についてそれぞれの立場からの要望を出したり、共有をしたりしていた。



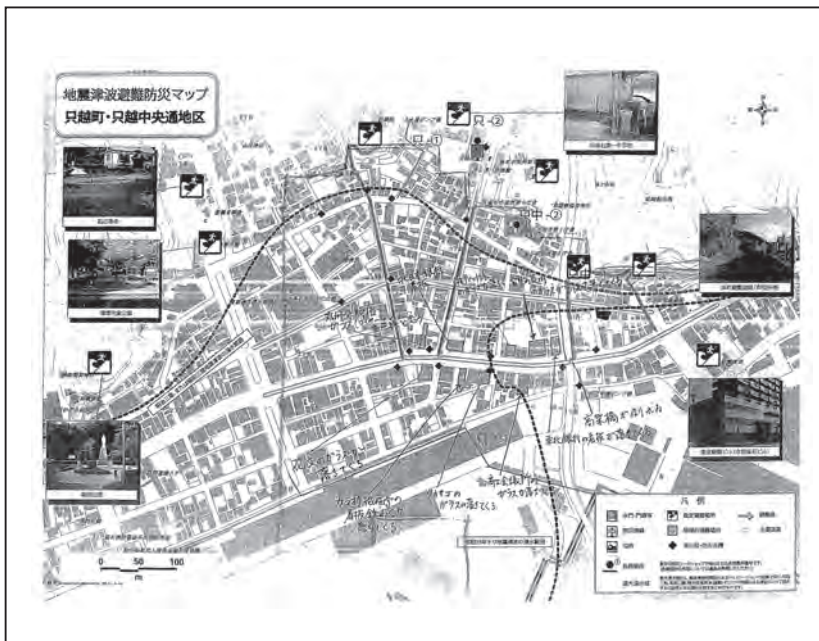
【図-11】平成20年度児童用マップ

私が参加していたみなとかまいし地域会議で、ある1年生女兒の母親が、こんな話をされました。「マップ作りで、娘と一緒に通学路を点検して歩きました。すると、通学路って危険がいっぱいだということがわかりました。登下校の時、娘が一人で歩いている時に、もしも大地震が起こったらと考えると、もうその時は『地域の皆さん、お願い!』と思いました。」

親子で通学路の点検をすることは、子どもが避難場所や危険個所を確認するだけでなく、保護者にとっても大きな意義があることがわかりました。また、この取組を地域会議で共有することで、地域の方や行政が改めて、それぞれの役割の自覚につながったと考えます。

この「ぼくのわたしの津波防災安全マップ作り」の有効性の要因は、次の6点が考えられます。

- ① 子どもたちが、自分の足で歩き、自分の目で確かめて作成したこと。
- ② 保護者も子どもと共に歩き、通学路を確かめたこと。
- ③ 個人で調べたことを、地区の子どもたちで共有したこと。
- ④ 作成した大きなマップを校舎内に掲示し、常に子どもたちが学区、通学路の避難場所や危険個所を目にしていたこと。
- ⑤ 地域会議で学校の取組として、マップ作りを共有していたこと。
- ⑥ 「不審者マップ作り」を「津波防災マップ作り」に応用するという教師の安全教育の理解と工夫があったこと。



【図-12】平成22年度児童用マップ

「ほくの わたしの 安全マップ」をつくろう

みなさん、いつも勉強や運動をがんばってくれてありがとう。一生けんめいがんばるみなさんが、先生たちは大喜びです。
世界は一つ一つつかないもの、それはみなさんの命です。そして、みなさんの命を大切に思っている人は、お家の方々、先生たち、地いきの人たちなど、たくさんいます。大切な命を守るができるようにするため、釜石小学校では、「ほくの わたしの安全マップ」をつくることにします。登下校やだんの生活で、どんなきげんがあるのか、いざというときにはどこにげんがいいのか、しっかりチェックして、みなさんの大切な命がたちまち守ることができるようにしましょう。がんばってください。

☆ マップのつくり方

① きげんなところ、ひなん場所などを確認する。

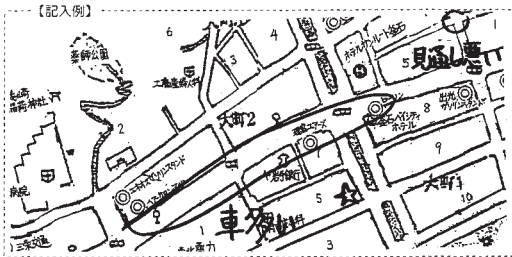
じっさいに歩いてみて、自分の目で、足で、きげんなところやひなん場所などをたしかめましょう。(低学年は、かならず親子で歩くようにします。)

② 自分の家を、赤ペンで、☆印で記入する。

まず、地図を見て、自分の家を赤ペンで書きます。自分の家のマークは、☆印とします。

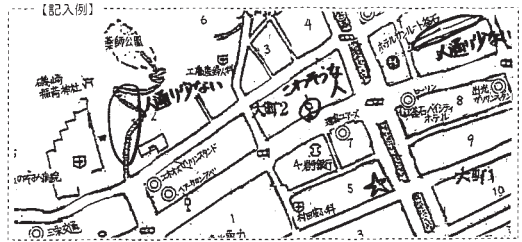
③ 交通事故のきげんについて、記入する。

次の3つの点について、特にきげんだと思われるところに、赤ペンで記入します。記入例のように、文やことばで書くようにします。
・特に、自動車が多く通って、きげんだと思われるところ
・特に、歩道がなく、道はぼろぼろのところ、きげんだと思われるところ
・特に、見通しが悪く、自動車が見えづらくてきげんがあるところ



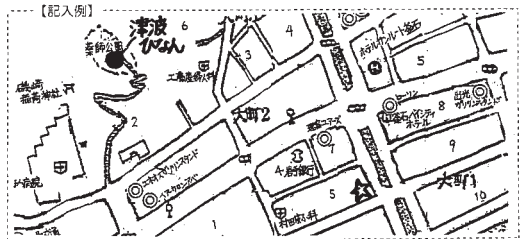
④ 人の事故のきげんについて、記入する。

次の3つの点について、特にきげんだと思われるところに、赤ペンで記入します。記入例のように、文やことばで書くようにします。
・特に、人通りが少なく、きげんだと思われるところ
・街灯(がいどう)がなく、特にきげんだと思われるところ
・こわごわな人たちが多く集まっていたり、特にきげんだと思われるところ



⑤ 津波のときにひなんする場所について、記入する。

大きな地震があったときは、津波の発生が考えられます。津波のときには、1分1秒をあらって、すばやくひなんしなければなりません。もしものときに、避難する場所を●(ぬりつぶした赤マル)で記入します。



⑥ 子ども110番の家をかくにんする。

子ども110番の家は、●で記入されています。どこにあるのか、かくにんします。

⑦ 同じ地区の人とかくにんし合う。

しっかり書くことができたか、同じ地区の人と見くらべてみましょう。しっかりとチェックできましたか。

⑧ お家の人と話し合い、先生にいでいしゅうする。

ほかにきげんなところがないか、お家の方と話し合っって地図を完成させます。完成したら、たんじんの先生にいでいしゅうして終わりです。(地図は、学校でチェックしたら、あとで返します。)

【資料一】 児童向けマップづくり解説

釜石小学校の防災教育のねらい

☆ 津波や津波から身を守る仕組みについてよくわかり、命を守ることのできる子に。
☆ いざというときに、協力して困難に立ち向かうことのできる子に。

津波防災教育の全体計画の策定

★ 命を守る学習を教育計画に位置付ける。
・学級活動の時間を中心に
・各教科や道徳、総合的な学習などの関連

地域防災に対するねがい

☆ 子どもたちの津波防災への意識・判断力・行動力を育てるとともに、大人である保護者・地域の方々の防災への意識・行動力等も高めていきたい。

津波から命を守る学習 子どもたちに

全学年・全学級での授業実践 (2, 3学期)



津波が来たらすぐ近くの避難場所に行った方がいいと思います。津波はいつ来るかわからないので、家で準備した方がいいです。(児童の感想より)

安全マップをつくろう (6月下旬)



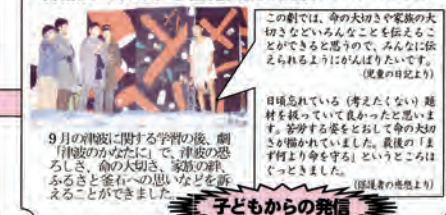
作成にあたっては、親子で歩き、話し合い、一人一人に合った地図を作成しました。来年度は、さらに津波防災に重点をあてて、より詳しい避難マップにしていきたいと考えています。

防災教育講演会 (H20. 11. 8)



防災意識の低さを再認識させられました。日頃から、家族でいろいろな場面での避難の仕方等、シミュレーションしておこうと思いました。津波警報が出たら避難する。津波が来なかったら「良かったわ」と言える地域の連携も必要だと思いました。(保護者の感想より)

津波について、学習発表会で熱演 (H20. 10. 25)



この劇では、命の大切さや家族の大切さなどいろんなことを伝えることができると思っています。みんなに伝えられるようにがんばりたいです。(児童の日記より)

日頃忘れていた(考えたり)避難の準備を改めて思い出しました。お母さんやお父さんとおして命の大切さがわかっていました。最後の「まっすぐ命を守る」というところが好きでした。(保護者の感想より)

下校時避難訓練 (H20. 11. 8)



釜石市の津波防災訓練にご協力をいただき、地蔵ごとに集団下校を行いました。その中で「緊急地震速報→大地震発生」という設定を行いました。地域の方も参加して下さり、防災に力をつけて地域・地域ぐるみで確認する貴重な訓練となりました。

【資料二】 平成20年度地域会議資料

(2) 下校時津波避難訓練

釜石小学校の防災教育の2つ目は下校時津波避難訓練です。

学校は高台にあるので、学校にいるうちは安全です。しかし、登下校時や地域で遊んでいる時に津波が来ることが心配でした。全校朝会等では、そのことを機会あるごとに話していましたが、話だけでは伝わりません。そこで実際に学校から家に帰る途中で、もしも、大きな地震が起こり、津波が来たらどう行動するかという想定避難訓練を行うことを考えました。

そのために、まず、釜石市の防災課（現防災危機管理課）に「釜石小学校の学区だけに緊急地震速報、大津波警報（注意報）の訓練放送を流していただけないものか？」ということをお願いしてみました。課で検討するとのことでしたが、間もなく回答がきました。当時の防災課長さんが「とても大切なことだから、やりましょう。」と言ってくくださったのです。平成20年のことです。この行政の協力がなければ、下校時津波避難訓練は存在していませんでした。下校時津波避難訓練の手順は次のとおりです。

① 地区ごとの下校

下校時津波避難訓練の日は、地区ごとに下校をする【写真一六】。

② 「地震発生」の訓練放送

児童が下校をしている途中に、市防災課から釜石小学校区内に「緊急地震速報」訓練放送を流す。

③ 安全確保

「地震発生」の訓練放送が鳴ったら、子どもたちは、安全な場所に身を寄せ、頭を守る【写真一七】。

④ 近くの避難場所に避難

津波警報の訓練放送が鳴ったら、その場所から最も近い避難場所を6年生のリーダーが考え、指示を出し、急いで避難する【写真一八】。

⑤ 振り返り

避難した場所で担当教員と振り返りをする【写真一九】。



【写真一六】地区ごとに下校
写真提供：釜石市役所



【写真一七】ランドセルで頭を守る児童



【写真一八】避難場所に急ぐ児童
写真提供：釜石市役所



【写真一九】避難場所で振り返りをする児童
写真提供：釜石市役所

このような下校時津波避難訓練を平成20年度から毎年1回行ってきました。この訓練は初めから完璧に実施できたわけではなく、試行錯誤を繰り返しました。綿密な計画や事前の準備、そして実践後の課題を次年度に生かし、改善を

重ねてきました。次に示したのは、平成20年度からの「下校時津波避難訓練」の軌跡です。

◇ 1回目（平成20年11月8日）

初回なので、参観日の下校時に実施しました。親子で下校中に訓練放送が鳴り、避難場所へ避難するという想定でしたが、下校のタイミングが早すぎてしまい、ほとんどの親子が帰宅してから訓練放送が流れることになってしまいました。親子は家から避難場所に避難しましたが、それでは、市の防災訓練と同じことになってしまいました。

◇ 2回目（平成21年10月6日）

子どもたちだけの下校時津波避難訓練としました。地区ごとの集団下校で、学校から遠い地区から順に下校をさせました。これには事前に副校長と教務主任が子どもたちの普段の下校時に、子どもたちの後を歩き、歩く速さを測定し、下校のタイミングの時差を綿密に計画しました。ところが、当日の子どもたちの歩く速度が事前踏査とは異なり、時差がなくなり、皆合流し、ほとんどの地区が同じ避難場所に避難することになってしまったのが反省点でした。

◇ 3回目（平成22年10月5日）

それまでの訓練では、防災課に「〇時〇分に訓練サイレンを流してください。」と時刻を決めて依頼していましたが、子どもたちの歩く速さとサイレンのタイミングがいつも課題となりました。そこで、平成22年度は、時刻を予め決めておくのではなく、途中の通学路で監察していた担当職員がタイミングを見て携帯電話から防災課に連絡をするようにしました。その結果、各地区がそれぞれの場所を考えて避難することができました。

子どもたちはこの3回の経験を経て、あの2011年3月11日を迎えることになりました。あの巨大地震後、子どもたちの多くは学校で行った下校時津波避難訓練を思い出したと言います。そして、自分が今いるところから一番近い避難場所を考えたそうです。さらに前述の[C]のように、近い避難場所ということだけではなく、その経路が海に近いかどうかということも考えることもできていました。

【資料-3】は平成22年度の下校時津波避難訓

練について記している釜石小学校の校報からの抜粋です。

この校報からは、下校時津波避難訓練の3年目の成果と課題、子どもたちの成長を読みとることができます。また、地域との連携で行っていたことも確かな『軌跡』となっていることもわかります。

下校時津波避難訓練！

～ご協力ありがとうございました～

5日（火）に、下校時津波避難訓練を行いました。今年も去年に引き続き、子どもたちだけの訓練です。地区ごとに集団下校で、歩いている途中で、地震を知らせる『緊急地震速報』が鳴ったら、大津波警報が出るまでの間、上から物が落ちてきたり、倒れたりしないような安全な場所で、まず、自分の身を守ります。

それから大津波警報、避難指示が出されたら、最寄りの避難場所に避難するということでした。避難した場所は、それぞれ、薬師公園だったり、青葉公園だったり、アスレチック公園だったりバラバラに、一番近いところを5、6年生が選んで連れて行ってくれました。反省点は、自分の身を守ることがまだよくわかっていない子どもが多いことでした。

それでも、この避難訓練は3年目になりますが、子どもたちも自分で判断して行動する力や、上級生は下級生の世話をするということが自然な形でできてきている事を感じます。保護者の皆様や、地域の皆様にも参加していただきありがとうございました。

釜石小学校を避難場所として避難した子どもたちには、大渡町内会長の荻野さんが「あわてないこと。あわてたら、コップ1杯の水を飲んで落ち着くこと。」「おうちの人と、避難場所を決めておくこと」をお話してくださいました。（文責：校長）

【資料-3】「釜石小だより」No.15 H22.10.7

この下校時津波避難訓練の有効性の要因は、次の7点が考えられます。

- ① 子どもたちが自分で通学路の危険箇所や避難場所を確認したり、作成したマップを校舎内に掲示しておいたりしたことで、避難場所が子どもたちの記憶に残っていて、巨大地震発生後に、実際にいる場所から一番近い避難場所を考え避難する行動をとることができたこと。

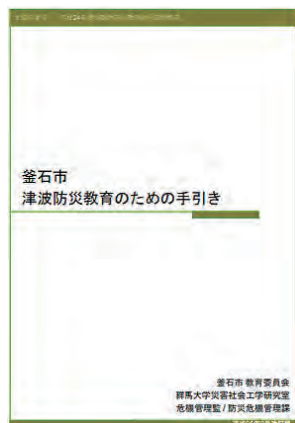
- ② 揺れが収まるまではその場で身を守ることは安全の確保とともに、次の行動に心を落ち着かせることができたこと。
- ③ 保護者や地域の方、行政の方も一緒に訓練に参加してくれたこと。
- ④ 釜石市の防災課がこの訓練に協力してくれたこと。
- ⑤ 釜石市の地域会議に学校の防災教育について発信をし、共有できていたこと。
- ⑥ 1回ごとの訓練の計画と実践、その反省を生かし次に修正をして生み出された下校時津波避難訓練だったこと。
- ⑦ 従来の学校の避難訓練と言えば、校内における地震発生、火災発生の訓練であった学校教育に、新しい発想で下校時津波避難訓練を考え実践したこと。

この訓練は、現在では、全国各地多くの学校で行われていますが、釜石小学校のこの実践が当時では全国初の実践となります。それまで、避難訓練と言えば、学校管理下で行われるものでした。このように学校の中での避難訓練、学校管理下での避難訓練という概念しかなかった学校に新しい概念をもたらしたといえます。

(3) 津波防災授業

釜石小学校の防災教育の3つ目は津波防災授業です。

釜石市では平成20年度に、文部科学省防災教育支援推進プログラム「防災教育支援事業」として、当時群馬大学教授片田敏孝氏（現東京大学）の指導の下、釜石市内の教員がワーキング会議を重ね、「釜石市津波防災教育のための手引き (kmis_04.pdf (jishin.go.jp))」【図-14】を作成しました。



【図-14】釜石市津波防災教育のための手引き
kmis_04.pdf (jishin.go.jp)

この手引きには、「各教科での地震・津波防災に関する知識の取り込み」、「学年別・教育目的別津波防災教育カリキュラム」や、全学年の防災授業の指導案等が掲載されています。さらに群馬大学災害社会工学研究室の協力をいただき、インド洋津波の映像や、明治三陸大津波の時の浸水区域や、50cmの波でも人は流されるといふ実験映像や写真等が付録としてDVDに収められています。授業者が指導資料を手軽に準備できるものとなっていました。授業ではそれらを用いてインパクトの強い授業が可能となりました。平成22年3月に完成し、釜石市内の学校では学年の発達段階に合わせて授業を行いました。

震災2日後に保護者Hさんから「校長先生、学校の防災教育のおかげです。」という話をいただきました。

Hさんの家では、お父さんとお母さんが仕事に出かけていて、6年生と2年生の兄弟が2人で留守番をしていました。大きな地震が起こり、揺れが収まって、リュックに水等を入れて避難しようとしたら、そこは浜の近くの【図-15】、もうすでに家の周りには膝(50cm)くらいまで波がきていました。2年生の弟は外に出ようとします。ところが6年生のお兄ちゃんが「ちょっと待って。津波は50cmくらいの波でも、人は流されてしまうと学校で習ったから、今は外に出ないで、家の屋上に逃げよう。」と外には出ず、3階の屋上に弟を連れて行きました。いわゆる垂直避難です。さらに屋上でも波をかぶったと言います。その時、屋上のフェンスに捕まっていましたが、その捕まり方も学校で習ったようにして、波に流されないように捕まっていたそうです。夜の10時頃に、ようやく波が少し引いて、父親が助けに行くまで、暗く寒い屋上で、洗濯物のシーツをかぶって待っていました。

だからこの母親は、「この子たちの命があるのは、学校の防災教育のおかげです。」と言うのです。このような非常事態に学校の授業を思い出し、垂直避難を判断して自分と弟の命を守ったのです。この6年生の兄が思い出したのは、【図-16】のような実験映像です。



【図-15】Hさんの家



【図-16】50cmの波の実験映像の画像
出典：釜石市津波防災教育のための
手引きDVD資料

津波防災授業が子どもたちにしっかりと伝わっていたのです。この有効性の要因は、次の4点が考えられます。

- ① 「釜石市津波防災教育のための手引き」を作成した釜石市の先生方の知恵と努力があったこと。
- ② 手引きには、群馬大学災害社会工学研究室的の協力を得て、インパクトの強い映像等が付属されており、それを授業の中で使うことができ、効果的な授業ができたこと。
- ③ 手引きに従って、防災授業をしっかりと実践した真摯な先生方がいたこと。
- ④ 授業をしっかりと覚えている、話をしっかりと聴くことのできる子どもたちが育っていたこと。

『釜石の奇跡—いのちを守る授業』(NHK スペシャル班.2014)において、釜石小学校児童の巨大地震発生時の避難行動とその行動の要因として釜石小学校の防災教育について、「自然災害に備えて知識や知恵を身に付けていれば、必ず命を守ることができるということを釜石小学校の子どもたちが示してくれた。」と記されて

います。

『人に寄り添う防災』(片田敏孝2020)においては、釜石小学校の子どもたちは、下校後にもかかわらず、全員が避難して命を守ったこと、さらに、祖父母を説得して避難したこと等について、正常性バイアスを乗り越えて避難行動を直接的に促す行動として、愛他性を利用したナッジと述べられています。防災のコミュニケーションにおいて大切なことは、相手の立場に立って、避難しない理由から、避難する動機付けを提示することであることも記されています。

本章では、大津波を生き抜いた子どもたちの軌跡と釜石小学校の防災教育について述べてきました。

参考・引用文献

- 1 釜石市津波防災教育のための手引き (釜石市教育委員会・釜石市市民生活部防災課・群馬大学災害社会工学研究室.2010)
- 2 人にやさしい防災 (片田敏孝.2020)
- 3 釜石の奇跡 (NHK スペシャル班.2015)
- 4 釜石小学校東日本大震災記録集『いきいき生きる』(釜石小学校.2012)
- 5 東日本大震災 釜石市証言・記録集 伝えたい3.11の記憶 (釜石市.平成28年7月)



【参考】三陸地域を襲った主な地震と津波

(釜石市津波防災教育のための手引きより引用)

発生年月日	名称	地震の規模(M)	被害等
1896(明治29)年 6月15日	明治三陸津波	8.5	地震後約35分で三陸地方一帯に津波が襲来。津波の高さは小白浜で16m、両石で14.6mを記録している。釜石市全体の死者は約6,700人。
1933(昭和8)年 3月3日	昭和三陸津波	8.3	浜では家や舟を流され、町の中では大きな火災が発生した。両石で津波の高さ9.5m、小白浜で6.0mを記録している。釜石市全体の死者は行方不明者を含め約400人。
1952(昭和27)年 3月4日	十勝沖地震津波	8.2	2.5メートルの津波が襲来。釜石魚市場は倒壊している。
1960(昭和35)年 5月24日	チリ地震津波	8.5	地球の反対側南米チリ沖で起こった地震により津波が発生。約23時間かけて日本まで津波がやってきた。津波の高さは小白浜で4.0m、釜石で3.5mを記録している。
1978(昭和53)年 6月12日	宮城県沖	7.5	宮城県沖地震発生。大船渡で震度5を観測。太平洋側で津波が観測されたが、被害の報告はなかった。宮城県では死者28人。
1994(平成6)年 12月28日	三陸はるか沖	7.5	青森県八戸市で震度6。死者3人。東北地方太平洋側に津波警報が発表され、最高が宮古の55cmを観測、各地で津波の報告はされているが、被害は報告されていない。
2003(平成15)年 5月26日	宮城県沖	7.0	震源の深さは71km、大船渡で震度6弱、釜石で震度5強を記録。津波はなかったが、多数の家屋損壊等を生じた。
2003(平成15)年 7月26日	宮城県沖・北部地震	6.2	震源の深さは12kmと浅く、宮城県で震度6弱から6強の地震が同日内に3回発生した。岩手県で震度4、釜石市で震度3を記録。宮城県では甚大な被害を生じた。
2011(平成23)年 3月11日	東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)	9.0	津波の高さ：両石32.8m 釜石市の死者行方不明者：約1,200人。

2章

大津波を生き抜いた子どもたちが語る あの日のこと そして この10年

寺崎幸季 篠原優斗 内金崎愛海

2011年3月11日の東日本大震災の大津波を生き抜いたあの時の子どもたちは、11年という月日を経て、すでに社会人や、大学生、高校生となっています。

「2011team 釜石小ぼうさい」のメンバーは、2020（令和2）年11月、2021（令和3）年11月に「北九州市防災・減災オンライン研修会（リモートシンポジウム）」にシンポジストとして参加する機会をいただきました【図-17】。本章では、そのシンポジウムでの話をもとに、大津波を生き抜いた子どもたちの「あの日のことそして この10年」を紹介します。



【図-17】令和3年度北九州市防災・減災オンライン研修会
提供：北九州市教育委員会

魚釣り（港）からの避難

寺崎幸季

（1章 2 釜石小学校児童の避難状況の[A]）



● あの日・・・

2011年3月11日、当時私は小学校6年生でした。あの日は、友達と海岸で釣りをしていました。

あの日、どうして釣りに行こうかと思ったかという、2日前（3月9日(水)）にも大きな地震*がありました。その時もみんなで釣りに行こうと言っていたのですが、その日は、津波注意報が解除になるまでずっと学校に待機することになって、行こうと思っていた釣りに行けなくなりました。

その2日後、午前授業だった3月11日金曜日に友達9人で釣りに行きました。

小学生の私は、宿題をしない子どもだったので、午前授業が終わって1時半ぐらいまで宿題の居残り勉強をしていました。急いで家に帰り、ランドセルを置いて、海に向かうのですが、その途中で何となく嫌な予感がして、母親に電話しようと思ったあの変な焦りだけは今でも覚えています。

友達9人で集合して海岸に着いて、釣竿を垂らした瞬間にもものすごい地鳴りがして、大きな地響きがしました。それまでの人生で大きな地震をあまり体験したことがなかったので、とてもびっくりして、自分達が立っているところがどンドン地割れしていったり、周りにある電柱

24 地震*：三陸沖地震 2011年3月9日午前11時45分頃三陸沖を震源として発生したM7.3の地震。青森県から福島県の太平洋沿岸に津波注意報が発表され、釜石では0.4mの津波を観測した。2日後の東日本大震災の前震と考えられている。

が倒れていったりする中で、自分達のことなのにまるで映画を見ているような感覚になりました。

ちょうど私達のいたところが海上保安部の近くだったので、海上保安部のおじさん達が上から「危ないからここにいなさい。」と言ってくれたのですが、ここにいる方が危ないと思いました。それは、学校の防災授業で、50cmの波でも人が流されるという映像を見ていたからです。

その時、私は小学校6年生、12歳だったわけですが、あの時、初めて自分はここで「死ぬな」と思いました。

そこで、下校時津波避難訓練で避難道路があることを知っていたので、そこに逃げようとした時に、グループの一人の女の子が、私達がいた港と避難道路の間にある5階建ての市営ビルに避難した方が安全なのではないかという話になりました。でも、こういうビルは、津波が来ると、孤立する映像を見たことがありました。また、私の祖母が「波が大きく引いたら、大きな津波が来るよ。」ということをお話していたことも思い出しました。

だから9人で話し合っ、「絶対ここじゃないほうがいい。」と、私達子どもの判断で、浜町の避難道路に上がって行きました。

そこからは、何日避難所にいたのか、何日親に会えなかったのか全然覚えていません。衝撃的な体験でした。ただ、避難所で食べたものとか、3月11日に給食は何を食べたとか、あの日のことだけは記憶のまま残っています。今でも長い1日が続いていたような感覚です。

● 釜石小学校の防災教育について

2011年3月11日以前に防災教育が小学生の自分にとってどんなものだったかというところ、そんなに、大切には思っていなかった印象があります。でも、学校の多目的ホールで、担任の室先生に、50cmの波でも人は流されるという映像を見せてもらった時に、釜石は1mくらいの津波は以前にもあって（2010年2月27日チリ地震*による津波2月28日）20cm、30cmの津波でもあいうふう流されるのだということを記憶し

ていたので、逃げようという気持ちになった記憶があります。

それから、先生方が下校途中に避難するサイレンを鳴らして、下校させる避難訓練もすごかったです。私は学校行事に一生懸命な子どもではなかったのですが、先生方の一生懸命さが伝わり、絶対参加しなければと思いました。先生方が真剣にやっているのを今でも覚えています。

下校時津波避難訓練や防災の学習は、私は釜石小学校の生徒だったから当たり前だったけれど、他に出てみればそうではないということに気づきました。それは実際今、大人になってわかるのですが、学校によってはやらなくても困らないことなのですが、釜石小学校で防災教育をやってもらったから、私は今生きているのです。先生方は忙しい時間を割いてやってくださって、今大人になってありがたいと思っています。熱心に防災教育をしてくれた先生方のありがたさが身に沁みえています。

先生方が防災教育をしてくれたからこうして私は生きているのだと強く思います。

● この10年

私は、釜石小学校を卒業した後、3つの小学校の学区からなる中学校に入学しました。釜石小学校全員で釜石中学校に進学しました。大変なことたくさんありました。被災している地域の生徒と被災していない地域の生徒が一緒に空間で3年間、ギャップや温度差を感じながら生活するのは、とても大変なことでした。被災しているのは釜石小学校の生徒のみで教室にも被災していない生徒との温度差に悩まされた時期もありました。今でも釜石小学校の同級生達とは年に2回は集まるのですが、そういう「絆」でつながっているのかなと思います。

避難生活を送っていてしばらくしたら、円形脱毛症になり病院へ行くと心的外傷後ストレス障害、PTSDだと診断されました。私はもともと好きだったお笑いを見て、笑っている時だけ震災の辛いことを忘れられました。この経験が今も自分を強くしてくれています。

あの時、小学生ながらも高台から崩れてい

チリ地震*:2010年2月27日、チリ中部沿岸でマグニチュード8.8の地震が発生した。その翌日の28日午前9時33分に青森、岩手、宮城県の太平洋沿岸に津波警報が発令された。釜石港では0.56mの津波を観測した。

く自分の故郷を見てショックをうけた私ですが、そんな私に何かできることがあればと思い、中学時代はまちづくりや市民活動に注力しました。

私は仮設住宅に中学1年生から高校3年生まで住んでいました。約6年間仮設住宅で生活しましたが、「仮設住宅って、なんてつまらないところなんだろう。」と思いました。最初は3年で、復興住宅に移れるということだったのですが、結局6年間プレハブの仮設住宅に住みました。

中学1年生が高校3年生になり、その時に大人の6年間と子どもの6年間の違いの大きさを感じました。そこで、仮設住宅が子どもたちの6年間の中で、暗い思い出になってほしくないと考え、仮設住宅にカラフルなマグネットを貼って、みんなの素敵な思い出にしようと思ったのがきっかけで、高校3年間は「釜石マグネットぬりえプロジェクト」という、住んでいた仮設住宅にハートのマグネットを貼るアートプロジェクトに取り組みました【写真-10】。

それがきっかけで釜石市の市役所の方や災害NPOの方と関わることができて、まちづくりに興味をもつようになり、慶応義塾大学に進学し、中高生時代から始めたまちづくりを専門的に学びました。



【写真-10】「釜石マグネットぬりえプロジェクト」
平成28年「新しい東北」復興創生顕彰個人部門賞を受賞
写真提供：寺崎幸季

● 私は今

大学3年生の時、コロナ禍で、釜石で大学のオンライン授業を受けていた期間に、授業がない日には私は朝早くから漁師さんのところへ手伝いに行っていました。漁師さんが、コロナ禍で「ウニが売れない」と言っていたことがすごく悔しく思いました。そこで漁師さんの仕事の大変さと命をかけているかっこよさに惹かれ、漁師さん達がいきいきと働いていけるような環境を作りたいと思いました。就職活動では、私自身が人生で誰を助けたいか、考えた結果、希望していた水産系の会社に就職することができました。

寺崎 幸季

岩手県釜石市出身

2011（平成23年）年 釜石市立釜石小学校卒業

2017年（岩手県立釜石高校在学中）に自らが発案した「釜石マグネットぬりえプロジェクト」で新しい東北復興創生顕彰 個人部門を受賞

2022年3月慶應義塾大学総合政策学部卒業

2022年4月～水産系会社に勤務

コラム



東日本大震災があったからこそ、
ふるさと釜石が好きになった。
ふるさとが好きだからこそ、
今を頑張っています。

東日本大震災後、多くの出会いがありました。その裏では必ず、どんなに苦しくても前を向き、立ち上がって頑張っている『かっこいい大人たち』が支えてくれていました

これは、復活した釜石の祭りで、高校生だった寺崎さんがボランティアをしていた時に、新聞にコメントをしていたものです。震災後、不眠不休で頑張っていた大人達を子どもたちが見ていてくれたのですね。そして、寺崎さんをはじめ、大津波を生き抜いた子どもたちも今、『かっこいい大人』になっています。(k.k)

避難経路の選択

篠原 優斗

(1章 2 釜石小学校児童の避難状況の[C])



● あの日・・・

私は、東日本大震災の時、小学6年生でした。あの日、私は、友人の家で遊んでいました。その家には、友人の弟（小2年）の友達も来ていました。地震が発生した時は、揺れが収まるまでその家の階段に避難しました。いろいろな物が落ちてきたり、ガラスの破片などが落ちてきたりしたので、それぞれが持ってきていたバッグ等で頭を守り、身の安全を確保していました。地域防災無線で大津波警報が発令されたので、浸水区域であったその友人の家から避難することに決めました。そこからの避難場所については、直線距離で約300mくらいのところにある『避難道路』【図-18】Aと約400mのところにある『旧釜石小学校跡地』【図-18】Bのどちらかを選択しなければなりませんでした。

当時小学6年生の私達は、Bの旧釜石小学校跡地は坂道であること、Aの避難道路の方が近いけれどAに向かうと、行く途中に海に近づいてしまうこと等を考えた結果、Bの旧釜石小学校跡地を選択しました。そして、友人の弟とその友達小学2年生と私達小学6年生、7歳から12歳の小学生総勢12人で走り始めました。

即座に判断できた結果、その旧釜石小学校跡地には私達が1番早く避難していました。それから間もなく私達が避難してきた道は、真っ黒い津波にのみこまれてしまいました。

あの巨大地震発生時に、先生方が教えてくれた避難の仕方や、身の安全の確保の仕方などを小学生である自分達は、知らず知らずのうちに実践していたと思います。

そのあとは、避難所に行って、しばらく食べ物がなかったことや、ひとつのおにぎりを2人で分けたことを覚えています。



【図-18】考えた2通りの避難路

● この10年

中学校では野球に専念していました。その当時から震災をきっかけに人の役に立ちたいと思うようになって、自分の中で何が一番やりたい仕事か考えた時に、消防士だったり警察官だったり海上保安庁とか考えました。その中からオレンジ色の服を着ている人かっこいいなと思うようになりました。また、家族が救急車で運ばれた時の対応がすごくかっこよかったので、自分も消防士になって救急車に乗って最前線で働きたいと思い、消防士を目指しました。専門学校で救急救命士の免許をとり、消防士の試験を受けて合格しました。合格できるまでの勉強や訓練は結構大変でしたが、夢を実現できるように努力しました。

● 私は今

今、消防士4年目です。紺色の制服や救急隊の救急服を着て活動しています。人々の命や安全を守るために全力で頑張っています。

救急車で逼迫した状態の人を搬送し、病院に引き渡す時、その家族が「ありがとうございます。」「命を助けてくれてありがとうございます。」とってくれることがあります。その一言でこの仕事をやっていてよかったと思います。自分は、今、苦しんでいる人やその家族、多くの人を支えていると実感するのです。また、町中パトロールをしてる時などに、小学校の子どもたちが手を振ってくれた時もやりがいを感じます。この仕事に日々、やりがいを感じています。

● 大津波を生き抜いた私達からの伝承

小学校の時の防災の授業で、今でも覚えているのは「50cmの波でも人は流される。」という実験映像です。映像の中の人形が壊れるというようにインパクトが強いものでした。災害は怖いという印象を受けたことを今でも覚えています。

災害の種類・規模・頻度は違えど、「命を守る」という行動は共通して言えることだと思います。災害を経験した私達だからこそ伝えられることを、災害を知らない人達に伝えていく事で今後の災害被害者を1人でも多く減らせると

思います。これからは私達の頑張り所です。頑張っていきましょう！！

篠原 優斗

岩手県釜石市出身

2011(平成23年)年 釜石市立釜石小学校卒業

2019年 釜石大槌地区行政事務組合消防本部
釜石消防署消防士

2021年~釜石大槌地区行政事務組合消防本部
大槌消防署消防士

コラム



避難する途中で、少し遅れ始めた友人K君を、S君がおんぶをして走り、避難しました。

優斗さんはこう言います。「私達がK君の命を救ったのではなくて、私達が、K君に命を救ってもらったのです。」と。

それは、「地震直後、避難するために外に出ようとした私達は、家中がガラスの破片でいっぱい歩けなくて困ってました。そこにK君が来て、私達のズックを全員分運んできてくれたのです。だから、K君のおかげで私達の命があるのです。」と。

お互いがお互いの命を救ったと言えます。この話を聞いて、胸が熱くなりました。(k.k)

家族の命を救う



内金崎 愛海

● あの日・・・

私は震災当時、釜石小学校の3年生でした。震災があった日は、釜石小学校は短縮授業の日で、午前中で授業が終わりました。私は、自宅に帰り、午後3時くらいから友達と私の家で遊ぶ約束をしていたため、おままごとの準備をしていました。

午後2時46分、ほんの少しだけ体に揺れを感じ、「強い風でも吹いたのかな？」と思いました。念のため机の下にもぐりました。数秒後、それまで感じたことのないような強い揺れになりました。そのとき家には私と祖父母の3人がいました。祖父母は、「今まで津波が来ても、家の床くらいまでしか来たことがないから、今回もその程度だ。」と言って、避難しようとしませんでした。部屋の棚からは、物が全部飛び出すように落ちました。大きな揺れは、少し弱まった後、再び強くなり…を繰り返しました。

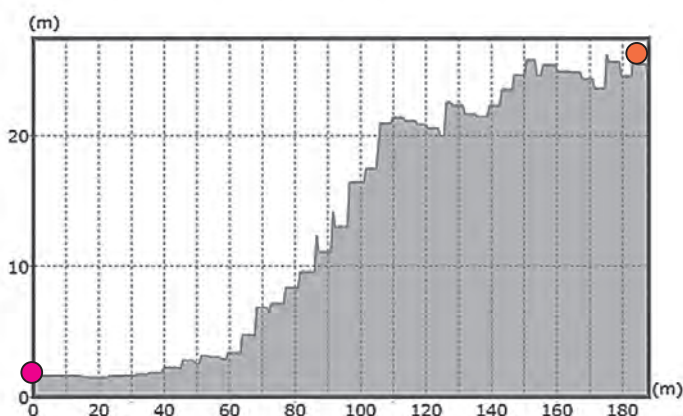
数分後、揺れがやっと収まった時、私は直感で「津波が来る、逃げなきゃ。」と思いました。学校で「大きな地震が来たあとは、必ず津波が来る。」と教わっていたからです。家にいた祖父母に高台に逃げることを説得しましたが、「今まで津波が来ても、一階の床までしか来なかったから大丈夫だ。」と言われました。しかし、その後も必死に説得し、祖父母も仕方なく避難する意思を示してくれました。ちょうどその時、父と母も職場が近かったため自宅に帰ってきました。母は、ペットの様子を見に自宅の中に入ったため、私と、父、祖父母の4人で自宅の裏にある避難道路に避難しました。

しばらくしても母が避難してこなかったため、私は不安で泣いていました。母は、宮城県仙台市の内陸出身で、津波を知らなかったため、津波なんか来るわけがないと思っていたようでした。父が「愛海が泣いている。」と何度かメー

ルを送り、やっと母も避難してくれました。母が避難道路に到着して約1分後、「津波が来るぞお！！」という叫び声が聞こえ、その数秒後には自宅が原型をとどめないほど壊れていました。自分の家が崩れた映像というかその様子は今でも頭の中に鮮明に残っています。



愛海さんの家 ● 避難した場所 ● 避難した経路 →
【図-19】愛海さんの避難経路



【図-20】愛海さんの避難経路の断面図

3月11日の夜は、近所にあった釜石市役所に避難しました。災害が起きた1週間は恐怖のせいか、興奮のせいなのか、夜も全く眠れず、食

べ物も喉を通りませんでした。

その後は釜石中学校、釜石高校と避難所を転々と移動しました。

ストレスのせいか、お腹も痛くなって、そこに災害医療チームのお医者さんが来てくれました。その中の女性の医師の方に「大丈夫だよ。もう安心してね。」と声をかけられて、私もこんなふうな医師になりたいと思いました。

● あれから10年・・・

私は、女医さんに声をかけられたことや震災を経験したことから、命の尊さを知り、人の命を救いたいと思い、医師を目指しました。両親は、私の将来の夢実現のための学習環境を考えてくれ、中学進学と同時に、盛岡市に引っ越しました。

しかし、中学校に入学すると同時にいじめにあいました。「訛りが気持ち悪い」、「ガリ勉でむかつく」など様々な中傷、仲間外れや無視というかなりつらい日々を過ごしました。何度も何度も釜石に帰りたいたいと思いましたが、医師になりたい気持ち、勉強が大好きだという気持ちに揺らぎはなかったので、何とかその思いだけで、3年間、学校に通うことができました。この時期は特に母が私のことを支えてくれました。毎日、学校で言われたことや悩みを聞いてくれて、一緒に怒ったり、泣いたりしてくれました。

辛いことのほうが多かった中学校生活でしたが、毎日の勉強を頑張った結果、岩手県立盛岡第一高等学校に合格することができました。高校では同じ夢を持った人、価値観が似ている人、同級生だけと尊敬できる人など、いろいろな人と出会い、「医師になりたい」という夢から、「岩手県の地域医療を支える医師になりたい」と、より具体的なビジョンを持つことができました。また、部活動では演劇部で役者として活動し、高校の伝統である応援活動にも携わるなど、非常に充実し、楽しい3年間を送ることができました。

高校卒業後の1年間、浪人したときは、何度か心が折れ、医学部を目指すことを諦めようとしたこともありましたが、1年間努力し、第一

志望の岩手医科大学医学部に合格することができました。合格を確認した時は、人生で一番嬉しかったし、震災をきっかけに医師を目指して、10年間その夢を支えて、応援してくれた両親に感謝してもしきれない気持ちでいっぱいでした。

● 私は今

私は今、岩手医科大学医学部で勉強しています。震災をきっかけに医師を目指して、10年間その夢実現に向けて、勉強を頑張ってきました。将来は、産婦人科医になりたいと考えています。卒業後も岩手県で医師として働き、いずれは沿岸地域の病院で勤務し、周産期医療を支えられたらいいと思っています。医学部は1年生のうちからすごく多い科目数をこなさなくてはならないため、とてもハードですが、同じ目標を持った友人と充実した毎日を送っています。

● 大津波を生き抜いた私達からの伝承

釜石小学校の時の下校時津波避難訓練で、その時歩いているところから一番近い避難場所(高い所)へ、上級生に手を引っ張ってもらったのが印象に残っています。

授業では、インドネシアのスマトラ島の津波の映像で、車で逃げ遅れて津波にのまれる様子を見て、「津波ってこんなにこわいんだ。」「人や車を引っ張っていくんだ。」と思ったことを今でも覚えています。あの時の映像も脳裏に焼き付いています。

ここ数年、毎年のように西日本では大雨で多数の死者が出ていることをニュースで見えています。5年前には熊本地震が発生し、九州でも大きな地震が起こるのかと非常に驚きました。

東日本大震災を通して感じたことですが、災害は、いつどこでどんなものが起こるのか、全く予想が出来ません。そのため、避難行動をとることは重要なことだと思います。私も釜石小学校で下校時津波避難訓練を行っていなければ、祖父母や両親の言葉を信じ、高台に避難しなかったと思います。

私が盛岡市に引っ越した後、内陸の学校では大地震を想定した避難訓練はほとんど行われて

いないこと、少し大きい地震が発生した時に、同級生も先生も「揺れが楽しい、面白い。」と言って笑っていることに驚きを隠せませんでした。災害の怖さや避難行動の大切さは、当事者にならないと分からないかもしれません。しかし、当事者になってから後悔するのでは遅いです。今のうちからハザードマップを確認したり、近所の避難所を確認してみたり、ぜひ、自分なりの避難行動をとってください。自分の命を守ってください！

内金崎 愛海

岩手県釜石市出身

2015（平成27年）年 釜石市立釜石小学校卒業

2021（令和3年）年 岩手医科大学医学部入学

コラム



愛海さん、幸季さんから、小学校を卒業してからのいじめにあったことや、温度差の話の聴いて、教育者として非常に大きな怒りと落胆を感じました。

この10年間、釜石小学校を巣立った子どもたちに、いいえ、釜石小学校の子どもたちだけでなく、東日本大震災で被災された方々に、私達が計り知ることができなかった様々なこと、あってはならないことがあったのだということをまざまざと突き付けられたように感じました。

地震や津波のような災害から命を守ることも、人が人を思いやる心の大切さも語り継いでいかなければならないと思うのです。

釜石小学校校歌（いきいき生きる）この校歌のように、みんながいきいきと生きていける学校、社会でありたいと強く思います。

この校歌を口ずさみながら、いつでもどこでも、皆さんを応援し続けようと思います。(k.k)

釜石市立釜石小学校校歌（いきいき生きる）

作詞 井上 ひさし
作曲 宇野 誠一郎

いきいき生きる いきいき生きる
ひとりで立って まっすぐ生きる
困ったときは目をあげて
星をめあてに まっすぐ生きる
息あるうちは いきいき生きる

はっきり話す はっきり話す
びくびくせずに はっきり話す
困ったときはあわてずに
人間についてよく考える
考えたなら はっきり話す

しっかりつかむ しっかりつかむ
まことの智恵を しっかりつかむ
困ったときは手をだして
ともだちの手を しっかりつかむ
手と手をつないで しっかり生きる

3章

子どもたちの命を救ったもの



加藤孔子

学校管理下外にいた子どもたちが、あの大津波から自分で自分の命を守り抜きました。「子どもたちの命を救ったのは何か？」とよく聞かれることがあります。もちろん、1章で紹介した釜石小学校の防災教育の効果は大きいものです。しかし、私はそれだけではないと考えます。防災教育だけで子どもたちが、その場で判断し、行動に移せたとは思ってはいません。学校教育というのは「防災教育」や「〇〇教育」それぞれ単独で「点」として存在しているのではなく、「線」でもなく、「面」でもないのです。私は長年、小学校教育に携わってきた教育者の一人として、東日本大震災という貴重な経験から確信した学校教育で大切なこと「子どもたちの命を救ったもの」について本章で述べたいと思います。

1 先人からの言い伝え

『津波てんでんこ』これは、古くから三陸地方*に伝わる言い伝えです。「津波が来たら、取る物も取り敢えず、肉親にも構わずに、各自てんでんばらばらに一人で高台へと逃げろ。自分の命は自分で守れ」という意味があります。

私は全校朝会で、子どもたちに、明治三陸地震（1896.6.15）や昭和三陸地震（1933.3.3）について、その時の津波の様子や、津波の高さの具体や「津波てんでんこ」等の話をしていました。

釜石小学校のある先生のお子さん（1年生）が、放課後は学童にいました。私達教職員の翌日からの安否確認の中で、学童の子どもたちがなかなか確認できませんでした。

地震直後、学童の子どもたちは、学童の先生や友達と一緒に指定の避難場所に逃げたそうです。ところが想定外でした。そこまで真っ黒い波が追ってきたので、さらにもっと高い場所に走るようになります。そこで指定の避難所ではない簡易裁判所に避難したのです。電話も通じないので、入ってくる情報が少なく、私達はま

ず指定されている避難所から尋ねて歩きました。その中で、学童の子どもたちがどこに避難したか、一体どこにしているのかがなかなかわからなかったのです。2日目（3月13日）に学童の子どもたちが簡易裁判所にいるらしいという噂を聞いて、母親であるその先生に行ってもらいました。その時のことをその先生（母親）は、次頁【資料-4】のように震災記録集に記しています。



【図-20】学童の子どもたちの避難経路
指定避難場所へ避難 → 簡易裁判所へ →

「津波てんでんこ」

S. Y

釜石に来て覚えたこの言葉が、息子を信じる力をくれた。確かに不安な夜で、眠れなかったが、息子はきっと避難していると信じる気持ちを強くしてくれた。

翌朝、安否確認に行く。校長先生の計らいでのぞみ病院と、簡易裁判所に向かった。簡易裁判所に着くと、子どもたちは小さな部屋に集まり、紙コップに入った雑炊を食べていた。その中に息子もいた。涙が溢れそうになり、すぐにでも抱きしめたかったが、まずは教師として児童たちの名前を確認した。

学童の子どもたちは、巨大な地震にどうしていいのかわからず、息子も机の下に隠れながら音読を続けたという。上着を着て二人一組、手をつないで青葉公園に避難。遠くにしづきが見えた。学童の先生が後ろは振り向かないよう指示してくれ、さらに高台に避難。日暮れと共に裁判所に移ったとのこと。

息子は友だちと手をつないで必死に逃げたことが一番の記憶にあるようだ。一人じゃない、みんなと一緒に。手のぬくもりを今でも覚えていると言う。

帰り道、息子に「お母さんが来るまでよく頑張ったね。」と話すと、息子は「だって、全校朝会で校長先生が『津波てんでんこ』の話をしてくれたでしょ。だから、ぼくはお母さんが来てくれると思って待っていたの。」とさらりとした一言。

私も息子も内陸出身。4月から釜石に移り住み、防災マップ作りで地域を知った。下校時津波避難訓練で避難場所や方法を学んだ。3月の市の防災訓練にも参加した。息子は、覚えたての「津波てんでんこ」を弟に教えた。津波が来ても、家族を信じてそれぞれ逃げることに、助かってさえいれば必ず後で会えることを家族で確認した。家族で話していたからこそ、信じることができた。教育の大切さ、教師の言葉の大切さ、訓練の大切さを、身を持って感じた。

東日本大震災釜石小学校記録集『いきいき生きる』より

【資料-4】教職員でもある保護者の手記

「家にもどろうとせず、一人でも近くの避難場所に向かうこと。一人でも、命があれば、生きていれば、お父さん、お母さんが必ず迎えに来てくれるから。」という校長の話をして1年生の子が、しっかりと聞いて覚えていてくれたのです。

明治、昭和の大津波から人々が伝承してきた『津波てんでんこ』の言い伝えを学校教育の中でも伝承していたことも、子どもたちの命を救った一因と言えらると思います。

次のような例もありました。

4年生女兒Iの母親が、学校から帰ってきた娘を家に残し、買い物に出かけたところにあの巨大地震が起きました。【図-21】買い物途中の母親は、娘が一人である家にすぐに戻りたかったそうです。しかし、「家に戻ったのでは自分は津波にのまれるだろう。娘もきっと一人



【図-21】4年生女兒Iと母親のてんでんこ
母親 ● 4年生女兒I ■

で逃げているだろう。」と信じて、その場所から最も近い避難場所に避難しました。「正直な話、片田先生の『津波てんでんこ』の話を聴いても本気で考えたことはありませんでした。で

も、あの時、これこそ『津波てんでんこ』だと実感しました。」と話してくれました。防災講演会の片田教授のお話がこの母親の背中を押してくれたのです。一方、娘[□]も地震直後は動転しましたが、一人で家から近い避難場所に避難していました。

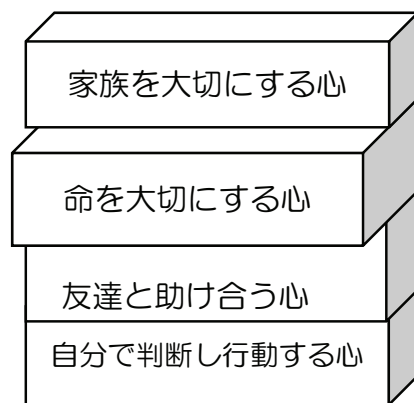
また、前述の魚釣りをしていた[△]は、目の前のビルに避難するか、遠くの避難場所に避難するかどうか話し合っている時に、[△]のおばあさんが「海の底が見えたら大きな津波が来る。」と話していたことを思い出しました。海を見ると、波が大きく引いて海の底が見えてきたということで判断のきっかけとなりました。

このように、先人からの言い伝えや教えは津波記念碑等も含め、他にも多数あります。先人達が今を生きる私達に遺してくれたものを無駄にせずに、また、大津波を生き抜いた子どもたちや東日本大震災を経験した者も今度は新たな先人として言い伝えていかなければならないものと考えます。

2 心

震災後、「子どもたちの命を救ったものは何ですか？」と聞かれたとき、私は「心です。」と答えたことがあります。

子どもたちは、学校での道德の時間や、友達との関わりの中で、大切なもの＝心を学んでいます。道德の時間に「命を大切に作る心」「友達と助け合う心」等々を学習したら、それを自分の『心の引き出し』に蓄えておきます。その蓄えた道德的価値は、将来何かの場面に出会った時、『心の引き出し』【図-22】から引き出して使うのです。道德の時間はそんな時間だと子どもたち、先生方に指導してきました。各学年、年間35時間、道德の時間に学んだ価値を6年間、1時間1時間の学びを『心の引き出し』に蓄えるのです。



【図-22】『心の引き出し』イメージ図

あの日、2011年3月11日午後2時46分。そして、津波がくるまでの時間に子どもたちはいくつかの引き出しから、何を引き出して行動したのでしょうか。実は、この子どもたちは、守ったのは自分の命だけではなかったのです。

2章 篠原優斗さんのコラムで紹介したように、友達同士お互いがお互いを助けた例や1章2の[□]、[□]や2章の内金崎さんのように、祖父母、兄弟家族の避難を促した例などの他にも「自分の命、家族の命、友達の命」皆のかけがえのない命を守ろうと頑張った「心」がたくさん見られました。『心の引き出し』の蓄えが、津波が到達するまでのわずかな時間の中で、自他の命を救うことにつながったと私は考えています。

コラム



先人達が今を生きる私達に遺してくれたもの
～津波伝承碑～

岩手県内にある津波伝承碑に刻まれている教訓をいくつか調べてみましたので、紹介します。

「津波ハ往古ヨリ周期的に襲来スト聞ク
被害地住民ハ永ク此災禍ヲ追憶シ
宜シク向後ヲ警戒スルノ覺悟アルヲ要ス」
昭和8年津浪記念碑 久慈市宇部町
昭和9年建立

「地震がなくとも潮汐が異常に退いたら津波
が来るから早く高い所に避難せよ」
1960年5月24日チリ地震津波記念碑
宮古市日立浜町

「一、想起せ昭和八年三月三日
二、大地震の後には津波に注意せよ
三、三四十年に一度は津波が来るものと思へ
四、急に潮が引いたら警鐘ならせ
五、警鐘聞いたら高い所に」
津波記念碑 大船渡市大船渡町
昭和9年3月3日建立

ただ、ここで確認しておきたいことがあります。震災後、このような事例から、「助けられる人から助ける人へ」という防災教育をよく耳にします。確かに大事なことです。しかし、この言葉が独り歩きしているように感じることがあります。つまり、「災害が起こったら、自分達は助ける人になろう！」ではないのです。大前提は、『自分の命を守ること』です。一人一人がまず、『自分の命を守ること』を実行する。その上で、自分の状況、周りの状況を考え判断することであると考えます。

3 地域の力

巨大地震後、津波襲来までの間に、地域の方や保護者の方が要所要所で釜石小学校の子どもたちに声をかけてくれました。信号が消えて車が渋滞している中、道路を渡れなくて困っていた子どもに「今だよ、渡っておいで。」と言ってくれた地域の方、次々と追ってくる波を見て「ほら逃げろ！」と背中を押してくれたお母さん。多くの「地域の力」に子どもたちの命を救っていただきました。

釜石小学校では、学校の教育活動の中に地域の方とかかわる活動を組み込みました。2008(平成20)年度から「学校支援地域本部事業」(詳細は4章)として、地域の教育力の学校教育への活用を図ってきました。子どもの安全を守る「スクールガード」、読み聞かせ・図書ボランティア、学習サポートの「赤ペン先生」等々。このことは、学習面や安全面での成果はもちろんのこと、何よりも地域の方と、子どもたちが顔を覚え、声を掛け合う関係が深まったことが一番の成果であると考えます。顔を覚え、声を掛け合える関係だったからこそ、あの時、多くの子どもたちが地域の方に声をかけていただいたのです。

また、地域の防災の意識が、学校とのつながりの中でどのように意図的に育まれたのか、ここでは、釜石小学校の防災教育を地域の方々に共有していただくために意図的に行ったこと3点を紹介します。

(1) 防災講演会の開催

当時の釜石市の課題は、大人が避難しようとしなかったことでした。そこで、防災教育を始めた2008(平成20)年度に保護者、地域住民を対象に片田敏孝教授をお招きしての講演会を開催しました【写真-11】。災害情報学・災害社会学を専門とする片田先生のお話は、科学的でもあり、地域の方に温かくもあり、核心を突いたお話でありました。

前述の4年女児¹の母親のように、片田先生のお話の『津波でんでんこ』が聴講した人々の心の中にしっかりと沁みこんでいたのだと思います。



【写真-11】釜石小学校での片田敏孝教授の講演会(H20.11.8)

防災講演会を開催し、その後に親子での下校時津波避難訓練を行ったことは、保護者や地域住民の意識を高めることができたと考えます。

(2) 下校時津波避難訓練への参加

前述の防災講演会の後、初めての試みとして下校時津波避難訓練を行いました。初回は、親子での訓練をしました。学校の子どもたち保護者だけでなく、地域住民、市役所関係者等に案内をし、都合のつく方に参加していただきました。

なお、下校時津波避難訓練では、釜石小学校の学区内だけに訓練放送やサイレンを流してもらうように市の防災課に依頼をしました。防災課では、すぐ対応してくれました。この防災課の理解と協力がなければ、下校時津波避難訓練は実現できなかったことも書き添えておきます。『行政の力』です。

③ 地域会議で共有

1章でも記したように、当時、釜石市主催の地域会議が各中学校区単位で開催されていました。釜石小学校が属する「みなとかまいし地域会議」では、機会ある度に釜石小学校の防災教育の取組を地域の方に理解していただけるように話をしてきました。

地域会議では、1章 P18【資料-2】のような資料を配布しました。この資料では、釜石小学校の防災教育として「防災安全マップ作り」と「下校時津波避難訓練」を掲載しました。また、保護者、地域住民向けに行った防災講演会や学習発表会で6年生が取り組んだ劇「津波のかなたに」も紹介しました。このように、地域会議では、学校の防災教育について情報発信をし、共有を図りましたが、すぐに理解をしていただけたわけではありません。下校時津波避難訓練も当初はそれほど理解を示していなかった地域の方々も、このように会議での情報発信、下校時津波避難訓練への参加依頼等を毎年、繰り返

しているうちに、理解を示してくれるようになりました。3年目には、町内会長さん方が自主的に学校の下校時津波避難訓練への参加を町内の広報車で、呼び掛けてくださっていて、嬉しかったことを覚えています。

④ 校報による防災意識の高揚

【資料-5】は、2011（平成23）年3月10日発行の釜石小学校校報『釜石小だより』No.27の一部です。

釜石市は、P23【参考】で示したように、過去に1933（昭和8）年3月3日に昭和大津波に襲われています。その3月3日にちなんで、釜石市では毎年3月3日早朝に津波を想定した避難訓練が行われていました。

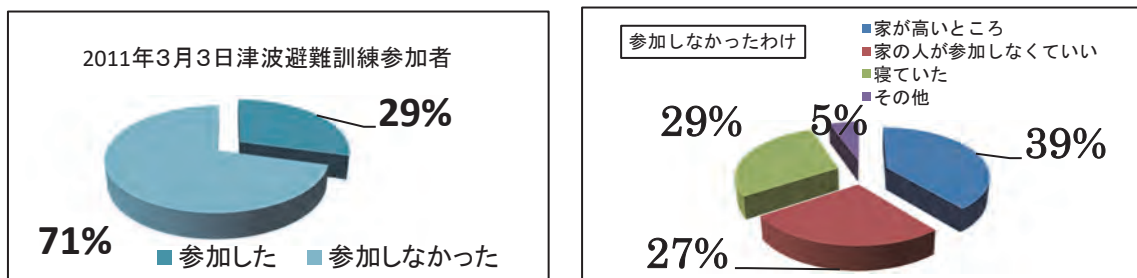
誰もが予測していなかった東日本大震災発災8日前の2011（平成23）年3月3日も例外ではなく、訓練が行われました。釜石小学校児童の訓練への参加状況を調査したところ、参加した児童は全校のわずか29%でした。【資料-5】は、その結果を校報に載せたものです。参加しな

3月3日 津波避難訓練 ご参加ありがとうございました！

1933年（昭和8年）3月3日未明に昭和三陸大津波があったことになみ、今年も釜石市の避難訓練がありました。午前6時に宮城県沖を震源とするマグニチュード8・0、震度5強の地震が発生したという想定で行われました。

朝早く、眠くても頑張って訓練に参加した1年生もいました。素晴らしいですね。

本校の参加状況は次の通りです。43名が参加しました。29%となります。家が高いところにあるから避難しなくてもいい児童は50名。そうすると、半数の児童は避難したこととなりますが、半数約90名は危険だということになります。子どもたちには普段から訓練をしていて、いざという時に自分の身を守る子どもに育ってほしいと思います。



2011. 3. 3 釜石市の避難訓練参加状況調査結果

【資料-5】 2011. 3. 10校報『釜石小だより』No.27より 「市の津波避難訓練参加状況」について

かったわけを見ると、「家が高い所にあるから避難しなくても大丈夫。」「家の人が参加しなくてもいいと言った。」というような理由で参加しなかった児童が多くいました。

このように、校報『釜石小だより』（校長執筆）では、防災に関することも意図的に取り上げてきました。

この校報発行日の翌日に、奇しくもあの東日本大震災が起ころうとは誰が思ったでしょうか。この校報による意識づけが東日本大震災発災時の避難行動に一人でも活かされていたら幸いです。

4 学校の力

1章でも記しましたが、釜石小学校では、防災教育に取り組む以前から、授業で学習したことをしっかりと覚えている、話をしっかりと聴くことのできる子どもたちが育っていました。それは学校教育においてはあたり前のことです。その「あたり前をあたり前にできる。」「あたり前をあたり前に育てる。」そういうことを教職員間で共通理解し、共に育む姿勢が大切となります。手前味噌となりますが、釜石小学校では、先生方は日常の各教科や領域の指導、生徒指導、道德教育、防災教育、全ての教育活動に真摯に取り組む先生方でした。

1章で紹介した『釜石市の防災教育の手引き』があってもそれを真摯に実践する教師がいなければ子どもたちの心に、記憶に残っていなかったと思います。いかに教師の意識が大事なのです。

また、防災教育一つにしてもその必要性を理解し、学校経営にどのように位置づけ、それをどのように組織マネジメントし、カリキュラムをマネジメントしていくのが重要です。それらがうまく機能されていたのが釜石小学校の防災教育だったと言えると思います。この詳細については4章でその実際について紹介します。

5 One team の力

釜石小学校の子どもたち184人の命を救ったのは、防災教育もそうですが、日々のあたり前の教育を真摯に実践してくれた当時の釜石小学校の先生方がいてくれて、心、判断力、聞く力、あたり前のことがあたり前にできる子どもたちが育っていたこと。そしてその土台となる家庭、保護者がいて、地域に見守られ、育てられ、学校、保護者、地域、行政、子どもたちがOneteamだったことが大きな力だったと思います。

震災後、避難所にいた地域の方が私に、「校長先生、おらえの（私の家の）孫の命を救ってくれてありがとうございます。」と深々と頭を下げられました。私達教職員が心一つにして取り組んできたことは間違っていなかったことを実感した瞬間でした。

私達の方こそ、地域の皆様のお力に多くの子どもたちの命を救っていただきました。ありがとうございました。

最後にもう一つ、「運」もあったと思います。神様に感謝。

加藤 孔子 震災時 釜石市立釜石小学校 校長
岩手県盛岡市出身

～略～

平成20年 釜石市立釜石小学校（校長）

平成24年 滝沢市立滝沢東小学校（校長）

平成27年 盛岡市立見前小学校（校長）

平成30年 定年退職

平成31年 岩手大学教員養成支援センター（特命教授）

令和3年～岩手大学教育学研究科教職大学院（特命教授）

令和元年～大震災かまいしの伝承者

令和2年～いのちをつなぐ未来館名誉館長

令和2～3年 内閣府 防災教育周知啓発WG委員

令和2～3年度 北九州市防災・減災教育推進アドバイザー

4章

Team 釜石小（当時の教員等）が語る 防災教育の取組の実際と地域との絆、学校再開

大和田 典 明 室 明 美
寺 田 恵美子 及 川 美香子

大津波を生き抜いた子どもたちを育てたのは、Team 釜石小の教職員です。もちろん、教育はリレーですので、その年に在職していた教職員だけではありません。日々の「あたり前をあたり前にできる。」そういう子どもたちをあたり前に育て、襷をつないだのが Team 釜石小の教職員です。ここでは、当時の Team 釜石小の教員、地域コーディネーターにより、震災前の防災教育や地域とのつながり、震災後の学校再開までの取組等を紹介します。

防災教育 はじめの一步

大和田 典 明
(震災前 釜石小学校 教務主任)



私は、平成19年度から21年度までの3年間、釜石小学校で教務主任を務めました。最初は学力向上を最重点としていたのですが、翌年、加藤校長先生が赴任され、防災教育にも力を入れて取り組まなければならないと指導を受けました。そこで、1学期中に準備を進め、主に3つのことを職員会議に提案しました。1つ目は防災安全マップの作成、2つ目は下校時に津波避難訓練を行うこと、3つ目は教室で行う防災に関する学習を行うことです。

実は、釜石市では、それ以前から防災教育に目が向けられ、例えば、市内の教員が防災に関する講演を聞くなどの取組が行われていました。ですが、私自身は正直なところ、「ほんとに津波が来るんだべが、気にしすぎでねえの？」というふうに思っていました。

だから、校長先生に、防災教育に取り組むことを言われた時に、「ええ？防災教育？」という気持ちもあったのですが、校長先生からその時、命を守る教育の意義とか、釜石市の教員と

しての心構えをご指導いただいたこと、そして、何よりも防災マップや下校時津波避難訓練など、具体的実践例のヒントをいただいたことで、これなら今年度から始めてもできそうかなと思い直し、取り組むこととしました。ただ、それまでに全く実践してこなかったものですから、最初から手探りの状態で試行錯誤を繰り返していたことを覚えています。

ここからは、釜石小学校防災教育の「防災安全マップ作り」、「下校時津波避難訓練」「防災授業」を教務主任としてどのように具現化したかを具体的に紹介します。

1 防災安全マップ作り

防災安全マップ

- ① 各自または親子で調べる
- ② 地区ごとの地図で共有
- ③ 学区全体の大きな地図に

防災安全マップは、自分の通学路を親子や自分自身で調べ大きな地図にまとめていくのですが、当初は、交通安全や野生動物の害などを取り上げ、一般的な防災マップを作成していました。その後、もっと津波防災に特化して、避難場所などを目立たせるようにして改良していきました。地図は大きく、常時掲示されるようなものにできるようにしたいと考え、模造紙を何枚も貼り合わせて学区全体の地図を作ったり、地区ごとの防災マップを作ったりしました。地図のもととなるデータがなかったので、最初は住宅地図を拡大コピーして貼り合わせようとしたのですが、そうすると情報が多過ぎてわかりづらくなってしまいうので、原始的なのですが、最後には住宅地図をプロジェクターで黒板や窓ガラスに投影し、道路だけマジックペンでなぞって作成しました。

出来上がった大きなマップを校舎内に掲示していると子どもたちは興味深そうに「ここ知ってる。」などと避難場所を指さす場面なども見られ、子どもたちに自然な形で方が一の時にどこに逃げられるのかがすり込まれていったのだと思います。

当時の資料を求めて現在（令和2年）の釜石小を訪問しました。昇降口に大きな防災安全マップが掲示されていました。【写真-12】10年以上前に私が作成したような雰囲気防災マップだったので、もしかするとその当時の実践が役に立っているのかなと思うと少し嬉しくなりました。

2 下校時津波避難訓練

下校時津波避難訓練
 H20 講演会后、親子で
 H21 地区ごとに下校
 課題 想定地震発生時のタイミング
 信号の待ち時間、交通安全

2つ目の下校時津波避難訓練も初めての取組でした。

平成20年度は、防災講演会后に、親子での下校時訓練としましたが、市の防災課をお願いをしていた緊急地震速報を流すタイミングと親子が家に着くまでの時間のタイミングが課題となりました。

翌年の平成21年度は、子どもたちだけの下校時訓練としました。災害発生時の行動を考えた時に、低学年児童だけだと様々な危険が予見されることから地区ごとの下校とすることとしました。

釜石小学校の学区は広く、海岸の方に住んでいる子どもの家の方まではかなりの時間がかかります。そこで、子どもたちの下校するタイミングに合わせて、実際に歩いてみて、どのタイミングで地震が発生したことにするのか、どの地域の子どもはどんなところに避難すればよいのかを計画することにしました。釜石小学校の学区は市の中心部なので、信号がたくさんあります。実際に歩いてみてベストのタイミングを計ったつもりでしたが、避難訓練当日は信号で何度も足止めされたり、子どもたちが普段より



【写真-12】釜石小学校 校舎内に掲示されていた防災安全マップ 2020. 10

寄り道をしないでまじめに歩いたりしたので、想定していた通りの避難訓練にはなりませんでした。

その他にも地震が発生した時の安全の確保など反省点が多い避難訓練でしたが、私自身学んだこともあります。それは、家庭や地域との連携の大切さです。震災後に子どもたちだけでなく、多くの大人の命が助かったのは、大人と子ども双方に津波防災に対するねらいが共有されていたためと私は考えます。各町内会に事前周知を図り、子どもたちと一緒に訓練をすることを働きかけていたからです。訓練時に釜石小学校の学区だけに緊急地震速報を流すように行政と連携したこと、参観日に津波防災講演会を実施して保護者への啓発を図ったり、親子で訓練に参加していただいたりしたことなど、様々な取組が功を奏し、より多くの命を守られたのだと思います。そして日常から意図的に行われていた釜石小学校の教育の一番の特徴、「地域とともにある学校づくり」の数々が子どもたち、そして多くの人達の命を救ったのだと思います。この「地域とともにある学校づくり」という考えは、私自身の学校経営の基本的な考え方としてすごく参考になりました。本当に大きな経験をさせていただきました。

3 防災授業

防災授業
カリキュラム作成
※津波防災と釜石のよさを学ぶ学習の
両輪で
【キッズマート、地域の産業（製鉄）、
甲子川の学習など】

最後に3つ目の防災の授業についてです。

まず、津波防災で学ぶ内容をリストアップし、6年間でどの時間にどのように学ばせていくのかカリキュラムを作成することを行いました。津波というものに対する基礎的な知識や逃げる方法などをしっかりと理解させること、道徳の時間の指導を通して「命の大切さ」や「思いやり」、「助け合い」について考えさせることなど、年度途中からのとりかかりだったので、計画を

練り直すのに苦労した思い出があります。

さらにもう一つ意図したのはふるさと釜石のよさを感じることでできる学習を取り入れたことです。津波の怖さだけでなく、釜石のよさ、魅力も一緒に学んでいかなければ、釜石の未来の発展はないと考え、地域の商店街で、子どもたち自身が商品の販売をするキッズマートや甲子川、製鉄についての学習などを取り入れるようにしました。さらにカリキュラムの提示だけで各学級の授業が困ってしまうので、単位時間の略案や必要な教材、資料探しなども行いました。平成22年度からの防災の授業については釜石市教育研究所のワーキンググループから市内一律の提案が行われたので、学校独自で教材研究をしたのは2年間だけでしたが、私にとっては良い経験でした。

コラム



『命てんでんこ』

「大きな地震の後には津波が来る。
津波が来たら、てんでん（それぞれ）に逃げろ。」という教えです。

子どもたちの命を救ったのは、
学校の教えと家庭・地域で聞かされてきた教え、
そして
教えられたことを「行動」へと変容させた子
どもたち自身の素直な心だと思っています。
(N.O)

大和田典明 震災前 釜石小学校教務主任
岩手県盛岡市出身

～略～

平成17年4月～平成22年3月 釜石小学校（教諭）
平成22年 二戸市立御返地小学校（副校長）
平成25年 大船渡市立大船渡北小学校（副校長）
平成27年 八幡平市立寄木小学校（校長）
平成30年 大船渡市立末崎小学校（校長）
令和2年 大船渡市立盛小学校（校長）
令和4年3月 定年退職
令和4年 大船渡市立猪川小学校（再任用）

防災教育・道徳教育の実際

室 明 美

(震災時 釜石小学校 2年担任)



当時、私は釜石小学校で2年担任をしていました。全校児童184名全員の無事が分かった時の感動を今でも思い出します。

地震や津波について何度も学習し、訓練してきたからだと、学校や家庭で行ってきた防災教育の力を強く感じました。その瞬間、「防災教育のおかげだ!」「奇跡だ!」等の言葉を言ったのは、校長先生への感謝の言葉でもありました。

学校では、主に「防災授業」「下校時津波避難訓練」「防災安全マップ作り」の3つを指導しました。

防災教育

1 防災授業

1つ目の「防災授業」では、発達段階に合わせて、当時、教務主任だった大和田先生が、全学年分の指導案を作ってくださいだったので、それを見ながら手探りで授業を始めました。

2年生は、学級活動の時間に、『津波の特徴を知る学習』を行いました。

授業では、まず、津波で被害を受けたところの画像を提示しました【写真-13】。「釜石市津波防災教育の手引き」付属のDVDから引用したもので、「2004年中越地震による被害」の画像です。

① 写真を提示する

画像を見て、子どもたちは、建物や車が簡単に破壊されていることに驚いていました。

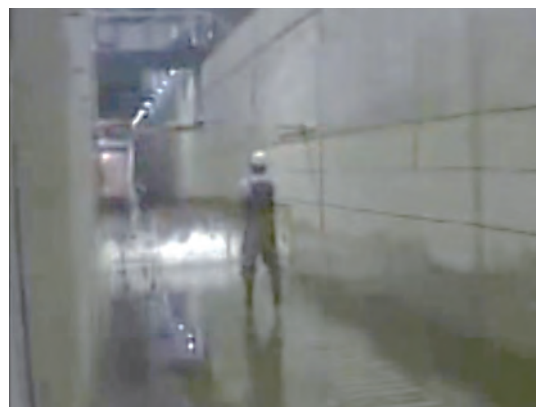
次に、「もし、50cmの津波がきたら逃げられると思いますか?」と聞いてみました。ほとんどの子が水泳を習ったばかりだったので、「泳げるし、50cmなら逃げられる。」と予想していました。



【写真-13】
2004年中越地震による被害画像
出典：釜石市津波防災教育のための手引き DVD 資料

② 映像を提示する

その後、50cmの津波の映像と実際の津波の映像を子どもたちに見せました【図-22】。



【図-22】50cm津波の破壊力 動画
出典：釜石市津波防災教育のための手引き DVD 資料

「映像を見て、気づいたことはありませんか？」の問いかけに対して、子どもたちから「すごい速さだった。」「背の高さくらいの津波だった。」「車も物も流される。」という感想が返ってきました。子どもたちは、「50cmくらいの津波で家がぐちゃぐちゃになるとは思わなかった。人が流されてかわいそうだった。みんな無事でいてほしい。」と、感想を述べていました。

③ 防災マップで確かめる

さらに、授業では、防災マップを見ながら、過去の津波の時、自分の家の場所は被災していたのかを確認しました。そして、地図の中の被災した区域に色を塗りました。その後、自分の家の近くの避難場所、友達の家近くの避難場所を確認しました。

④ 生活場面での自分の行動を考える

最後に、「もし、休みの日に、遊びに行っているときに、津波警報が鳴ったらどうしたらいいですか？」の問いかけに対して、子どもたちは、「近くの避難場所に逃げればよい。」と答えていました。なぜ、逃げなければならないのかもしっかり理解できていました。

2 防災安全マップ作り

2つ目の「防災安全マップ作り」では、学期はじめに、2年生は親子で、家から学校までの通学路の危険な場所や津波避難場所を調べました。

次に、高学年が地区ごとに下校時の危険な場所や避難場所を調べ、最後に、大きなマップに、調べたことを地区ごとに話し合いながら、付箋紙に書いて貼りました。出来上がったら、「ぼく、わたしの防災安全マップ」の発表会を行いました。

学校から配布したベースとなる地図には、津波だけでなく、交通量の多いところや見通しの悪い交差点や、熊が出没する地域などが示されており、広い視野から防災について学ぶことができました。

3 下校時津波避難訓練

3つ目の「下校時津波避難訓練」では、地区ごとに下校をし、途中で「地震発生（市の防災課）」の訓練放送が流れました。

その時に、安全な場所で身をかがめ、揺れが収まるのを待ちます。高学年がよいお手本を見せてくれるので、みんな真剣に取り組みました。2年生の子どもたちもランドセルで頭を守るなど、しっかり自分の身を守っていました。「津波警報（市の防災課訓練放送）」が流れると、6年生のリーダーを中心に最寄りの避難場所はどこか考え、避難しました。

子どもたちは、授業で、学んだことを見事に実践していました。

4 「釜石市津波防災教育の手引き」の作成

「釜石市津波防災教育の手引き」の作成では、釜石市内の先生方の校種、学年ごとワーキンググループで話し合いました。私もその一員として参加させていただきました。

それぞれのワーキンググループでは、メンバーの先生方が、群馬大学（当時）の片田敏孝教授のご指導をいただきながら、どのように防災教育を進めていくかを話し合いました。そして、発達段階に合わせた指導案等を作成しました。

はじめは、賛否両論、様々な意見がありましたが、何度もワーキング部会で話し合う中で、授業の方向性が見えてきたという印象でした。片田教授はいつも、「釜石市は、海の恵みをたくさんうけている素晴らしいところです。ただ、自然の災いが起こることもあります。だからと言って、ふるさとを嫌いにならないでほしい。災いが起きた時に、しっかりふるさとの自然の『おきて』を守って、ふるさとを好きになってほしい。」という話をされていました。その通りだと思いました。

5 おわりに

釜石小学校の子どもたち184名が全員無事だと分かるまでの2日間の間に、デマ情報がたくさん流れました。震災の日の夜には、ラジオで隣町の大船渡市の中学校の生徒20名が行方不明というニュースが流れました。公共の電波まで情報が混乱している状況でした。また、釜石小学校の学区にある郵便局前で、釜石小学校のジャージを着た子ども3~4人が流されたようだという情報が地域の方から入ってきました。その地区に住んでいる子どもを想像して、もしかして、あの子が？と思うと恐ろしくてたまりませんでした。

翌朝12日に、校長先生から、安否確認をする際の指示がありました。「自分の目で確かめて、確認をすること。」でした。また、全校の名簿を学校のホワイトボードに貼り、確認できた子からチェックしていきました。それぞれ分担地区の安否確認を終え、学校に戻るたびに、職員みんなで喜び合いました。生きていることに感謝しかありませんでした。そして、未確認者が10人くらいになり…最後、6年生の1名の子どもの確認がとれた時は、みんなで、涙、涙でした。

防災教育を始める前までは、「地震が起こっても家で家族を待っている。」と答えていた子どもたちです。防災教育の力を強く感じました。私は、岩手県の中でも山に囲まれた町の出身です。小さい頃に津波防災教育を受けた記憶はありません。家族と津波について話したこともありませんでした。だから、津波は昔の出来事くらいにしか思っていないませんでした。しかも、釜石市には、1200億円かけて30年がかりで完成した世界一の堤防がありました。大きさと深さが世界一です。海の底から63mもあると聞いていたので、釜石市民の安心の砦でもありました。世界一の防波堤は、有名でしたので、津波は来ないと思っていました。

私は、釜石市に移り住み、釜石小学校の防災マップ作りで地域を知りました。下校時避難訓練で避難場所や標識、避難する方法を知りました。もし、私がこの防災教育を学んでいなかったら、今でも意識は低いままでした。防災教育

で変わったのは、子どもたちだけではありません。教員である私の考え方も徐々に変わってきました。

安否確認をしているときに、瓦礫をかき分けて歩いていると、「ある銀行」の前で、銀行職員の名札を見つけました。思わず、手に取りながら、この人は、逃げたのだろうか。ここに名札が落ちているということは…。と、苦しい気持ちになったことを今でも覚えています。

今、現在、内陸に住んでいる子どもたちも、将来、仕事で海の近くに勤務する子もあるかもしれません。だからこそ、海の近くに住んでいる子どもたちだけでなく、全ての子どもたちに命を守る防災教育は必要だと、その名札を手にしながら、強く感じました。

184名全員の無事が確認された時、子どもたちへの指導だけではなく、私達教員の意識を変えてくれた防災教育。校長先生が職員会議で、「みなさんには迷惑をかけませんから…」と始めた防災教育。様々なことを思い出して、「防災教育のおかげ」と涙があふれたのを覚えています。

釜石小学校は、校長先生をリーダーに、志をもった熱い先生が多かったのも、日常の笑いの中にも、厳しさもあり、自分が成長できる職場でした。

防災教育が始まった年に、「防災教育って何をすればいいの？」と思っていたところに、教務主任の大和田先生が、全学年の指導案を作ってくださいました。それを基に、みんなで相談しながら地図を作ったり、浸水したところが一目で分かるように教材を工夫したりして、手探りで、授業を行いました。

新しいことにも、どんどん挑戦していく先生が多く、そんな後ろ姿をずっと追いかけていました。当時、釜石小学校で勤務できたことを誇りに思いますし、震災があったからこそ、「教育は力なり」を実感することができました。それが、今の自分の自信にもなっています。

道徳教育の実際

1 年生で実践した道徳の時間を紹介します。

1 資料名：しまのおさるたち（自主自律）

2 あらすじ

ある島に、たくさんのさる達が住んでいた。その中に、だいきちぎるという世話好きのさるがいた。島のさる達は、いつも、だいきちぎるに頼んで食べ物をとってもらい、自分達は何もしないで生活していた。ところが、ある日、だいきちぎるが出かけて、島に帰って来られなくなった。さる達は食べ物がなくなり、どうしたらいいのか分からなくなってしまった。

3 授業の実際

対象：釜石小学校1年

授業日：平成21年2月13日

授業者：室 明美

ねらい

さる達の気持ちに共感させ、自己を見つめることを通して、自立することの大切さに気づき、他人に頼らず自分でできることは自分でやろうとする心情を育てる。

6 授業記録抜粋

T：皆さんは、自分でやらなければならないことはどんなことがありますか。

C：雨戸明け

C：宿題

C：猫の餌やり

C：ごみ捨て

C：犬も餌やり

T：今日の道徳は自分でやらなければならないことのお話です。

~~~~~ (略) ~~~~~

T：さるたちは、だいきちぎるになんでもとってもらっていてどんな気持ちだったでしょう。

C：嬉しい。

C：これからなんでもとってもらって自分たちは面倒だから何もしない。

C：しまのおさるたちは、だいきちぎるになんでもとってもらって、だいきちぎるは力強く優しく親切。自分は何もしなくても困らないからそれでいいかな。

~~~~~ (略) ~~~~~

T：何もしなかったけれど、なにも困らなかったね。でも、だいきちぎるが出かける時、おさるたちはどんな気持ちだったでしょう。

C：すぐ帰ってきてね。

C：だいきちぎるがいなくて何も食べられない。

C：心配だな。

C：これだけあれば大丈夫だ。

T：ところが、嵐になってだいきちぎるが帰って来られなくなりました。どっさりあった食べ物もなくなりました。しまのおサルたちはどんな気持ちだったでしょう。

C：残しておけばよかったな。

C：早く帰ってきて。

C：誰かとってきて。

C：自分で木に登れるとよかったな。

C：だいきちぎると練習をしておけばよかった。

C：木に登る練習をしてみようかな。

~~~~~ (略) ~~~~~

T：皆さんは、お家の人や友達、人に頼らないで自分で頑張ったことがありますか。

C：自転車の練習を頑張った。

C：お手伝い

T：お家の人からも皆さんが人に頼らないで自分でやったことのお手紙が届いています。

〈読む〉

T：皆さんも今日のお話のおさるさん達のように自分のことのできることは自分でやるということをおさるさんの『心の引き出し』にしまっておきましょうね。

C：たくさん実をとってくれているから大丈夫だ。



【写真-14】道徳の授業の様子

このように、道徳の時間には、その時間の価値を自分事として子どもたちの心の引き出しに蓄えてほしいと願いながら授業を積み重ねました。そういう心があの津波襲来時に少しでも実践につながってくれていたら嬉しいです。

室 明美 震災時 釜石小学校2年生担任

岩手県住田町出身

～略～

平成24年 釜石小学校（教諭）

平成24年 大船渡市立猪川小学校（教諭）

平成30年～ 大船渡市立赤崎小学校（教諭）



## 『ぺっこすけっから』

～できることを、できるときに、できるところから～

寺田 恵美子

(震災時 釜石小学校 地域学校協働本部 地域コーディネーター)



私は、平成20年度から釜石小学校支援地域本部（現釜石小学校地域学校協働本部）の地域コーディネーターを務めております。釜石小学校で『ぺっこすけっから』を始めて15年目になります。

『ぺっこすけっから』という言葉をご存じでしょうか？この「ぺっこ」は「少し」、「すけっから」は「助けるから」という岩手県の方言で、『ちょっと助けるから』という意味になります。釜石小学校の先生方や地域の子どもたちのためにという思いと、ちょっとずつの助けが大きな力となるようにとの思いで、活動を続けております。学校支援だよりの名前としても使っており、一部では、そのお便りの事を、親しみをこめて『ぺすけ』と呼んだりしてくれています。

この活動の発足は平成20年に遡ります。

平成20年度に、加藤校長先生の「学校に地域の力を貸してください。」という願いを文部科学省の「学校支援地域本部事業」で実現したものです。この事業は、地域の方々の豊かな経験や知識、技術といった、いわゆる地域の教育力をボランティアの形で活かし、学校教育活動の充実を図ること、また、ボランティアが入ることによって先生方が子どもと向き合う時間をより多くとれるようにすることを目的に始められた事業です。

平成20年度から震災当時に行っていたボランティア活動は、スクールガード見守り隊、図書・読み聞かせボランティア「おひさまの会」、スポーツ支援ボランティア、学習支援ボランティア赤ペン先生、放課後学習ボランティア、キッズマート支援でした。その活動内容を紹介します。

### 1 スクールガード見守り隊

スクールガード見守り隊は地区の老人クラブを中心とした皆さんにより結成されました。以来、雨の日も、風の日も、寒い日も暑い日も毎日、子どもたちの下校時刻前から学校の登校坂を下りたところや、町中の車の出入りの激しいところ、信号の無い交差点等に2人くらいずつで立っていて、子どもたちに「さようなら～。」「気をつけて帰るんだよ。」と声をかけながら、安全を見守ってくださっています。子どもたちも元気よく挨拶をしたり、スクールガードの皆さんとの会話を楽しんだりしています。スクールガードの皆さんは「子どもたちの元気な挨拶に元気をもらっています。」と活動しています。下校時津波避難訓練にも積極的に参加してくれました。

### 2 図書・読み聞かせボランティア

図書・読み聞かせボランティア『おひさまの会』は、図書室の本の修理や児童への本の読み聞かせ、図書室の他に設けられている第2図書館『わくわくルーム』への寄贈図書の受付作業、図書館の飾りつけ等を行っています【写真-15】。



【写真-15】本の受付作業や飾りつけ製作

子どもたちへの読み聞かせは、2人1組で、昼休み時間の20分間に2～3冊の読み聞かせを行います【写真-16】。子どもたちは、大声で笑ったり、「知ってる～」と言ってみたり、また「次は何？」と訊いてきたり、毎回とても楽しみにしてくれています。



【写真-16】読み聞かせ活動

### 3 学習支援ボランティア

#### ① 赤ペン先生

これは、毎週木曜日の放課後10分間、プリントを使った算数の振り返り学習『ぐんぐんタイム』の学習効率を上げるためのもので、赤ペン先生の仕事はおもにまるつけです【写真-17】。子どもたちが丸付けを待つ時間を短縮することができます。間違った問題、わからなかった問題に対する指導は、担任の先生が行います。その結果、子どもたちはどんどん学習を進め、「子どもたちの力が確実についてきている。」と先生方からお話をいただいております。なお、この赤ペン先生は、子どもたちの個人情報を流さないということが原則で、年度始めの活動の際に、お話をし、理解いただいております。



【写真-17】まる付けをする赤ペン先生

#### ② 学習支援ボランティア

この学習支援ボランティアは、生活科や総合学習、社会科、家庭科、図工等の時間に、子どもたちの学習活動を支援しています。

【写真-18】は、4年生の大渡川での水生生物調査の放流の時の様子です。学区内の川に徒歩での移動でしたが、安全面等の支援をしました。この他に、縫物が得意な方が家庭科の時間に支援をして、学校の先生方から、「家庭科のミシン学習等の時は、児童の人数分1人で駆け回っていて大変だったが、ボランティアさんのお陰でとても助かります。」とお話をいただいております。



【写真-18】大渡川での水生生物調査

現在は、釜石小学校の防災教育の「津波防災安全マップ作り」や「下校時津波避難訓練」の際にも、一緒に行動し、安全を見守っています。

#### ③ スポーツ支援ボランティア

体育の時間や、陸上、水泳記録会練習の時間に、タイムを計ったり、スタートの合図を出したり先生方を支援するものです。スポーツの得意の方には模範を示していただいたり、アドバイスをさせていただいたりしています。

#### ④ キッズマート支援ボランティア

釜石小学校では、子どもたちが地元の産業を学び、実際に自分達で、農水産物等の販売をする体験を行っていました。地元の産業の体験や子どもたちの会社の設立等をNPO法人団体の方が指導してくださったものをさらに学校と支援してくださる団体との連携を強める活動をしました。

この事業は、学校にとっては地域の中の大人が学校の教育活動にかかわることで、子どもたちの多様な体験や経験の機会が増え、規範意識やコミュニケーション能力の向上につながり、学習の効率アップや先生方が子どもたちと向き合う時間が取れるようになりました。

地域の人にとっては、生涯学習の成果を生かした自己実現や生きがいづくり、地域の絆づくりにつながることを実感しています。

多くの大人の目で子どもたちを見守ることで、よりきめ細かな教育ができ、教育活動の充実を図ることができると思います。

そして、何よりも、あの巨大地震後に多くの地域の方に、子どもたちが声をかけられ、命を守っていただきましたし、その後の避難所生活でも地域の方と、学校と、子どもたち、保護者、行政が一体となって明日へ向かって歩んでいたのが釜石小学校だったと私は思っています。

15年前、学校と地域をつなぐ先の見えないスタートでしたが、時間とともに地域の方々や保護者の方々のご理解やご協力をいただき、手ごたえを感じながら活動しております。

今後も、できることを、できるときに、できるところから『ぺっこすけっから』を継続していきたいと思っています。

#### 寺田恵美子

震災時 釜石小学校地域学校協働本部  
地域コーディネーター

岩手県盛岡市出身

～略～

平成20年～ 釜石小学校 学校支援地域本部  
地域コーディネーター

平成30年～ 釜石小学校地域学校協働本部  
地域コーディネーター  
(釜石市市民生活部 まちづくり課  
生涯学習係学習支援コーディネーター)

## コラム



・スクールガードさんのお宅にお邪魔した時、

「入って入って。時間あるならどうぞ～」とお誘い頂いたのでお邪魔したら、「これ昨日作ったんだけど食べてみて～」  
「これ持ってって～」

遠くに住んでいる娘さんと同じくらいの年だからと私を娘のように思ってくださっています。

・図書ボラのメンバーの中に裏千家の先生をなさっている方がいて、新年初めての図書ボラの時、お茶碗など一式持って来てくださって、お抹茶をいただきます。手の空いている先生もお誘いしてお抹茶を堪能しました。

・ある夏の日、  
「てらださ～ん」

と若い女性に声をかけられました。お化粧をしておしゃれをしているその女性、「誰だろ？」と思いました。

「〇〇です！」と。

「ええ～〇〇ちゃんなの？すっかり大人になっちゃって！」

「ええ～寺田さん、全然変わってない！」

と嬉しい言葉をくれました。10年経って、社交辞令も覚えて、こっちは年をとるはずですよ。(E.T)

## 震災後の学校再開へ向けた取組

及川 美香子

(震災時 釜石小学校 教務主任)



私は、平成22年度から釜石小学校の教務主任を務めました。本稿では教務主任として震災後から学校再開までに行ったことを記します。

全校児童全員無事の確認をした3月13日以降も、先生方は子どもたちが避難生活をしている避難所に定期的に足を運びました。学校からの連絡は、ポスターやカレンダーの裏紙に書いて、(停電はしばらく続き、パソコンもコピー機も使えなかったので) 避難所や公共施設等に掲示して歩きました。空いている時間には指導要録や通信票を書きました。

卒業式は、年度を越してしまいましたが、4月5日に、避難所であった釜石小学校体育館で行いました。全教職員、保護者、後ろの方には避難している方々が温かく見守る中で、ジャージ、普段着の子どもたちは胸を張って、学校を巣立っていきました。

卒業式を終えると、4月中に学校を再開することを目標に取組を始めました。

当時のデータを見つけた時は、苦労したんだなと思いましたが、あの時は無我夢中で子どもたちのために自分ができること、地域の人のために何かできることはないかという強い思いで過ごしていたように思います。

### 1 学校再開に向けての児童の把握と 迎え入れる準備のこと

#### ① 児童の把握 避難所を歩いて情報収集

加藤校長先生は「子どもと学校、家庭をつなぐのが教師の役目ですよ。」と話されました。

私達教職員の避難所訪問は2名1組のチームで定期的に続けて行いました。子どもたちや保護者に会い、子どもたちの顔を見て、話をし、様子を見て学校からの情報を伝えたり、子ども

たちや家庭の情報をもらったりしました。

教務から先生方をお願いしたことは、子どもたちの居場所を確認して、職員室に用意した全校名簿に記入してもらうことにしました。新たな情報が入り、修正があればその都度書き直すようにしました。避難所の移動や市内外への転校、住居の移動等が毎日のようにたくさんありました。その名簿は再開直前まで活用しました。

また、以下のような調査紙を配布して歩きました。遠方に避難していて配布困難なときは郵送しました。

- ア 入学希望調査、通学校調査
- イ 通学希望調査
- ウ 通学方法調査
- エ 送迎調査
- オ 学用品調査
- カ 被害状況調査書

避難所訪問の時に回収をし、回収したものは集約して、名簿等書き写し、再開に向けての準備をしました。

#### ② 子どもを受け入れる学校の準備

学校再開にあたり、校長先生は、釜石小学校学校避難所の避難者を他の避難所に移動することはされませんでした。震災直後から共に歩んできた地域の方のいる『避難所と学校の共存』を選択されたのでした。それまで、学校と地域、行政が一丸となって、避難所対応をしてきた中で、地域の方々とは震災当日のあの寒くて不安と恐怖に震えた夜も、少しのご飯を分け合って食べた時も、共に乗り越えてきました。その避難所の皆さんを、今ここで他の場所に移動してもらうことはされませんでした。被災したつらい思いの中、気丈に、立ち向かっている避難されている皆さんと、子どもたちが学校に来たら

「おはよう。」「さようなら。」と自然に挨拶を交わしたり、一緒に掃除をしたり交流をすることで、きっと、この子どもたちもそういう大人の姿を目標として 素敵な大人に育っていく、地域の方にとっても、子どもたちの元気が、生きる活力になってくれると考えられたのでした。

そこで、町内会長さんに、避難所の部屋割をしていただきました。その結果、避難所は、体育館と1階部分の全教室を使用し、学校は2～4階を使用することになりました。

8月に避難していた方が全員、仮設住宅や住むところが決まり、釜石小学校避難所が閉鎖されるまで、学校と避難所一緒の生活をしました。

子どもを受け入れる学校として以下のようなことを行いました。

#### ア 教室環境の整備 4月11日

校舎の2階以上の空間に教室を配置しました。その新しく配置した教室に移動する作業を全職員で行い、新しい教室の掃除や整理等を行いました。

旧担任から新担任への引き継ぎの際には、子どもの家の被災状況や家庭状況も引き継ぐようにしました。

#### イ 学用品等の提供 4月14日

4月14日 職員朝会で、校長先生から「気持ちを切り替えて教師として子どもたちを受け入れる準備をしましょう。先生方自身が睡眠等体調管理をして備えるように。」というお話をいただきました。また、子ども一人一人の状況把握、教材やジャージ等持ってこられない子どもへの対応も指示されました。

家が流されて、ランドセルや学用品に始まり、何も持っていない子どもがたくさんいましたので、全国各地から集まった支援の学用品等を職員室前に並べて、そこから必要なものを持って行くように保護者に伝え、事務職員を中心に対応しました。

#### ウ 学校再開前日 4月18日

震災から1か月と7日を経過した4月19日が学校再開（新任式、始業式）となりました。その前日までに、釜石小学校に通学することに決定した家庭に、職員で手分けをして電話をかけ、通学時刻と通学方法の確認をしました。

また、震災を経験した子どもたちを迎える私達教職員向けに臨床心理士を講師に迎え、「心のケア研修会」を行いました。

### ③ 学校再開に関わる教務事務

ここでは、生活時程、時間割、教育課程のことを述べます。

まず初めに、子どもたちのおかれている町の状況についてです。【資料-6】は教務が作成する週計画に記していたコメントです。ここから当時の学区の街の様子が読み取れると思います。

4月18日～22日の週計画の教務コメント  
(4月15日)

来週は子どもたちが登校してきます。出会いを大切に1年間がよりよいものになるようにしたいですね。

さて、町はがれきがあり、倒壊する恐れがある家もあります。また余震が続いており、避難することが必要になることもあります。それも含めて登下校や放課後、安全に過ごせるようにする指導が大切になってきますのでよろしくお願いします。健康に留意することも必要です。マスクをつけての登下校を促し、健康的な生活が送れるようにしましょう。最後に子どもを観察し、少しの変化も報告願います。

【資料-6】週計画の教務からのコメント4月15日

このコメントから、震災から1か月以上たっても、街中は瓦礫など、まだまだ大変な様子であることがわかります。

#### ア 生活時程 4月

これまでの日常の学校の新年度には経験したことのなかった様々なことが子どもたちの登校や、学校生活に影響しました。そのような中で生活時程を考えなければなりませんので、何度も書き換えました。

学校再開の4月19日には、学区外の親戚の家等から通学する子どもたちは、無料バスを利用して登校することになりました。そのバスの時

刻に合わせて9時登校で、40分間授業をし、12時半下校の特別時程にしました。

4月21日からは、バスが2方向に運行されるようになりました。この日から当面の生活時程は8時半から13時半までの特別時程としました。これが5月上旬まで続きました。

生活時程を何度も修正し、教職員、各家庭に知らせることは大変だったけれど、教務として、学校の危機管理運営の貴重な経験をしたと思っています。考える時は「子どもたちのために。」「子どもたちにとってどうなのか。」を忘れずに計画、提案しました。

週計画の教務からのコメントも続けました。

5月9日～5月15日の週計画から

慌ただしい毎日です。数えてみるともう学校が始まって3週間が過ぎました。生活リズムが子どもたちについてきていますか。学級のきまりは徹底できていますか。いつ6校時の授業ができるかはまだわかりませんので、1時間1時間を大事にして子どもたちを育てていけるようによろしくお願いします。

【資料-7】週計画の教務からのコメント5月15日

#### イ 生活時程 5月

5月23日からは、6時間授業ができるようになりました。ようやく45分間授業で、全校朝会がある曜日、読書タイムがある曜日、漢字計算タイムがある曜日などを設定することもできました。1年生、2年生以上に分けての5種類の時程を作りました。

学区外の仮設住宅等から通う子どもも多くいました。居住地の学区の学校に転校してもよいのですが、保護者、子どもの多くは、遠くても「釜石小学校に通いたい。」「同じ被災者同士だから。」と言うのでした。

学区外からは市の教育委員会が手配してくれたスクールバスで通うことになりました。

「バス停から学校までの道路の瓦礫も子どもたちに見せたくない。」という保護者の声もありました。そこで、せめて、私達教職員がバス停に迎えに行き、帰りはバス停まで送っていくことで子どもたちも少しは安心し、気が紛れる

だろうと、校長、副校長、担任外の先生方がバス停までの送迎を行いました。釜石市内は復興関係の車両も多く、定刻通りにバスが到着しないこともあったり、通学に1時間以上もかかったりしました。それでも、私達は、寒い日も暑い日も、雨の日も風の日もバス停で子どもたちを待っていました。バスから笑顔で降りてくる子どもたちの顔を見て、安堵したことを覚えています。

#### ウ 心のケアに配慮した時間割編成 1学期

登下校時だけでなく、私達は子どもたちの心のケアを最優先しました。授業には少人数加配教員、特別支援員、担任外教員を各教室に割り当て、複数の目で子どもたちを見られるように、T T体制の時間割を編成しました。

#### エ 心のケアに配慮した時間割編成 2学期

2学期から、震災加配教員が2名配置になりましたので、再度T T体制による時間割編成を修正しました。

9月から10月にかけては、T T体制を一部変更し、震災加配教員を外国語教材や理科などの教材準備、児童会支援として配置しました。さらに11月から震災加配教員が増員となり、再度時間割を修正しましたが、震災加配教員が増員はとても嬉しいことでした。

#### オ 教育課程

クラブ活動や委員会活動のない日は授業を行う日として、授業時数を確保し、結果的に標準時数を下回る学年はありませんでした。

子どもに関わってはかなり配慮しました。前述の通り、教科ではT T体制、総合的な学習は、震災により地域素材が使えずに限られたものもありましたので、できるものの中で工夫をして取り組みました。

スクールバスについては、全般的に朝は渋滞で、8時15分の始業時に遅れることが度々ありましたが、子どもたちが途中から教室に入って「遅れても大丈夫」と温かく迎え入れました。

帰りはバスの発車時刻の関係で、放課後に個別指導ができない状況が続きました。だからこそ、1時間、1時間の授業を大切にしながら取り組もうと、みんなで確認しながら進めました。

防災教育は毎月11日を「釜小ぼうさいの日」

としました。フラッシュバックが起こらないように防災学習や避難訓練を避けては前に進めないと考えたのです。東日本大震災で、みんなが自分の命を守りぬいたことは褒めてあげて、その上で、学校の防災学習や避難訓練は、みんなの命を守るための大切な学習であることを子どもたちに理解させ、教材に写真や映像を使わず、絵などを利用し、子どもの心に配慮しながら取り組みました。

学校行事は例年と同じ時期にできるものはそのまま行いましたが、変更しなければならないものは時期を大幅にずらして計画しました。4月に行われていた交通安全教室は8月末の開催となりました。内容を工夫し、震災後の街中を全学年歩行学習として行いました。また、5月の運動会は、避難所が閉鎖した8月10日以降の10月22日にしました。この運動会は避難所にいらした方にも案内を出しました。それは生活科で苗を植える作業を避難していた方に教えていただいたり、子どもたちが毎日見守られ、声をかけられながら生活したりし、大変お世話になり、学校と地域の絆もより一層深まったからです。地域の方と一緒にできる種目を入れて行いました。

6月に予定していた修学旅行の日程は10月上旬に、行先は仙台、松島方面から県内内陸の花巻盛岡方面に変更しました。

学習発表会は、できるだけ取組期間を短くし、普段の学習の成果をとということで音楽コンサートにしました。

このように状況を見て、行事の内容や時期を変更する判断をしながら行いました。

また、震災後、被災地域には、タレントや様々な団体がイベントを申し出てくださいました。ありがたい話でした。釜石小学校でも「夢の課外授業」としてTUBEの皆さんがいらしてくれました。しかし、「1日でも早く通常の教育課程に戻すこと」が本当の学校の復興だと考え、そのような申し出も教務として選択しました。

震災後から学校再開までの貴重な体験から学んだことは、

- ① 校長先生を中心に職員一丸になること
- ② 状況に応じて柔軟に対応していくこと

- ③ 子どもに寄り添うこと
- ④ 日頃からの学校と地域との連携

この貴重な学びは、現在のコロナ禍での学校教育に活かせています。

## コラム



現在のコロナ禍の中、いつ誰が感染してもおかしくない状況であるので、次の点を大切にしています。

- ① 家族が濃厚接触者等になり、児童が出席停止になった場合には教職員で情報を共有して最悪を考え動く準備をしていること
- ② 長期間出席停止になった児童には、担任が児童や保護者と電話で話をし、つながりをもつこと
- ③ 岩手県の感染者の状況や県の緊急事態宣言、校長会の横の情報から、本校の実態に合うように、行事等の持ち方の工夫をしていること

(M.O)

及川美香子 震災時 釜石小学校教務主任  
岩手県一関市出身  
～略～

平成17年4月～平成24年3月 釜石小学校（教諭）  
平成25年 大船渡市立吉浜小学校（副校長）  
平成28年 釜石市立鶴住居小学校（副校長）  
平成30年 一関市立滝沢小学校（校長）  
令和3年～釜石市立双葉小学校（校長）

平成30年～釜石市防災士  
令和元年～大震災かまいしの伝承者

# 5章

## このたねとばそ Team 釜石小の『たね』は…

大和田 典 明      及 川 美 香 子      加 藤 孔 子

4章までにお伝えしてきたことは当時の釜石小学校で取り組んだ防災教育です。東日本大震災から11年。当時の教職員は異動し、県内各地で今日も子どもたちに真摯に向き合っています。釜石小学校での取組を異動先の学校で、その地域、実態に合った防災教育として実践し、成果を挙げています。釜石小学校の防災教育が『たね』となり、今、各地に防災教育の芽が出て、花を咲かせているのです。本章では、その例を紹介します。

### このたねとばそ その1

大和田 典 明

#### 1 いわたの復興教育

釜石小学校を離れてからの12年間で、私は5つの学校に勤めさせていただいています。

岩手と青森の県境に面する二戸市の御返地小学校、大船渡市に戻って大船渡北小学校。この2校では副校長として勤務しました。その後、岩手山の間近に位置する八幡平市の寄木小学校、そして大船渡市にまた戻って末崎小学校、盛小学校には校長として勤務しています。

特に副校長として勤務した2校では、いわての復興教育をどのように具体的にするのか模索しながら過ごしたように思います。復興教育というのは、平たく言えば「どのようにして人づくりを行うのか」ということです。震災を受けて、それまでの教育を「命の尊さ、人やふるさとなどとのかかわり、災害に備える手立て」という観点から整理したものです。私自身被災者でもあったので、「苦しみを分かかってほしい。」「苦しみにふれてほしくない。」など複雑な思いを抱えながら毎日を過ごしました。特に副校長2校目の大船渡北小学校の時には、同じような苦しみを抱えた子が身近にたくさんいて、その

寄り添い方、心のケアをすごく意識しました。

校長として勤務している7年間は、釜石小学校をはじめ、赴任した先々の学校で先生方や子どもたちから教えられた「地域を誇りに思うこと」「防災教育の重要性」を学校づくりの根幹に据えて、歩んできました。

ここでは八幡平市立寄木小学校と大船渡市立末崎小学校、盛小学校での実践の一部を紹介します。特に、この3校は校長を務めた学校で、防災教育や復興教育について自分の「やりたいこと」を「かたち」にした実践を紹介します。

#### 2 八幡平市立寄木小学校での実践

寄木小学校では、復興教育の具体的な形を「防災教育」と「郷土学習」の2本柱と決め、学校経営の重点に位置付けました。平成28年度には岩手県防災教育スクールに指定をいただきましたので、火山噴火に対する防災・減災を軸に、それまでの防災教育について大きく見直しを図ることとしました。その取組の中から3点を紹介します。



## ① 複数年を見通したカリキュラム編成による防災授業

「郷土を愛し、その復興・発展を支える人づくり」を各校で、より適切に進めていくために、岩手県教育委員会では復興教育副読本を刊行しています。この副読本では、大震災から得られた様々な教訓、学習内容について「いきる」「かかわる」「そなえる」という3つの教育的価値と21の具体項目に分類して構成されています。

寄木小学校では、復興教育副読本が低学年用と高学年用に分けて刊行されていること、その2冊で取り上げられている内容項目の配列にはかなりの部分で共通点があるということから、低学年（1～3年）で学習した教育的価値等を高学年（4～6年）でもまた学び直すようにすることで、より深く、確かに理解することができるようになるのではないかと考えました。

また、例えば前学年に学習した内容を次学年で学習するなど、重複や落ちがないようにするためには、3年間に分けたカリキュラムを作成し計画的に学習していく必要があることから、復興教育副読本の取り扱いについてA・B・Cの3つの年度に分けて取り組んでいくこととしました。

沿岸部において、命を脅かす危険について（津波災害へ）の備えを考えなければならないように、寄木小学校で学ぶ子どもたちにとって避けて通ることができない危険は岩手山噴火による「火山災害」です。特に冬季において大規模な火山噴火が起こった場合には、降り積もっていた雪が解け大規模な土石流が発生する恐れがあり、寄木小学校区においても甚大な被害が想定されます。

ですから、火山災害に係る学習については、

より身近に起こり得る災害として子どもたちが意識するように、全学年で防災授業を行



【写真-19】火山噴火についての防災授業

い、その様子を参観日などでも公開して、家庭への注意喚起・啓発も図っていきました【写真-19】。

## ② 親子防災マップづくりと「身近な危険学習会」

親子防災マップ作りについては、夏休みに親子で実施しました。今後、火山防災について考えていかなければならないということを経験前の面談や地区懇談会で周知し、一人ひとりの子どもたちに合わせた白地図（地区ごとに作成）に記入させるようにしました。出来上がった個人ごとの防災マップを持ち寄り、2学期にはその発表会を通して、各地区1枚の大きな防災マップにまとめていきました【写真-20】。それぞれの地区の防災マップは校舎内に掲示しました。地図を指差し、自分の家の近くの危険について確かめる姿が見られました。掲示することで何度も学び直したこと、1枚にまとめたことで自分の気づかなかった危険も知ることができたことなどが効果的だったと思います。



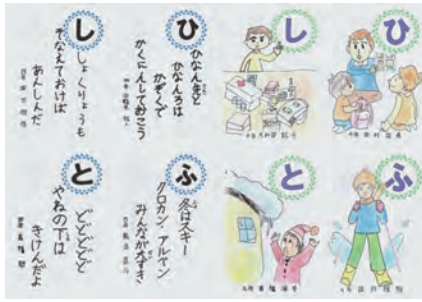
【写真-20】防災マップ作り・身近な危険学習会

## ③ ふるさと防災カルタ

「ふるさと防災カルタ」【写真-21】【図-23】は、実は、この防災カルタは、釜小時代の加藤校長先生の実践を大いに参考にしたものです。



【写真-21】 作製したふるさと防災カルタ



【図-23】 ふるさと防災カルタ札

基本的なコンセプトは、「遊びながら、火山防災とふるさと八幡平のよさを学ぶ」ことです。ですから、ふるさと防災カルタの遊び方は、普通のカルタとは少し違います。

一般のカルタは読み手が札を読み上げたらすぐ絵札をとるのですが、ふるさと防災カルタは読み手が読み上げたものを取り手が一斉に暗唱してからとることにしています。例えば読み手が「どどどどど。屋根の下は危険だよ。」と読んだら、そこにいる全員が「どどどどど。屋根の下は危険だよ。」と唱えてから勝負することになります【写真-21】。



【写真-21】 カルタを楽しむ子どもたち

読み上げられる札には、火山防災だけでなく大雨、豪雪や津波などから身を守るための行動、ふるさと八幡平の素晴らしいところなどが書かれています【図-23】。

これらの大切なことを遊びながら繰り返し覚えていくことができるよう配慮していた楽しくためになるカルタです。

カルタは全て3年生以上の子どもたちによる手作りです【写真-22】。読み札の文も絵



【写真-22】 カルタを作製している様子

も全て子どもたちが考えて作り、各家庭や市内各小中学校、保育所、図書館、博物館などにも配り、学校や家庭で遊ぶこととしました。

A 3判に拡大したカルタも何組か作りました。3学期には、体育館でふるさとジャンボカルタ大会を行いました。縦割り班ごとに何枚とれるか、上級生と下級生が手をつないでカードを探します。防災と八幡平の素晴らしさを学ぶ、大変楽しいカルタ大会でした。

### 3 大船渡市立末崎小学校での実践

大船渡市立末崎小学校では、地域の復興を力強く進めていく人づくりには「津波災害からの安全・安心」に加え「地域を好きになること＝地域に対する誇り」が不可欠と考え、いわての復興教育スクール指定事業を活用しながら復興教育を推進しました。

#### ① 郷土の主要産業である漁業や特産品に関する学習

「ふるさと末崎・ふるさと大船渡」の素晴らしさを実感し、誇りをもって地域とかがわっていく子どもに育つよう、3年生以上の総合的な学習の時間で、郷土学習を進めていきました。

末崎といえば、塩蔵わかめ発祥の地です。3年生では、地元の特産品であるわかめ養殖について学習しました。ただ、わかめ養殖の実際については、末崎中学校で生徒が船に乗り込み、種付けや間引き、販売体験など充実したプログラムで行っているのので、末崎小学校3年生ではわかめの秘密（健康パワー、おいしさ）に焦点を当てて、地元のわかめ工場のスタッフを講師にして教えていただきました【写真-23】。



【写真-23】 わかめの感触を確かめる子どもたち

4年生では、椿について学習しました。末崎町は大船渡市内でも野生の椿が多く群生しており、椿を生かしたまちづくりも少しずつ行われてきています。子どもたちは、地域の椿を探して地図にまとめ発表したり、日本最大のヤブツバキ、泊里熊野神社の三面椿（岩手県指定天然記念物）の見学をしたりしました。また、地域の方から椿油をたくさんプレゼントいただきました。

## ② ふるさとを紹介するパンフレット作成

5年生は、末崎町や大船渡市の魅力を詰め込んだパンフレット作りを行いました【図-24】。



【図-24】 大船渡の自然紹介パンフレット

作成にあたって、名勝穴通し磯や博物館の見学、魚市場の見学等を行いました。完成させたパンフレットは、「修学旅行で大船渡をアピールしよう。」と意気込んで制作しましたが、コロナ禍で修学旅行先での配布活動が思うようにできませんでした。

## ③ ふるさと防災紙芝居

6年生はさらに「ふるさと防災紙芝居」創作を行いました。「ふるさと防災紙芝居」は、6年生の子どもたちが紙芝居を3話創りました。大地震が発生し、すぐ避難をして助かったという内容の『津波から命を守る』お話【図-25】、震災で途絶えてしまいそうになった郷土芸能を子どもたちの元気で再興させる『ありがてえな七福神様』【図-26】、椿の木の妖精がふるさとの名所を案内して回る『カメラアちゃん碁石一周』【図-27】の3話です。絵も文もみんなで手分けをして創りました。



【図-25】 ふるさと防災紙芝居「津波から命を守る」



【図-26】 ふるさと防災紙芝居「ありがてえな七福神さま」



【図-27】 ふるさと防災紙芝居「カメラアちゃんと碁石一周」

創り上げた紙芝居は、下学年の子どもたちや保育園の子どもたち、参観日には保護者にも読み聞かせを行いました。みんなすごく一生懸命聞いてくれて、6年生の子どもたちは大きな達成感を味わっていました。子どもたち自身でふるさとのよさ、防災の大切さを子どもたちの手で発信するという大切な学習であったと思います。

## 4 大船渡市立盛小学校での実践

大船渡市立盛小学校では、郷土学習「ふるさとかがやき学習」を基盤に、いわての復興教育スクール、震災学習列車活用スクールなどの指定をいただき、実践を充実させることができました。

### ① ふるさとかがやき学習

盛小学校のある盛町は、毎年灯ろう七夕祭り【写真-24】を行う、地域コミュニティが強い町です。



【写真-24】 盛町灯ろう七夕まつり

郷土学習においては、盛町の歴史や灯ろう七夕について学習する際に、震災時の様子とその後の復興についても地域講師に教えていただきました。学習した内容は、「発信」も意識して取り組みました。郷土学習の「ふるさとかがやき学習」を紹介します。

6年の「ふるさとかがやき学習」の時間には、盛町の歴史や灯ろう七夕について学習する際に、震災時の様子とその後の復興について、地域講師に教えていただきます。震災があっても途絶えさせることなく、町民が一体となって取り組んできている七夕や伝統芸能について、それらの歴史や意味などを教えていただき【写真-25】、さらに震災時の様子【写真-26】、防災についての心構えなども、熱く、子どもたちに話していただきました。



【写真-25】 伝統芸能権現様のお話



【写真-26】 東日本大震災時の盛町の状況についてのお話



【写真-27】 学習発表会で発表する子どもたち

学んだことは学習発表会で発表し【写真-27】、子どもたちは改めて盛町の素晴らしさを感じ取っていました。地域の方からふるさとのよさや防災について教えていただくこの学習は、地域のみなさんの子どもたちへの期待がいっぱい詰まっていて、ふるさとを大切にする思い、ふるさとへの誇りを強くするとともに、防災について学ぶ貴重な機会として、盛小学校で、一番大切にしている学習です。

## ② 震災学習列車

震災学習列車に乗り、震災後復旧した三陸鉄道や震災遺構見学を実施しました。



【写真-28】 震災学習列車

遠足で釜石に向かう車中は、震災学習の学びの場でもあります。車掌さんに当時の様子を教えていただきました【写真-28】。

これらのように、東日本大震災後のこの10年間は、震災によって一層深く考えるようになった郷土の素晴らしさ、郷土を大切にする思い、命や絆の大切さ、防災の在り方などを私自身も学ぶことができた10年間でもありました。今後も、命と自分達の明るい暮らしを大切にしていって子どもたちを育てられるよう、私なりにしっかり取り組んでいきたいと思えます。

釜石小学校を離れてから、私は、副校長として、東日本大震災津波で校舎が全壊した釜石市立鵜住居小学校に、校長として、内陸の一関市立滝沢小学校、釜石市に戻り、釜石市立双葉小学校（現任校）に勤務しました。いずれの学校でも「学校・地域の実態に応じて」を意識して実践してきました。「いわての復興教育」の教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」の3つの視点から学校ごとに紹介します。

## 1 釜石市立鵜住居小学校での実践

鵜住居小学校は津波により、校舎が浸水しました。校舎を使用できなくなったこの学校は釜石市内の内陸にある2つの学校に間借りをし、その後、鵜住居地区の山側の仮設校舎で学習しました。私はその仮設校舎で1年間と震災後、海が見える山を切り崩し、海拔15～26mにある新校舎に移り1年間勤務しました。

### ① 「いきる」…卒業生の語り継ぎ

震災当時の4年生が高校2年生になったのを機に、当時の避難の様子を語り継ぎたいと申し入れてきました。そこで、心が癒えていない児童がいるので、写真ではなく紙芝居でとお願いし、紙芝居での語り継ぎや津波のクイズを行ってもらいました【写真-29】。子どもたちは真剣に話を聞き、命を守る大切さを実感していました。



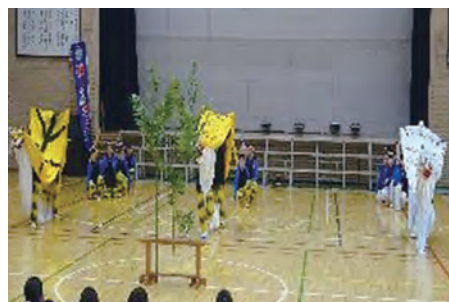
【写真-29】卒業生による語り継ぎ

### ② 「かかわる」…伝承芸能・ラグビー

#### ア 伝統芸能虎舞の継承

鵜住居地域には「鵜住居虎舞」があります。その虎舞は江戸時代中期頃が伝承の始まりと言われていています。

5、6年生は、地域の虎舞保存会の方から伝統芸能虎舞を教えていただき、1か月間の猛練習の末、その披露をします【写真-30】。この活動を通して、子どもたちは地域の方々とのかかわり、伝統芸能を継承する厳しさや大切さを学び、さらに地域の中での存在感や地域の人や文化への愛着を育んでいます。



【写真-30】釜石郷土芸能「虎舞」披露  
写真提供：釜石市立鵜住居小学校

#### イ ラグビーの挑戦

鉄と魚とラグビーの町として知られる釜石市には、過去に新日鐵釜石のラグビー部の日本選手権7連覇（1978-1984）の偉業があります。その不屈の精神は現在の釜石シーウェーブス RFC に受け継がれています。また、震災前に釜石東中学校と鵜住居小学校があった場所に復興スタジアムが造られ、2019年には、



【写真-31】シーウェーブス選手とのタグラグビー  
写真提供：釜石市立鵜住居小学校

東北で唯一ラグビーワールドカップの会場ともなりました。

鶉住居小学校では、釜石シーウェイブスの選手とタグラグビーで交流をしています【写真-31】。この活動は子どもたちがラグビーへの挑戦とともに、ラグビー選手とかかわる絶好の機会です。

### ③ 「そなえる」…下校時津波避難訓練

平成27年4月に新しくできた三陸縦貫道の管理事務所子どもたちが避難できるようにお願いをし、スチール板を壊して鍵を開け、管理事務所へ上がって避難する訓練をしました。さらに、他地区の子どもたちはスクールバスでの登下校になっていましたので、スクールバスの運転手や市教育委員会の担当者にも協力していただき、打ち合わせをし、バスでの避難あるいはバスから降りて高台へ上ることをし、大地震や津波に備える訓練をしました【写真-32】。これは、釜石小学校での下校時津波避難訓練をモデルに、副校長として関係機関と相談して新たな避難場所を開拓し、初めて行ったものです。この管理事務所への避難は鶉住居小学校では現在も継続されています。



【写真-32】三陸縦貫道管理事務所へ避難  
写真提供：釜石市立鶉住居小学校

## 2 一関市立滝沢小学校での実践

### ① 「いきる」

道徳教育に力を入れました。道徳教育推進教師を中心に1時間1時間の道徳の授業を大切に実践をしてきました。

また3月11日は震災に係る道徳の授業を全学級行っている学校でしたので、それを継続しました。先生方は真摯に取り組んでいました。

4年生は、保健や道徳との関連で助産婦さんから「命」についての学習を行いました【写真-33】。



【写真-33】生まれてきてくれてありがとう  
写真提供：一関市立滝沢小 養護教諭 千田咲良氏

### ② 「かかわる」

滝沢小学校では、学校支援地域本部事業を立ち上げ、地域の方の協力を得て教育活動を支援していただきました。その中に米作り体験や滝沢の伝統芸能鶏舞等の指導があります。鶏舞は運動会や子どもの有志で市の文化祭で披露し、地域を盛り上げました【写真-34】。



【写真-34】滝沢伝統芸能「鶏舞」

### ③ 「そなえる」

一関市立滝沢小学校は田園地帯にあり、山に囲まれているので土砂災害の危険があります。

そこで、親子で危険個所を調べ、写真を撮り、休み明けに発表しました。また、大雨警報が発令される前に、引き渡しを行う可能性を

考え、教職員はリハーサルを事前に行い、初めての引き渡し訓練を行いました【写真-35】。



【写真-35】引き渡し訓練

### 3 釜石市立双葉小学校での実践

双葉小学校は昨年度、「日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震・津波」により学区の一部に津波が入る可能性があることが分かりました。

#### ① 「いきる」「そなえる」

単元導入として東日本大震災当時、本校はどんな様子だったのかについて、当時の双葉小学校の教務主任をお招きし、当時を知らない教職員と児童に語り継ぎを行っていただきました。

この語り継ぎを聞いて、「災害があったときは助け合いや思いやりが大切だと思いました。」というような感想がありました。

また、全校朝会で校長が地震や津波の話しながら防災教育を行いました。次のようなことを話しました。

- 地震が起こった時の町の様子と身の守り方
- 50cm以下の波でも流される
- 学区も一部が浸水する
- 津波は川を上って来る
- 避難場所はどこか

子どもたちにとって初めての大地震・津波の学習となりました。その後、動画を活用して登下校中の身の守り方を実際に行い、さらに学年ごとに学習しました。

このような「そなえる」の実践後、地区会議で決まった初めての地区総合防災訓練を10月に行いました【写真-36】。本校の子どもたちは下校途中や帰宅後に、大地震発生の防災無線や大津波警報を聞き、事前に確認していた避難場所へ逃げるといった訓練にしました。子どもたちはこれまでの学習もあり真剣に臨みました。



【写真-36】総合防災訓練

#### ② 「かかわる」

釜石市では震災後、子どもたち自身が生活するこの釜石をよりよくするために市内の小中学校から代表者が集まり、話し合い、実践する「かまいし絆会議」があります。

この中で、地域の方へあいさつ、地域をきれいにするというクリーン作戦を行いました。本校の子どもたちのあいさつがよいと地域の方からお手紙をいただきました。

この10年を振り返って、学校、立場が替わっても私の大切にしてきたことを以下に記します。

- ・「いきる」は「特別の教科道徳」を中核としながら全ての教育活動で育むこと。
- ・学校や地域の実態により、「かかわる」「そなえる」を工夫しながら取り組むこと。
- ・子どもたちの命を守るには、子どもたち自身の「自分の命を自分で守る」意識の醸成に加え、保護者や地域の方を巻き込んでいくこと。
- ・教職員に復興教育に本気で取り組む意識をもたせるために、校長の方針を明確にし、共通理解のもとで実践を積み重ねていくこと。

### ③ 日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震への備え

日本海溝や千島海溝沿いを震源とするマグニチュード9クラスの巨大地震が起きた場合の被害想定で、東日本大震災では浸水被害がなかった双葉小学校の学区内が新たに浸水区域に想定されました。

そこで、全校朝会（コロナウイルス感染対策のため放送による朝会）で校長が話したことを紹介します。

国の防災会議が昨年度の4月21日に行われました。その中で日本海溝地震と津波の話がありましたのでお話をします。

<日本地図の提示>

この会議で、これから日本海溝の北から千島海溝というところの海の底にある溝での出来事がきっかけとなり、震度7のような巨大な地震が岩手県から北海道に及ぶ太平洋側の広い範囲で起きる可能性があるそうです。

それにともない津波がくる可能性があることもこの会議では予測しました。釜石は黄色い○の部分です。東日本大震災の震度は中妻町（双葉小学校学区）で震度5よりも少し強い揺れでした。それが今度予測されている震度7になると、地震により、道路やその周りはどうなるかを写真で見ていきます。

<写真5枚><家の中の2枚の写真>

このように家の中はものがちらばって歩けない。

<外の3枚の写真>

外は電柱が倒れたり、家が崩れたり、道路が歩けなくなったりします。

このように家の中や外は大変な被害を受けます。

この後に津波がきたら釜石市はどこまで水がくるのかの予測を話します。

1つ目は防波堤が津波により壊されていない場合についてお話します。

<津波被害エリア地図提示>

釜石市では釜石小学校の学区の魚市場付近からテット付近や嬉石つまり元の警察署の所まで波がくるようです。赤は5mから10m、つまり校舎3階以上。ピンクは2mから3m校舎2階以上、黄緑は10cmから30cmの波がくるようです。30cmというのは大人のひざの高さあたりまでになります。しかし、大人のひざの高さでも流されますので注意が必要です。

2つ目は防波堤が津波により壊された場合です。

<津波被害エリア地図提示>

今出した防波堤が壊されていない図と比べると、色が広がっているのがわかりますね。

そして、その色が上中島町の近くや川を上がって源太沢近くの川まできているのがわかると思います。

いつくるかわからない日本海溝から千島海溝地震による津波により、東日本大震災では双葉小学校の学区までこなかった水が学区の一部までくる予測がたてられているのです。そこで、これからが大事です。

では、もし、大きな地震が来て、津波がくるというとき、どんな行動をとって、避難場所に逃げるといいのでしょうか。

- ① 登校中や下校中にまず地震が来たら、途中の歩いている場所の「倒れてこない」、「落ちてこない」、「動いてこない」安全な場所を選んでランドセルを頭に被って頭を守ってダンゴムシになりましょう。

このポーズの詳しい説明は後で各学級で先生方に動画を映してもらうので見てください。

- ② 地震がおさまったら、津波を考えます。すぐに次の場所に走って逃げましょう。

<避難場所を書いたものを提示>

今いるところのどこの避難場所が一番近いかを考えて、逃げるのが命を守ることに繋がります。



特に千鳥町、中妻、八雲地区は家に戻らない、家に行かないこと。

津波はくり返しくり返してくるので、助けが来るまでその避難場所にいる、あるいはさらに避難場所の近くの高い所に逃げましょう。逃げるのは自分です。「自分の命は自分で守ること。」

このことを考えて、学習を学年ごとに深め、10月14日頃に下校時津波避難訓練を地域や釜石中学校と行います。詳しくは後でお知らせします。また、避難場所は下校時津波避難訓練前に集団下校をして実際に歩いて行きます。

いつ来るのか予想できない日本海溝地震にそなえるために逃げることを覚えておきましょう。

これで日本海溝津波についてとそれにそなえる心の準備をしておくことのお話を終わります。

では、だんごむしのポーズについて動画を見せてもらってください。机があるときは、机の下にもぐって机の脚をおさえますが、机のない廊下、体育館、音楽室、登下校中などのときは、持っているもので頭を被う、何も持っていなければ手で頭をおさえてだんごむしのポーズをとります。

<動画 「命を守るポーズ こうち防災いちばんNHK」 >



【写真-37】放送による校長の話に合わせて教室で写真等を提示する担任



【写真-38】ランドセルで頭を守り、だんごむしのポーズをする子どもたち



【写真-39】離任式最中に地震が発生。自分でだんごむしのポーズをとった子どもたち。今年度の成果だと先生方で喜び合った。(R4.3.24)



釜石小学校地域学校支援本部は発足から15年になります。あの時まいた地域学校支援本部の種がどんなふうに飛んで、どんな花が咲いているかを記します。

## 1 地域学校協働活動

この事業は、平成20年度から文部科学省が進めていた学校支援地域本部事業を導入し、地域の方々の豊かな経験や知識、技術といった、いわゆる地域の教育力をボランティアの形で活かし、学校教育活動の充実を図ること、また、ボランティアが学校に入ることによって先生方が子どもと向き合う時間をより多くとれるようにすることを目的に始められた事業です【図-28】。



【図-28】地域学校協働活動とは

釜石小学校では、平成20年度当初から実施しておりますので、今年度で15年目となりますが、平成30年度からは、地域学校協働本部として、これまでの地域から学校を支援するという一方向の活動だけではなく、学校からも地域の活動に積極的に関わり、学校と地域が色々なことを共有しながら、また、同じ思いを持ちながら地域ぐるみで子どもたちを育てていきたいと思いますという双方向の関係性を大事にした体制で様々な活動に取り組んでいます。

## 2 ボランティア活動までの流れ



【図-29】地域学校協働活動とは

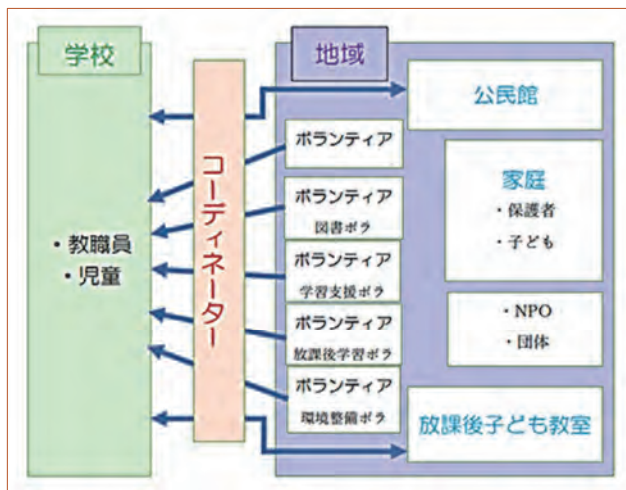
【図-29】は、ボランティア活動までの流れを表したものです。地域コーディネーターは、学校と地域の橋渡し役になります。

学校からボランティアの依頼・要請があった際、あらかじめ登録いただいているボランティアさんへの連絡・調整をし、ボランティア活動が出来るように学校側と事前打ち合わせや準備をして、当日、ボランティアさんに活動をしていただきます。

また、地域から活動に協力して欲しいとのお話があった際、担当の窓口教員の先生にお話をし、どのような対応が出来るか一緒に考え、当日も可能な限り一緒に活動します。それらの活動は、年に2回、運営協議の場となる協議会を開き、報告、協議しています。

釜石小学校区協議会のメンバーは、校長、副校長、教務主任、各ボランティアの代表者、公民館長、生涯学習部署の担当者など10名ほどになります。

平成30年度からは、【図-30】のように、コーディネーターが学校と地域の橋渡し役をすることに変わりはありませんが、地域の中にある公民館の事業や放課後子ども教室など地域の活動にも積極的に関わっています。



【図-30】地域活動との関わり

例えば、公民館でいろいろな事業を計画し活動していますが、その中の子どもを対象としている事業への参加を周知したり、放課後子ども教室での企画調整をしたり、学校内外で行われる子どもたちの成長を育む活動を、学校と地域が共通理解のもと、子どもたちが地域の中に積極的に関わるように促しています。

### 3 現在の活動

釜石小学校では、現在、学校内活動としてこちらの5つのボランティアがあります。

#### ① 図書・読み聞かせボランティア

4章でも紹介しましたように15年前の発足当時から「おひさまの会」という名前で活動を継続しています。毎月第1・3木曜日の活動に加えて金曜日の朝読書の時間に教室で絵本の読み聞かせを行っています。

#### ② 放課後学習支援ボランティア

「赤ペン先生」と呼んでいます。以前は毎週木曜日の放課後に行っていましたが、授業時数の関係で月曜日のお昼休み直後に変更されました。「ぐんぐんタイム」と名付けた20分間のプリントを利用した算数のふりかえり学習がありますが、正解のプリントファイルと赤ペンを持って教室に入り、子どもが持ってきたプリントと照らし合わせての丸付けをお願いしています。

#### ③ 学習支援ボランティア

家庭科の裁縫やミシン学習、社会科の街中探検の同行などの授業のサポート、また、農業体験、漁業体験、鉄の学習などゲストティーチャーを迎えての総合学習のサポートを行っています。

#### ④ スクールガード

見守り隊として、通学路のあちこち10か所に1～2人ずつ立ち、下校する子どもたちに「さようなら～」と声掛けをしながら安全を見守っていただいています。

#### ⑤ 学校の施設等の環境整備ボランティア

学校の運動会前の校庭整備に合わせて活動しています。校庭整備とともに登校坂に設置されているプランター50個ほどに花の苗を植えたり、鹿よけのネットをかけたり、水やりをしたりという環境の整備に関する活動をしています。

①～④は発足当時から15年間継続です。⑤が震災後に追加になったものです。

## 4 活動の成果

4章でも述べたように、地域学校協働活動によって、子どもたちの多様な体験や経験の機会が増え、規範意識やコミュニケーション能力の向上、学習の効率アップや先生方が子どもたちと向き合う時間がとれるようになったことなど活動の成果がありました。

子どもたちは、毎日の下校時に通学路で「さようなら～」とか「今日は遅かったね」と声をかけて下さっているスクールガードさんや、学校で本の読み聞かせをしてくださる図書ボラの皆さんや、赤ペン先生と回数を重ね、顔見知りになることで、地域の方々との関わりを楽しみにしたり、どんどん積極的にコミュニケーションをとれるようになってきていることを感じています。

また、下校途中の児童にカメラのようなものを向けた人がいたのですが、スクールガードさんが声をかけたことでその人は逃げて行き、事

なきを得たという事案もありました。毎日のように顔を合わせ、声をかけ、地域の方々と子どもたちの繋がりが出来ていたことにより防げたと思いますし、その後も子どもたちの学年が上がり顔触れが変わってもその繋がりは少しずつ太く強くなっていっていると実感しています。

スクールガードの皆さんは、地域のおじいちゃん、おばあちゃんです。その昔、父であり母であった方々、もっと昔は子どもだった方々です。いつも変わらず子どもたちを温かい目で見てくださっています。子どもの顔を見ることや子どもと会話すること、関わることを楽しみにしているようです。「○○ちゃんがまだおりにこないんだけど」と心配して坂を上り、学校まで様子を見に行った方がいました。実はその子はその日お休みだったのですが、そこまで親身になってくださることにありがたい以外の言葉が見つかりません。下校時間になれば、決まった場所や自宅前に出る。その方々にとっては、「その時間にその場所へ」というリズムになっているようで、生活のリズムが整うことは元気・健康の源ですから、とても良い事だと思います。

当たり前のことですが、子どもの能力は、学力だけでははかれないものです。

それまでの体験や経験も大切に、基本である挨拶等がきちんとできてほしいです。ボランティアの活動をしながら、子どもたちに私達の背中から、人としてどうあるべきか、自分で考え行動し、自分の人生を切り開き、生き抜いていく子どもたちを育む一助になっていければ幸いです。

## 5 活動継続の秘訣

15年間も活動が継続できた要因としては、学校の先生方とコーディネーターの連絡調整が挙げられると思います。

学校の先生方とは、まず年度の終わり、次年度の年間行事予定表が出来た頃に、実績と照らし合わせながら、次年度の予定について【図-31】のように教務主任の先生と打合せを行います。その際、ざっくりと、どの学年にどんな学習支援を希望するかをお話いただき、予定を立てます。そして、新年度になってから、その予定をもとに連絡を取り始めます。

農業体験を例にお話しますと、4月に農家の方や農業委員会、水産農林課等、協力していただくボランティアの方に学校に集まいただき、教務主任や担任の先生とともに、日程、どんな作物を育てるか、種や苗、他に必要なものは何か、どのようにして購入するかなどを話し合い、決めたり確認したりします。活動協力者はいつもの方々ですが、先生方は異動もありますので、顔合わせの意味合いも含めています。

教務主任と学校の行事を見ながら農業体験の日程を決め、活動協力者にはその日のタイムスケジュール等を事前に連絡し、事前準備が必要な場合は準備をします。

ボランティアさんと農家の方と畑の様子を見ながら、必要な準備作業があれば行い、必要な物品があれば学校に購入してもいいか確認し、購入しています。作物は生き物なので、連絡や現場確認は何度も行っています。活動が終わった後には、その日の活動の様子をまとめておきます。

| R3 徳小 年間計画(学年ごと) 総合年間 |                        |              |                                    |                            |                      |            |               |              |                                |               |      |               |               |                          |
|-----------------------|------------------------|--------------|------------------------------------|----------------------------|----------------------|------------|---------------|--------------|--------------------------------|---------------|------|---------------|---------------|--------------------------|
| 1学期                   |                        |              |                                    | 2学期                        |                      |            |               | 3学期          |                                |               |      |               |               |                          |
| 学年/月                  | 4                      | 5            | 6                                  | 7                          | 学年/月                 | 8          | 9             | 10           | 11                             | 12            | 学年/月 | 1             | 2             | 3                        |
| 学校行事                  | 6日(水) 始業式<br>7日(金) 入学式 | 22日(土) 運動会   | 3・4日(水・金) 学年旅行<br>16・17日(水・木) 宿泊学習 | 21日(水) 終業式                 | 学校行事                 | 18日(水) 始業式 |               | 23日(土) 学習発表会 | 10日(水) 懇談会                     | 24日(金) 終業式    | 学校行事 | 18日(水) 始業式    |               | 17日(水) 修了式<br>18日(金) 卒業式 |
| 3年生                   |                        |              |                                    | 15日(水) 国土利用<br>課 u-Park 見学 | 3年生                  |            |               |              | キッズランドイ                        |               | 3年生  |               |               |                          |
| 4年生                   |                        | 25日(水) 水生生物展 | 25日(金) 雑                           |                            | 4年生                  |            |               |              |                                |               | 4年生  |               |               |                          |
| 5年生                   |                        | 28日(金) 雑     |                                    |                            | 5年生                  | 20日(金) 雑   |               | 15日(金) 雑     |                                |               | 5年生  |               |               |                          |
| 6年生                   | 23日(金) 雑               |              |                                    |                            | 6年生                  |            | 10日(水) 雑      |              | 24日(水) 農作物全行程<br>25日(金) 17年    |               | 6年生  |               |               |                          |
| 校外学習                  | じゃがいも栽培とる              | 観音寺 園遊会      | じゃがいも一歩収穫 記念<br>お茶会                | じゃがいも収穫                    | 大塚 自然・手芸館見学          | 稲刈り        | 稲刈り           | 稲刈り          | 成田 公園                          |               |      |               |               |                          |
| 特別活動                  |                        |              | お茶会                                |                            | 25日(水) 27日(金) 30日(日) |            |               |              | 11月 20日(水) 12月 15日(水) 18日(土)   |               |      | 24日(金) 25日(土) | 28日(月) 29日(火) |                          |
| 特別学習                  |                        |              |                                    |                            | 3年 春の学習 見学           | 3年 夏の学習 見学 | 3年 秋の学習 見学    | 3年 春の学習      |                                |               |      |               |               |                          |
| 行事                    | 20日(水) 春祭り 行事会         |              | 20日(水) フリー学習                       | 10・19・20日 稲刈り              |                      | 15日(水) 稲刈り | 25日(水) マラソン大会 |              | 11月(水) 交通安全学習<br>25日(水) 交通安全学習 | 21・22・23日 春祭り |      |               |               |                          |
|                       | ※お茶会 午後1時 0.75(水)      |              | ※お茶会 午後1時 0.75(水)                  |                            | ※お茶会 午後1時 0.75(水)    |            |               |              |                                |               |      |               |               |                          |

【図-31】 年間の予定

私がコーディネーターをお引き受けした今から15年前を思い起こしてみますと、4月に主任児童委員として加藤校長先生にご挨拶に行ったのがご縁で、このコーディネーターをお引き受けしました。

この15年間の間での変化として感じていることは、当時、この事業の事を、事業の目的やコンセプトを聞いて、とてもいいシステムだとは思いましたが、さて、何をどうすればいいのか、何から始めればいいのか、全くわかりませんでした。ですが、当時の校長先生の中には、明確なイメージ、理想像が見えていて、「こんなことをしたい!」「あんなふうになりたい!」「こんな形にしたい!」と話されました。校長先生のその思いを実現すべく、私の持っている人脈と言いますか、知り合いや保護者の協力を得ながら、少しずつ形が出来上がっていきました。

また、毎年、異動でいらっしゃる先生方の大半がこの事業の事を知らず、「釜小では、こんなことしてるんですよ〜。」とお話ししたり、ボランティアだより『ぺっこすけっから』【資料-8】をお見せしたりします。この『ぺっこすけっから』は令和3年度の終わりに最終号として1年間のまとめを書いて発行したもので

す。異動されていた先生方もこれを読んでくださって、「こんなことやらせたい!まず、寺田さんに相談してみよう。」という感じになってきています。相談されると、実現してあげたい思いが強くなるので、知っている人、知っているような人、紹介してもらった人など、色々な人に連絡を取ったり、相談したりします。

実は、私は盛岡の出身で、釜石に嫁いだ頃は、同級生や友達も知り合いもいなくて、子どもが生まれ、子どもの成長と共にどんどん増えていき、コーディネーターを引き受けてからの15年間で、私の人脈も広がってきました。

「できるときに できることを できるところから・・・」私はこのコンセプトを今も第一に考えています。自分も無理することなく、ボランティアさんにも無理させることなく活動することで、「楽しかった〜。」という声、「またやりたい!」という声を聴くことが出来ますので、私自身も「繋いでよかった!」「続けてきてよかった!」と思うのです。もっと広く、もっと深く、そして『ボランティアとして学校に関わると楽しい!』という気持ちが、みんなの中に浸透していけばいいなと思っています。

できることを できるときに できるところから

釜石小学校地域学校協働本部事業 ボランティアだより

## ぺっこすけっから 最終号

釜石小学校地域教育協議会  
コーディネーター 寺田恵美子  
令和 4年 3月15日

☆〜☆協力ありがとうございました! ☆〜☆

今年度は新型コロナウイルスの感染者が増加したことに伴い、岩手県独自の緊急事態宣言が出され、学校内での感染予防策として子ども達とボランティアさんとの関わる活動を1月の終わりにストップしたので、とても残念な年度終わりとなりましたが、それでも沢山の皆様にご協力いただきました。本当にありがとうございました。今年度、活躍いただきました各ボランティアの活動をまとめましたので、ご報告いたします。

**☆図書・読み聞かせボランティア「おひさまの会」**

児童への読み聞かせや図書室の本と同様に貸し出しが行われているわくわくルームの本の整理（古い本や汚れている本の廃棄処分）、本のブックコート、わくわくルームの壁の装飾、卒業式や入学式に合わせて、昇降口や体育館までの廊下への装飾、ご寄贈いただいた児童書や絵本の受付作業、学校図書室の購入本の受付作業もしていただきました。

- ボランティア登録 9人
- ボランティアの活動  
第1・3木曜日 午前10時〜
- 児童への読み聞かせ  
金曜日の朝読書の時間
- 延べ活動回数 69回  
延べ活動人数 160人

**☆放課後学習支援ボランティア（赤ペン先生）**

赤ペン、青ペン、正解の書かれたプリントのファイルを持ち、担当の教室に入ります。子ども達は、チャイムと同時にプリント学習を始め、解き終えた子どもが持っているプリントと正解プリントを照らし合わせ赤丸をつけます。間違えた問題をもう一度考えて、答えを書きなおしてまた持ってきたプリントの正解には、青丸をつけます。どの学年もプリント問題の枚数は、だいたい50枚用意されています。その全てに合格すると『名人』となります。どの子どもも一生懸命プリントを解き進め、今年度もたくさんの『名人』が誕生しました。

- ボランティア登録 5人
- ボランティアの活動  
くんぐんタイム(月曜日の13:15〜20分間)
- 延べ活動回数21回、延べ活動人数71人

**☆学習支援ボランティア**

- 4月: 交通安全教室  
6年生 総合 (農業体験)
- 5月: 4年生 総合 (水生生物調査)  
5年生 総合 (農業体験)
- 6月: 3年生 総合 (郷土料理)  
4年生 総合 (農業体験)  
6年生 総合 (漁業 出前授業)
- 7月: 3年生 総合 (農業体験)
- 8月: 5年生 総合 (農業体験)
- 6年生 総合 (漁業体験 わかめ①)
- 9月: 5年生 総合 (鉄の学習① 見学)  
6年生 総合 (農業体験)
- 10月: 5年生 総合 (鉄の学習② 座学・体験)  
5年生 家庭科 (ミシン学習)
- 11月: 5年生 総合 (鉄の学習③ たたら体験)  
5年生 家庭科 (ミシン学習)  
6年生 総合 (漁業体験 わかめ②)  
6年生 総合 (農業体験 収穫・パザール)
- 1月: 6年生 総合 (漁業体験 わかめ③)

- ボランティア登録 8人
- ボランティアの活動 学校側から要請があった時
- 延べ活動回数50回、延べ活動人数108人

**☆スクールガード 見守り隊**

西登校坂下・東登校坂下・保健福祉センター前・工藤歯科医院前・青葉ビル前・青葉公園前・浜町で子ども達の帰りを待って声をかけ、安全を見守って下さいました。

- ボランティア登録 17人
- ボランティアの活動  
下校時、下校時津波避難訓練時
- 延べ活動回数 203回、延べ活動人数3,451人

**☆学校施設等の環境整備ボランティア（花植え）**

新型コロナウイルスの感染で、プランターや東登校坂の花壇や西登校坂のプランターに花の苗を植える作業をしていただきました。また、後日、西登校坂のプランターに鹿よけのネットをかけていただきました。

- ボランティア登録 11人
- 延べ活動回数6回、延べ活動人数14人

**全活動合計 延べ活動回数 349回、延べ活動人数 3,804人**

【資料-8】『ぺっこすけっから』令和3年度最終号

私は、震災後、この11年間、岩手県内はもとより、県外は秋田県、福島県、神奈川県、千葉県、新潟県、大阪府、高知県、福岡県等々で、震災の話をさせていただきました。それは、「大津波を生き抜いた子どもたち」と「釜石小学校の防災教育」についての話です。いわゆる「たね」を飛ばしてきました。その中で、大阪府高槻市の学校安全セミナーで防災教育特別授業をさせていただく機会をいただきました。本稿では、その時の授業についてと、岩手大学「学校安全学シンポジウム2021」での発表、内閣府防災教育・周知啓発ワーキンググループ 防災教育チームの提言を紹介します。

## 1 高槻市学校安全セミナー 防災教育特別授業

### I 目的

「生きる力」を育むための防災教育特別授業を高槻市教職員に示すことで、全ての学校において、児童生徒が安全に関する資質・能力を身に付けることをめざした実践的な防災教育の推進を図る。

II 日時 令和2年1月17日（金）  
15時45分～16時25分

III 会場 高槻現代劇場 大ホール

### IV 授業者

岩手大学 教員養成支援センター 特命教授  
加藤 孔子

### V 児童生徒

高槻市立第七中学校 1・2年生 8名  
高槻市立三箇牧小学校 5・6年生 8名  
高槻市立柱本小学校 5・6年生 8名

#### <第七中学校区>

- ・高槻市の南に位置し、淀川が氾濫した場合、甚大な被害が予想される。
- ・昨年度から小中連携した防災の取組を実施している（関西大学と連携）。

### VI 授業の概要

- 1 主題名 「いきいき生きる」
- 2 本時のねらい

東日本大震災大津波を生き抜いた釜石小学校の事例から命の大切さ、命を守るための方法を考え、いきいき生きていこうとする心情を育む。

### 3 授業の概要

| 学習活動の概要 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|---------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 導<br>入  | <p>1 過去の災害を想起し、本時の学習課題を確認する。</p> <p>●大阪北部地震や阪神大震災の画像を見ながら本時の学習課題を設定する。</p> <p>●学習課題</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">                     災害からかけがえのない自他の命を守る方法を考えよう                 </div>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 展<br>開  | <p>2 2011年3月11日東日本大震災の釜石市の様子を知る。</p> <p>●東日本大地震発災時、それぞれの場所にいた釜石小学校の児童の状況や行動を知り、話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・pptで東日本大震災の概要を知る。</li> <li>・感想を発表する。</li> <li>・もしも自分だったらどうするかを考える。</li> </ul> <div style="border: 1px solid blue; border-radius: 10px; padding: 10px; margin-top: 10px;">                     児童生徒の発表                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・184人全員が生きていてすごい。</li> <li>・もしも自分だったら一人で逃げることはできなかったと思う。</li> <li>・「奇跡ではない。」というのがすごい。</li> </ul> </div> <p>●釜石小学校の取組を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・釜石小学校で行っていた防災教育を知る。</li> <li>・防災学習で学んだことの他に、大津</li> </ul> |

波を生き抜いた子どもたちの命を守る「教え」を考える。

- ・釜石小学校で行っていた防災教育【津波防災安全マップ作り・下校時津波避難訓練・防災授業】を紹介する。



【写真-40】特別授業の様子  
写真提供：高槻市教育委員会

- 釜石小学校の防災学習で学んだことの他に大津波を生き抜いた子どもたちからの命を守る「教え」を考える。

- ・当時の行動を作文等で紹介する。
- ・班（6人小中混合）で話し合う。

釜石小学校の子どもたちにどんな力があったのか。



変身

同じ釜石市の釜石東中学校の震災前の生徒の活動「てんでんこレンジャー」\*を例に、釜石小学校の子どもたちもあの時、このように変身したのではないだろうか？



展  
開

3 下校後の釜石小学校児童全員が命を守ることができた秘密を探る。

- ・大津波を生き抜いた子どもたちの行動をもとに、命を守る『教え』を考える。
- ・大津波を生き抜いた子どもたちの作文を読んで考える。



【写真-41】特別授業の様子  
写真提供：高槻市教育委員会

グループ発表

展  
開

その1 防災学習で学んだことを覚えていて、家の屋上に避難することを判断した子どもの例から

変身

聞くレンジャー

聞くレンジャーの教え

- ・ふだんから話をよく聞く。
- ・学校での勉強をよく聞き、覚える。

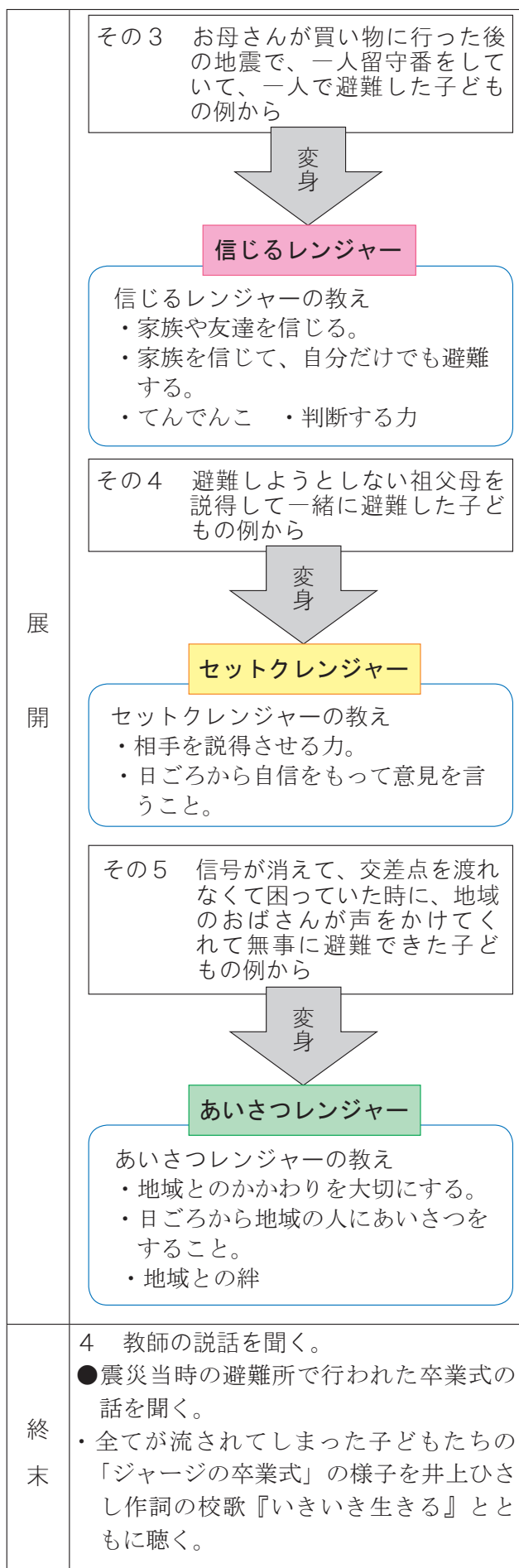
その2 避難している途中で、遅れ始めた友達をおんぶして避難した子どもの例から

変身

共助レンジャー

共助レンジャーの教え

- ・友達を見捨てない。
- ・友達を思う気持ち
- ・走るのが速かったからおんぶしても走ることができた。ふだんからきたえておく。



このように、参加した高槻市の児童生徒の皆さんは、釜石小学校の子どもたちの事例から「聞くレンジャー」「共助レンジャー」「信じるレンジャー」「セツク（説得）レンジャー」「あいさつレンジャー」と名前を考えました。そして、その「教え」を普段の生活から大事なことに目を向けて考えてくれました。感心させられたことがたくさんありました。例えば、友達をおんぶして走った子どもの例からは、「友達を見捨てない」「友達を思う心」と考えながらも、実際におんぶして走ることのできる力も必要であるから、普段からきたえておくことや、避難しようとしないうちを説得して避難した子どもの例からは、「相手を説得させる力」として、日頃から自信をもって意見を言うということ等を考えてくれました。日常の生活や学習で自分達が気を付けていく点を考えることができたと思われまふ。

初対面の私の話をよく聴いてくれ、よく考えてくれました。また、岩手県という遠く離れたところで起こった東日本大震災のことをよく理解してくれ、自他の「命」について深く考えることのできた時間でした。高槻市の児童生徒の皆さん方との出会いやこのような機会を与えていただきました高槻市教育委員会を始め参加して下さった高槻市内教職員（1,596名の参加）の皆様方に深く感謝いたします。

てんでんこレンジャー\*：東日本大震災前から釜石市立釜石東中学校では大地震及び津波に備え、地域に根ざした防災活動など様々な活動を行なっていました。その一つとして総合学習で生徒たちが発案した「てんでんこレンジャー」があります。「津波てんでんこ」という教えを元に、中学生が「てんでんこレンジャー」に扮して災害時対応の教えを小中学生や幼稚園児、地域民に伝え、防災意識を高める活動を行っていました。



## 2 岩手大学学校安全学シンポジウム 「災害安全身に付けさせたい資質・能力」

令和3年11月27日に岩手大学教育実践・学校安全学研究開発センター主催の「学校安全学シンポジウム2021」がオンラインセミナー方式で開催されました。シンポジウムは、安全に関する資質・能力の向上に資する学校教育や地域の役割について検討することを目的として行われました。

僭越ながらシンポジストを務めさせていただきました。釜石小学校では、津波防災についてどのように子どもたちを育てたのか、どのような力を身に付けさせたのかを話させていただきました。本稿では「災害安全 子どもたちに身に付けさせたい資質・能力」と「災害安全 教職員に身に付けさせたい資質・能力」について考えてみます。

### (1) 学校における安全教育により育成を目指す資質・能力

「学校安全資料『生きる力』をはぐくむ学校での安全教育」（文部科学省）によると、学校における安全教育により育成を目指す資質・能力として次のように示しています。

#### 生きて働く知識・技能の習得

様々な自然災害や事件・事故等の危険性、安全で安心な社会づくりの意義を理解し、安全な生活を実現するために必要な知識や技能を身に付けていること。

未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成

自らの安全の状況を適切に評価するとともに、必要な情報を収集し、安全な生活を実現するために何が必要かを考え、適切に意思決定し、行動するために必要な力を身に付けていること。

学びを人生や社会に生かそうとする 学びに向かう力・人間性等の涵養

安全に関する様々な課題に関心をもち、主体的に自他の安全な生活を実現しようとしたり、安全で安心な社会づくりに貢献しようとしたりする態度を身に付けていること。

### (2) 災害安全 子どもたちに身に付けさせたい資質・能力

釜石小学校の防災教育、大津波を生き抜いた子どもたちを振り返り、津波防災にかかわって、どのように資質・能力が育まれたかを考えてみたいと思います。

- ① 何ができるようになるか  
災害（津波）から命を守ること。
- ② 何を学ぶか

#### 生きて働く知識・技能の習得

- 安全マップ作り
  - ・地域を知る（人・もの・こと）
  - ・通学路の危険を知る
  - ・避難場所を知る
- 下校時津波避難訓練
  - ・大人がいないときの地震の対処法を知る
  - ・地震後の行動を知る
  - ・様々な場所からの避難場所を考える
- 防災授業
  - ・浸水区域を知る
  - ・過去の地震津波を知る
  - ・地震津波のメカニズムを知る
- 教科の中で
  - ・津波防災に関する学習

「安全マップ作り」では、自分の通学路の避難場所や危険箇所を調べているうちに、地域の人に挨拶をしたり、声をかけてもらったりしながら地域の「人・もの・こと」を知ることができました。

「下校時津波避難訓練」では、学校ではなく、下校時の通学路で、大人がいない時に地震が起こった場合の対処法、避難の仕方を学びました。

「防災授業」では、過去の津波の浸水区域や地震津波のメカニズム等を知りました。さらに各教科の中で津波防災に関する学びもありました。

このように、子どもたちは地震津波に生きて働く知識・技能を習得していたのです。

#### 引用文献

学校安全資料「生きる力」をはぐくむ学校での安全教材（文部科学省2019）

### ③ どのように学ぶか

未知の状況にも対応できる  
思考力・判断力・表現力等の育成

- 安全マップ作り
  - ・地域を歩く（人・もの・こと）
  - ・親子で歩く
  - ・友達と歩く
  - ・友達と大きな地図をつくる
- 下校時津波避難訓練
  - ・地区ごとの異年齢集団で下校
  - ・6年生のリーダーの指示
- 防災授業
  - ・工夫された教材
  - ・地図を作ったり、実験したりする
  - ・自分事としてとらえる
- 教科の中で

学びを人生や社会に生かそうとする  
学びに向かう力・人間性等の涵養

どのように学んだかを考えてみます。

「安全マップ作り」は、自分の足で、通学路を歩き、自分の目で確かめました。親子でも行いました。それを大きな地図にまとめる時にはグループで話し合いながら、地図上に表現しました。主体的で対話的な学びがここにあります。

「下校時津波避難訓練」は、異年齢集団での下校で、訓練放送が鳴ったら、6年生がその場でどうすればよいかを考え、判断し、指示を出し、そこから一番近い避難場所に避難しました。思考力、判断力が育まれています。

「防災授業」には、これまでも述べてきたようにインド洋津波の映像や50cmの津波は人を流してしまう実験映像など、インパクトの強い教材を用いながらの授業が子どもたちの思考力、判断力を育みました。防災授業だけではなく、カリキュラムマネジメントされた教科全体で学びました。

さらに、保護者や地域をも巻き込んだ訓練など、社会に開かれた教育課程でもありました。

このようにして、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成されていたものと考えます。

#### ④ 何ができるようになったか

災害＝津波から命を守ること。

結果論になりますが、東日本大震災、大津波を生き抜いた釜石小学校の子どもたちは、学びを人生や社会に生かそうとする 学びに向かう力・人間性等がしっかりと身につけていたと言えます。

## 3 防災・減災、国土強靱化新時代の実現のための提言

令和3年5月25日、内閣府は、防災・減災、国土強靱化WG・チームの提言を公表しました。我が国が「防災・減災、国土強靱化新時代」を迎えたことを宣言しました。

私は、防災・減災、国土強靱化WG・チームの中の片田敏孝東京大学大学院特任教授を座長とする「防災教育・周知啓発ワーキンググループ 防災教育チーム」の一員として参加させていただきました。令和2年12月から令和3年5月まで「防災教育・周知啓発ワーキンググループ 防災教育チーム」（リモート参加）での話し合いで、たくさんの学びをいただきましたし、釜石小学校の事例や岩手県の「いわての復興教育」の基本理念を取り上げていただきました。

ここでは、提言の要旨と提言に取り上げていただいた釜石小学校の事例や本県の「いわての復興教育」を抜粋し紹介します。■部分は、私のコメントです。

### 防災教育・周知啓発ワーキンググループ 防災教育チーム 提言

「防災教育は、10年後に地域を支える大人をつくり、20年後には地域の防災文化をつくる礎である。」  
(本文より) 令和3年5月

## 1. 防災教育の実情・課題

### (1) 防災教育の重要性

平成29年告示の新学習指導要領には、防災に関する内容が大幅に充実された。令和元年度からは大学の教職課程において、防災教育を含む学校安全への対応に関する内容が必修とされている。

### (2) 防災教育の形骸化

全国の概ね全ての小・中学校で防災訓練が実施されている一方、地域特有の防災課題に応じた避難訓練を実施した小・中学校は3割未満である。(文部科学省「学校安全の推進に関する計画に係る取組状況調査」) 避難訓練の実施内容の定型化・形骸化が見られる。

### (3) 地域との連携

学校と地域が連携して防災教育を行うことも効果的であり、地域への協力要請や情報交換を行う会議の取組内容の充実など一層の連携が必要である。

### (4) 校種間の接続

幼稚園・保育園と小学校、小学校と中学校との間で、防災教育についてのシームレスな体系が十分に具体化されているとはいえない状況も見られる。

本チームでは、我々が目指す具体的な防災教育の事例として、岩手県釜石市立釜石小学校の事例、高知県黒潮町の事例を議論した。以下、釜石小学校の事例を示す。

#### 岩手県釜石市立釜石小学校の事例

- 東日本大震災発災時に、釜石小学校の子どもたちは、すでに下校後で学校管理下外のばらばらのところにいたが、自らの判断で適切に避難し、児童全員が大津波から生き抜くことができた。さらに、幼稚園の弟の手を引いて避難した子ども、遅れ始めた友達をおんぶして走って避難した子ども、なかなか避難しようとせず店の片づけを始めた祖父母を説得して避難した子どもなど、自分の生命だけでなく、周囲の人の生命も助けた例があった。子どもたちは「奇跡ではない。ぼくたちは、学校で学んだことを思い出して行動しただけ。」と言う。
- 子どもたちが生き抜くことができたのはなぜか。それは、釜石小学校の防災教育にある。生命を守ったのは「奇跡」ではなく、防災教育の「軌跡」であったと言える。それは、校長が防災教育を学校経営に位置付けるところから始まった。
- 釜石小学校の防災教育は「ぼくの、わたしの津波防災安全マップ作り」「下校時津波避難訓練」「津波防災の授業」の大きく3つである。特に下校時津波避難訓練は、学校外でも、一人でも適切に避難できるよう訓練するものであり、市の防災課など行政の協力の下、

学校、子どもたち、地域住民、保護者、行政がワンチームになって取り組んでいた。

- また、東日本大震災時に周囲の人の生命をも助けた子どもたちは、震災後、岩手県で実践されている「いわての復興教育」の「いきる」、「かかわる」、「そなえる」という教育的価値を身に付け、自信、役割意識や有用感を育まれ、成長してきている。

このように、釜石小学校の「大津波を生き抜いた子どもたちの『奇跡』ではない釜石小の『軌跡』と東日本大震災後の10年間、本県で取り組んだ「いわての復興教育」の3つの教育的価値『いきる』『かかわる』『そなえる』をワーキング部会で紹介させていただきました。

## 2. 今後実現を目指す防災教育

### (1) 全ての小・中学校での実践的な防災教育・避難訓練の実施

災害は全国いつでもどこでも生じ得る。まずは、全ての子どもが災害から生命を守る能力を身に付けられる防災教育が全国で実施されなければならない。全国全ての小学校、中学校の義務教育機関において、地震、水害、津波、火山噴火など地域に応じた現実感のある災害リスクや、災害又はそのおそれに直面しても「自分は大丈夫」と思ってしまう心の傾向である「正常性バイアス」<sup>(注)</sup>など、災害から生命を守るために必要な知識をしっかりと教えるとともに、学校内だけでなく校外でも、一人でも、災害の危険から確実に逃げられるようにするための実践的、効果的な防災教育や避難訓練を実施していく必要がある。

そのため、まずは各学校において学校経営の中に防災教育を明確に位置付け、生命を守ることを学校教育の根幹の一つにすることが必要である。

#### ●地域に応じた現実感のある災害リスクや、災害から生命を守るための知識

これは、釜石小学校の子どもたちが安全マップを作成するために通学路を歩いて調べたり、教職員も実際に歩いて学区内のリスクを調べたりしたことに繋がります。

「正常性バイアス」<sup>(注)</sup>：「正常性バイアス」とは、人が予期しない事態や不都合な状況等に対峙したとき、「正常な状況の範囲である、まだ大丈夫である」と思ってしまう心の働き。

●学校内だけでなく校外でも、一人でも、災害の危険から確実に逃げられるようにするための実践的、効果的な防災教育や避難訓練

まさに釜石小学校で行った『下校時津波避難訓練』からの提言となります。

●学校経営の中に防災教育を明確に位置付け

釜石小学校の防災教育は校長が防災を学校経営に位置づけることから始まりました。校長のマネジメント力と考えます。

- (2) 生命を守ることを最重視した実践的な避難訓練
- (3) 想定外に対応できるようにする避難訓練
- (4) 災害の自分事化（1つの有効な方法としての「防災小説」の取り組み等）
- (5) 主体的、内発的に避難する態度の育成（自分が助かる防災教育）
- (6) 人への思いやりの心の育成（人を助ける防災教育）
- (7) 防災情報
- (8) 災害ボランティア活動

#### 4. 今後目指す防災教育を実現するための方法

- (1) 全ての小・中学校で行われる防災教育・避難訓練の見える化
- (2) 教科等横断的なカリキュラム編成
  - ・防災教育を教科等横断的に実施すること
  - ・各教科や総合学習などで、「いきる」（生命を大切にする）、「かかわる」（地域や子ども同士の関わりをつくる）、「そなえる」（災害時に対応できる心を持つ）といった要素を加味する。

●「いきる」（生命を大切にする）、「かかわる」（地域や子ども同士の関わりをつくる）、「そなえる」（災害時に対応できる心を持つ）といった要素を加味する。

「いわての復興教育」は、郷土を愛し、その復興・発展を支える人づくりのために、各学校の全教育活動を通して、3つの教育的価値（いきる・かかわる・そなえる）を育てることです。

それは、新しく始めることでもなく、リカバリーの教育でもなく、東日本大震災の体験、教訓から得られた3つの教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」を育てることで、これまでの教育を補完、充実させることです。

- (3) 防災教育の手引き・教材
- (4) 防災教育の効果の検証

#### おわりに

防災・減災、国土強靱化新時代において、生命を守ることを最優先とした防災を実現するためには、防災教育の力をより一層引き出すことが求められる。全ての義務教育機関で必要な防災の知識が教えられ、実践的な防災教育・避難訓練が実施されることにより、国民全てが災害から自ら生命を守ることができる社会を実現する。知識の防災教育や単なる災害対応技術の防災教育を超え、子どもの心を揺さぶる生命の教育や他者への貢献の実践といった防災教育を行うことにより、主体的で内発的な防災意識・避難行動や助け合いの心を育み、非認知能力を向上させ、地域の大人の防災意識をも変えていく。地域や学校さらに教育関係者が、防災教育の価値をあらためて認識し、防災教育を最も重要な教育の一つと位置付けて、積極的に取り組んでいただけることを期待して、本提言を行う。

#### 防災教育チーム 委員

- ◎片田 敏孝 東京大学大学院情報学環 特任教授  
畦地 和也 高知県幡多郡黒潮町教育委員会 教育長  
大木 聖子 慶應義塾大学環境情報学部 准教授  
加藤 孔子 岩手大学教育学研究科 教職大学院 特命教授  
橋爪 尚泰 NHK編成局 計画管理部 部長  
矢守 克也 京都大学 防災研究所巨大災害研究センター 教授

(◎座長、以下50音順)

本提言の中に、「いわての復興教育」の3つの教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」を取り入れていただいたことは、大きな意義があると考えます。

それはこの教育的価値は自然災害だけでなく、現在のコロナ禍の状況下でも活かすことのできるものと考えます。

学校の教育活動をこの教育的価値で見直しカリキュラム化することが大切だと考えます。

#### 引用文献

防災教育・周知啓発ワーキンググループ 防災チーム 提言（内閣府 2021）

# 6章

## このたねとぼそ 未来へのメッセージ

内金崎 愛海      室 明美  
及川 美香子      寺田 恵美子      大和田 典明

### ～夢に向かって～

内金崎 愛海

東日本大震災から11年が経ち、大人になった今でも地震はとても怖いです。地震が起こると手足が震えます。緊急地震速報の警告音を聞くと、胸がドキドキします。毎年、3月11日を迎える度に津波の映像を思い出します。

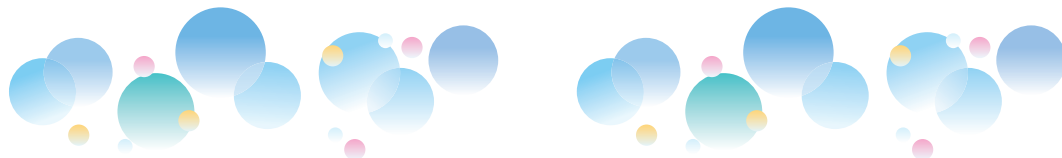
それでも、震災は私に夢を与えてくれました。「産婦人科医になりたい。災害医療に携わって、私のように恐怖や不安を感じている人を安心させられるような人になりたい。」この夢は今まで一度も揺らいだことはありません。これからも揺らぐことは無いと思います。

大学で勉強しているうちに「災害時小児周産期リエゾン」という組織があることを知りました。この組織は、災害時に小児・周産期医療を円滑に行えるよう、サポートする組織だと学びました。私は、将来、産婦人科医として岩手県の地域医療を支える一員になり、災害時にも活躍できる医師になりたいと思っています。少し欲張りな気がしますが、これからも努力して絶対に叶えたいと思います。

先ほども述べたように、東日本大震災は、私にとって忘れることのできない苦しい記憶です。しかし、震災を生き延びたからこそ、将来の夢を持ち、それに向かって頑張りができていると思います。

日本は、災害が非常に多い国です。これから先も南海トラフ巨大地震や日本海溝・千島海溝巨大地震のように目を背けたくなるような大災害、大雨による洪水など挙げたらきりがなくらい多くの災害が待っていると思います。これらの災害はきっと避けることは出来ないし、またたくさんものを失うかもしれません。それでも生きてさえいれば何とかなのではないかと東日本大震災を通して感じました。

しかし、生きるためには自分の命を守る必要があり、そのために行動しなければならないと、釜石小学校の防災教育から学びました。釜石小学校で行っているような防災教育が広がって、明るい未来が訪れたらいいなと願っています。私も将来の夢に向かって頑張ります！



## ～ふるさととともに～

室 明美

私の家は、大船渡市綾里にあります。比較的高台にあり、海岸まで300mあまり。近所の防波堤は、東日本大震災後に今までより、14mかさ上げされました。

震災前も震災後も変わらず、家の玄関から見える海岸はいつも様々な顔を見せてくれます。真夏の太陽に照らされて、波が宝石のように輝く水面、寒さと一緒に海の方から突然現れ、徐々に大陸全体を覆い隠していくやませ、満月の日の幻想的な月の道。私はそんな素敵な海岸を毎日、眺めながら生活しています。

しかし、時として海は違う顔を見せるときもあります。

令和4年1月15日13時頃、日本から遠く離れたトンガ諸島付近の大規模噴火が起こりました。それに伴い、16日午前2時26分太平洋側の各地に津波注意報が出されました。

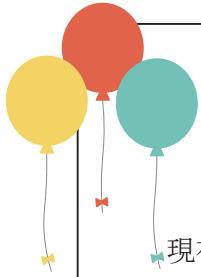
3月16日23時半過ぎには、福島県沖地震が発生しました。この時の地震は、長く揺れがきました。11年前の東日本大震災の記憶が走馬灯のように蘇ってきました。いつドーンと大きな地震かくるのかと思うと気が気ではありませんでした。私は、2階で就寝中でしたが、「これはただ事ではない。避難することになるかも！」と、急いで1階にいる子どもたちの様子を見に行きました。すると、長男はいつでも逃げられるように窓を全開にしていました。次男は、家の中で一番頑丈だと思われるトイレで揺れが収まるのを待っていました。着替えの準備もしていました。防災無線に耳を傾けて、次の情報を待ちました。津波警報は出なかったので、胸をなでおろし、いつものように「おやすみ。」と言って就寝しました。

これが、海岸近くに住む私の日常です。海と共に生きるとは、豊かな海の恵みをいっぱい受けながらも、時には、海の掟をしっかりと守りながら生活することだと思います。防災を学び、震災を経験して身に染みて分かったことです。決して怖いことではありません。落ち着いて、自分の命を守ることを誰もが一番に考えておくことです。

今日の夕飯は、近所からいただいたサンマの刺身でした。口いっぱい頬張り、思わず、「おいしい～」と口に出す。そんな、海のある大船渡の町が大好きです。

これからも、ふるさととともに生きていきます。





## ～震災を語り継ぐ～

及川 美香子

現在の私の防災教育の土台となっているのは、釜石小学校でチーム一丸となって行った実践です。この実践があってこそ、校長として内陸の学校や、現在勤務している釜石市立双葉小学校での実践に生かし、土地毎の実態に合わせてアレンジしながら行えたと思っています。

また、いわての復興教育の「いきる、かかわる、そなえる」を具体化しながら着実に進めて行く中での地道な積み重ねが一步一步、未来へ続いているのだと確信しています。

さて、あの東日本大震災で、家族や親類、親しい友人等を亡くし、まだ行方不明の方がおり、復興は進んで時は流れてもその人にとって「3.11」を毎年迎えても心が癒やされることがない人がいます。だからこそ私たちに出来るのは、このような方々を一人でも生まないようにするために東日本大震災を語り継ぎ、これからの社会を担う子どもたちが復興教育を通して「自分の命は自分で守ること」そして、今年度双葉地区で行った地域と連携した総合防災訓練のように家族も地域も含めて命を守るための避難を行っていくことを繰り返し行うことで悲しみを背負う人が一人でも少なくなる未来になるようにと思い、今を大事に推進することが未来へつながる大事なことだと思っています。

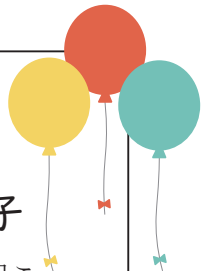
## ～人とのつながり～

寺田 恵美子

「日常」は当たり前ではない！ということを知って欲しいです。いつどんなことが起こってどんな状況になるか、誰にもわからないのですから。その時になって困らないように、その時になって慌てないように、「心構え」と「準備」をしておいてください。「心構え」とは、シミュレーションを見たり聞いたりすれば出来ると思います。「準備」とは、いざという時のための「食料」「飲み物」「現金」「いつも飲んでる薬」などという「物」だけではありません。

とても大切なのは「人とのつながり」です。家族はもちろんのこと、近所の人や友達、遠くに住んでいる親戚や友達との関係性を大切に思って過ごしてください。災害にあった時、もし食べ物や水がなくなったとしても、行政が何とかしてくれます。時間はかかるかもしれないけれど、パンや水は届くでしょう。そして、空腹は満たされるでしょう。でも、言葉を交わし思いやることで心が満たされることは、人とでなければ出来ません。そばに誰か、人がいることでどれだけの安心感を得られることか！どれほど心強いことか！それは、はかりしれません。普段からの関係性を大切にしておきましょう。

この11年、私は、たくさんの方々の言葉や思いに助けられました。勇気づけられました。そして、今があります。震災前からコーディネーターという役割を受けて、学校(子どもたちや先生方)と地域とを繋ぎ、学校教育をより良いものにしようと動いて来ましたが、たくさんの方々とのご縁をいただき、助けられていたのは私だったのだと気づきました。みなさん、色々な方々とのご縁を大切に！





## ～感謝を忘れない人に～

大和田 典明

「当たり前で授業をしたい。」

東日本大震災発災当時内陸部の小学校に赴任していた私が、沿岸部の先生方と話したとき、何度も聞かされた言葉でした。誰も経験したことのない大きな揺れとその後の恐ろしい津波により、それまでの日常はすっかり奪われてしまい、私達は当たり前と感じていたことのありがたさ、尊さを思い知らされました。

東日本大震災の起きた日は、雪のちらつく、凍えるような寒さの日でした。子どもたちは1枚の毛布に4人でくるまったり1個のおにぎりを半分ずつに分け合ったりして「1日目の夜」を過ごしました。2日目からは、停電による水やガソリン、灯油等の不足で大変不便な毎日が続きました。電気が復旧ししばらくは、たくさんの支援に助けられ心も満たされていきましたが、今度は校庭には仮設住宅が建ち並び、毎日誰かが支援に訪れる、その対応に忙殺されるという大変落ち着かない状況が続きました。

先生方にとっては、「当たり前の日々の中で授業をする」。子どもたちにとっては「当たり前前に落ち着いた状態で勉強する」「当たり前前に電気をつける、水を飲む、食事をする…」それらの一つひとつが何と尊くありがたいことだったか、震災に遭い、そのことを初めて知らされたように思います。

ですから、これから生きる子どもたちには（もちろん私のような大人にとっても）、「感謝を忘れない人」に育ってほしいと強く思います。せつかつない命です。毎日を生きていることだって、当たり前前に感じられるかもしれませんが、実はたくさんの人たちに守られ、愛され、支えられている…、大変ありがたいことです。

いつでも、どこでも大切なことは変わることはありません。

当たり前前に感謝する、そして「ありがとう。」を伝え合う…。

そういう素敵な生き方ができる人に成長することを願っています。





## ～篠原家の備え～

篠原 優斗

篠原家の備えは水と食料です。食料と言っても、そんなに大量ではありません。なぜなら持っていけないからです。水は5リットルくらいのを2本と各々で必要な分の水を持って逃げます。自分は、2リットルペットボトルと5リットルをもって逃げる係と勝手に思っています。

実際にトンガの津波の際は、母と弟は水とペット用の食べ物をもって警報から10分ほどで避難しました。祖父母は、家族の食べ物をもって避難し、私は水を持って消防署に出勤しました。水は避難所で合流した時に使おうと思っています。

## ～伝えること～

寺崎 幸季

私の備えは「伝えること」です。

大学時代の友人で地震とは無縁の(?)沖縄県出身の友人がいて、地震や津波の話をよく伝えていました。防災意識がなかった友人でしたが、私の話をきっかけに、災害備蓄や避難訓練に積極的に参加するようになりました。

いつ来るかわからない災害に、日頃の備えを身をもって考えてほしいです。例えば、防災のリュックの見直しなど小さなことから始めてほしいです。

私は、講演等で小中学生に「津波ってどんな感じでしたか?」とよく聞かれますが、「洗濯機みたいだったよ。」と伝えるようにしています。それは、一度水があふれて、かき混ぜて、それを脱水していく感じかなというふうに伝えるようにしています。

## ～教師の備え～

加藤 孔子



この非常用持出袋は、私が校長職の時に、校長室に常に置いていたものです。中には、全校の児童名簿、点呼用紙バインダー、ペン、メガホン、懐中電灯、電池、携帯ラジオ、簡易救急セット、サウナジャケットを入れていました。

また、学校には常時、雨具、長靴も置いておきました。これは、大雨の時に備えてです。実際、この長靴と雨具が東日本大震災後の児童の安否確認の際に大変役立ちました。

「空振りには許されても、見逃しは許されない。」この言葉を連携する中学校の校長先生から教わって、合言葉にしていました。

## 大事な「たね」を分けていただいた一人として

岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター

本山敬祐氏

この度は加藤孔子先生のお傍で仕事をさせていただいているご縁から、貴重な紙幅をいただきました。

本書の主題である「釜石の出来事」は、教育の力と地域の力によって、子どもだけでなく多くの人の命が守られたことを証明する重要な歴史的事実です。岩手大学教育学部はこの教訓を踏まえて教員養成の基盤となる学問分野として学校安全学の構築を目指し、防災に限らず広く学校安全の充実に貢献できる教員の養成に努めています。ところが、現在の大学生の中には東日本大震災における釜石小学校の経験を知らない者も少なくなく、当時の出来事を丁寧に理解する重要性が年々高まっています。

本書は数多くの方の寄稿をもとに、今だから語れることを含む釜石小学校の経験や教訓が立体的かつ長期的な視点から理解できるものであり、類書にはない大きな魅力があります。ただし、内金崎愛海さんが書かれていたように、大災害を生き抜いた子どもが同じ岩手県に住む同年代の子どもによって傷つけられたという悲しい事実は、東日本大震災における反省すべき教訓として肝に銘じておく必要があると考えます。支援者として、あるいは被災者を受け入れる側に対する防災教育の必要性について重要な問題が提起されているといえます。

さて、本書が2022年度に刊行されるのは極めて時宜に叶っています。釜石市では2022年度より市内全ての小学校・中学校がコミュニティ・スクールに指定されました。「釜石市立小中学校運営協議会規則」第4条には、学校運営協議

会の委員の候補として「防災関係者」が明記されています。他の自治体の規則では必ずしも防災関係者への委嘱又は任命は明記されておらず、ここに釜石市教育委員会の強い意思が感じられます。コミュニティ・スクールとして学校や地域の防災力を高めるために、釜石市内においても本書の活用が期待されます。

また、東日本大震災の被災地にとって現在は新たな災間期でもあります。日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震における最大クラスの被害想定が公表されました。岩手県内の一部地域では東日本大震災を超える浸水区域や被害が想定されており、最大クラスの津波浸水想定を受けた新たな対策が求められています。東日本大震災で「できたこと」と「できなかった」ことを精査し地域に応じた有効な対策を検討する際にも、本書が大いに役立つはずです。

釜石小学校の経験が「奇跡」ではなく防災教育の「実績」であり、その「軌跡」が詳細に記されている本書が「たね」となって全国各地に届くことを願います。

### 本山敬祐

1985年 兵庫県西宮生まれ  
2009年3月 神戸大学発達科学部 卒業  
2017年3月 東北大学大学院教育学研究科単位取得満期退学  
2017年4月 東北女子大学家政学部 講師  
2020年4月 岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター 准教授

## 「このたね とばそ」への期待

九州産業大学国際文化学部日本文化学科  
教授 太田清治氏



### 1 はじめに

加藤先生と初めてお会いしたのは、2002年1月、茨城県つくば市で行われた文部科学省教職員中央研修でした。加藤先生は岩手県教育委員会指導主事、私は北九州市教育委員会指導主事として参加しており、同じ指導主事グループで新たな教育動向について幅広く意見を交換させていただいたことが昨日のように思い出されず。

あれから20年、特に2011年の東日本大震災以降は、同じ「鉄の街」として、北九州市が釜石市の復旧・復興支援に行政職員を派遣したこともあり、幾度となくお会いする機会がありました。

これまで、加藤先生には、防災・減災教育について多くのご示唆をいただきました。特に、2012年の北九州市教育研究会夏季研修会の講演では、釜石小学校の防災教育や震災直後の対応など、「子どもの命を守る」という教育者の信念に、多くの教師が心を打たれました。

また、私が北九州市教育委員会に在職していたこともあり、2019年度から2021年度までの2年間、北九州市教育委員会防災・減災教育推進コーディネーターを引き受けていただきました。

小学校校長、岩手大学特命教授、いのちをつなぐ未来館名誉館長など、様々なご経験からコーディネーターとして、学校経営をベースに、地震や津波に加え、台風等による風水害、土砂災害などへの対応、道德教育の視点からの絆の

大切さなどについて、震災時の状況を風化させないという強い思いとともに、北九州市立学校にご指導いただきました。心より感謝申し上げます。

### 2 学びの機会の保障

2020年2月のコロナウイルス感染拡大による休校措置、それ以降の変異株による更なる感染拡大により、子どもたちは、学校行事（卒業式、入学式、修学旅行、運動会、文化祭など）、音楽科での合唱や器楽合奏、保健体育・体育科での運動や水泳、昼休みの鬼ごっこ、会話をしながらの給食、部活動など、学びの機会の多くを奪われました。

すでに、2011年の東日本大震災の被災地の学校では、子どもたちの学びの機会が奪われるということを経験されています。

2011年当時の釜石小学校の様子をまとめた『東日本大震災平成23年3月11日 学校再開までの50日間』（加藤孔子）や『釜石の奇跡 どんな防災教育が子どもの“いのち”を救えるのか？』（NHK スペシャル取材班）、『東日本大震災釜石小学校記録集 いきいき生きる』（釜石市立釜石小学校）には、地震や津波等によって、突然、子どもたちの学びの機会が奪われた学校の様子や教師の苦悩が記されています。また、そこには、避難所運営に当たりながらも「一日でも早く学校を再開し授業を行って、子どもたちの笑顔を取り戻したい。」「学びの機会を保障したい。」という加藤校長先生（当時）の強い

信念も感じられます。

今回発刊される『このたね とぼそ』では、当時の教師や児童が再び登場し、10年以上経過した現在から当時のことを振り返っています。時を超えて改めて伝わってくるものがあり、防災・減災教育教材として活用されることはもちろん、当時の学校の状況や学校再開に向けた準備等を「学びの機会の保障」という視点で捉え直す良い資料ともなっています。

### 3 学びの再開

ここで、釜石小学校の学校再開、授業再開で、私が忘れられない出来事の一つを紹介しましょう。

2011年5月初旬、私が北九州市立湯川中学校長だった時、震災後の釜石小学校の様子や学校再開に向けた準備について、加藤校長先生（当時）と直接、電話で話をする機会がありました。

その時、加藤校長先生（当時）に何か学校で欲しいものがありますかと伺ったところ、授業は再開したが、教育用品や文房具などが手に入らないので、困っているという話をいただきました。それでは、北九州市から教育用品や文房具などを送りましょうという話になり、必要な品物を知らせて下さいと言うと、すぐに各学年の授業で必要な品物がびっしりと書かれたFAXが届きました。

その一部を紹介しますと、色画用紙（桃色、水色、緑色、黄緑色、青色、赤色）合計210枚、模造紙250枚、木工用ボンド50mlを30個、書道半紙2000枚、墨汁180mlを30本、10ミリ方眼ノート35冊、作文ノート35冊、四ツ切画用紙400枚などです。

急いでこれらの品物を手配し、宅配送が釜石小学校に配達されるかどうかを確認し、PTAと協力して釜石小学校に送りました。

数日後、品物が届いたというお礼と教師も児童も大変喜んでいますという内容の電話を加藤校長先生（当時）からいただきました。その時、

笑顔で授業を受けている子どもたちの姿や、子どもたちの学びの機会を保障しようとする教師の姿が目につかび、大変嬉しく思いました。このことは、今も決して忘れられることができません。

### 4 むすびに

当時の釜石小学校は、加藤校長先生（当時）をリーダーに「チーム釜小」として教職員が一つにまとまり、様々な課題の克服を目指して頑張っていました。また、応援団として、PTAや地域など多くの方々が学校に関わっていました。そこには、釜石小学校という「学び舎（や）」に人々が信頼を置き、あらゆる教育活動に協働する姿がありました。

今回、東日本大震災から10年以上が経過して、『このたね とぼそ』がまとめられました。この本に記されている学校再開、授業再開に向け、力強く邁進していた当時の釜石小学校「チーム釜小」の姿を通して、教育の原点とは何か、学びの機会の保障とはどういうことなのか、真の学び舎（や）とはどのような学校なのかということ、今一度考えていくきっかけになることを期待しています。

#### 太田清治

1960年 福岡県生まれ

1984年3月 国立長崎大学教育学部卒

1984年4月 北九州市立公立中学校教員

2021年3月 北九州市教育委員会 退職

・中学校教員・管理職として通算21年間、教育委員会指導主事・課長・部長・教育次長として通算16年間勤務

2021年4月～九州産業大学教授（教職課程）

## 「そのたねとどいた」 ～釜石と北九州をつなぐ防災教育～

北九州市立皿倉小学校

教頭 木村敏久氏



### 1 東日本大震災当時のこと

2011年3月11日（金）の私は、当時赴任していた中学校の担任として、感動の卒業式を迎えていました。そこには、仲間や教師との別れに涙する生徒、これから始まる新しい生活に期待を膨らませ笑顔する生徒の姿がり、私も、卒業生を無事に送り出した「充実感」に浸っていました。

その日の夕方、担任をしていた生徒の保護者が来校し、思い出話をしていたところ、その保護者から「東北の方が地震で大変なようですね」と教えてくれました。東日本大震災のことです。私は、その時の状況を把握してなかったので、「大変といっても、地震はどこでも起きるから…」と思いながら、校長室のテレビをつけました。すると、そこには、私の想像をはるかに超えた、映像が流れており、東北で、何が起きているのか、東北の人は無事なのか、遠く離れた北九州市で一人ドキドキしていたことを今でも、思い出します。

### 2 北九州市と釜石市つなぐ防災・減災教育

それから、約10年の時を経て、私は北九州市教育委員会で安全管理・教育の担当となりました。

近年、全国的にも、災害が激甚化しており、大雨・土砂崩れ等が多く発生しています。北九州市においても平成30年に豪雨災害によって被害が発生したことから、これまで以上に、学校

における防災・減災の必要性が高まっています。

そこで、北九州市教育委員会として、児童生徒が「自分の命は自分で守る」児童生徒の育成を目的に、防災・減災教育の取組を推進することとなりました。

そこで、当時の北九州市教育委員会の太田清治教育次長（現：九州産業大学教授）と岩手大学の加藤孔子教授とのつながりから、大津波を生き抜いた子どもたちを育てた、「釜石の出来事」「釜石の軌跡」を学び、北九州市の子どもたちへ還元するという役目を仰せつかることとなりました。

ならばということで、釜石市へ実際に行き、そのまちやそこに住む人たち、災害の状況から学ぶこととしました。

当時、そこで何が起きたのか、どのような防災教育があったのか、生き抜いた人たちがこの10年何を思い、どのように生きてきたのか。そして、これからの未来をどう創っていくのかについて学ばせていただきました。

災害の爪痕は残っているものの、復興と新たなスタートに向けて頑張る人たちの姿に心を打たれました。「もっと、早く来るべきだった」と反省したことを思い出します。

そして、令和2年から、本格的に北九州市において、防災・減災教育の推進することとなり、加藤孔子教授には、「北九州市防災・減災教育推進アドバイザー」に就任していただき、取組への助言や釜石市と北九州市をつないだ取組をしていただくこととなりました。

### 3 取組の実際

実は、北九州市の教職員と児童生徒を釜石市に派遣し、現地から学ぶことを取組のきっかけとしたかったのですが、新型コロナウイルス感染拡大の影響から、主にオンラインやWEB動画を活用して取組を推進することとなりました。

北九州市内のモデル校を5校設定し、

- ①北九州市の学校と釜石市の学校の互いの取組を紹介し合う、オンライン交流会
- ②いのちをつなぐ未来館によるオンライン防災授業・いのちをつなぐWEB動画配信
- ③TEAM釜小メンバーによる、防災・減災リモートシンポジウム
- ④加藤孔子教授による、防災・減災教育WEB動画「東日本大震災 あの時学校は チーム釜石小学校の軌跡を北九州へ」の配信等から、釜石の出来事、釜石市で行われていた防災教育について学びました。

釜石から学んだことを生かしたモデル校の取組の一例としては

- ①生徒会執行部を中心とした防災調べ
  - ②危険箇所を確認しながら行う防災集団下校
  - ③取組を全校に広げるための防災集会
  - ④自校の体育館を避難所として想定したHUG
  - ⑤浸水被害を想定した垂直避難訓練
- 等、各学校が、学校や地域の実態に応じて創意工夫を講じながら取組を進めました。

### 4 取組後の変容

取組の前後に児童生徒・保護者・教職員にアンケートを取ったところ、児童生徒や教職員らが自分の住んでいる地域や学校周辺の災害リスクを把握したり、災害時の避難場所を決めたりするようになっていました。

一方で、コロナ禍もあり、実践に近い訓練ができなかったため、実際の避難に自信がない児童生徒が多くいました。また、保護者と連携し

た取組ができなかったことから、保護者の意識は、大きく変化しませんでした。児童生徒・教職員・地域が連携した取組が必要だと思いました。

### 5 最後に

取組の中で、印象深かったのは、TEAM釜小メンバーによる「リモートシンポジウム」でした。中でも、当時小学生の寺崎さんの「先生たちが防災教育をしてくれたからこそ、私は生きている。本当に有難い。」ということばが、今でも心に残っています。そのことばには、単に「命を救ってくれたから」とだけでなく、防災教育を通じて、「自分や仲間を大切にすること、地域を愛することを学ぶことで、自分という人が生きている」という意味が含まれている、私は思っています。防災・減災の取組の際は、その視点も忘れないようにしたいと思っています。

最後に、このような学習の機会を得ることができたこと、釜石市とつながりをもつことができたこと、素晴らしい方々と出会うことができたこと、全ての方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。

釜石で育った「たね」は、震災から10年経過し、今北九州市のこの地に届きました。

これから、次の種を増やし、各地に北九州の「たね」を飛ばせるよう頑張っていきます。

「そのたねとどいた」「このたねふやそ」

#### 木村敏久

福岡県北九州市出身

平成14年～ 北九州市立中学校教諭

平成28年～ 福岡教育大学教職大学院生

平成30年～ 北九州市教育委員会指導主事

令和4年～ 北九州市立皿倉小学校（教頭）

# あとがき

2011team 釜石小ぼうさい

副代表 及川 美香子

当時の釜石小学校教職員であった2011team 釜石小ぼうさいのメンバーは、釜石小学校を離れてから、大船渡市、一関市、釜石市等それぞれの赴任地に「釜石小学校防災教育の種」を各地に運びました。それぞれの学校で種をまき、実践を積み重ねてきました。あれから11年。さらに次の先生方に防災教育を引き継ぎ、「釜石小学校防災教育の種」は確実に根付いていると確信しています。

また、この本には、当時の子どもたちが3名執筆しましたが、11年ぶりに会ったこの子どもたちは、自分の生き方を考え、「人のために役立つ人間になろう。」という思いをもつ素敵な大人に成長していました。北九州市のリモートシンポジウムに参加したり、この本を執筆したりすることで、改めて、釜石小学校の防災教育で学んだことや東日本大震災で体験したことを振り返り、当時では気づけなかった釜石小学校の教職員の防災や命を守ることへの思いに気づいてくれました。

そういう素敵な大人になった子どもたちはこの他にもたくさんいます。この子どもたちのようにあの時2011team 釜石小の教職員がまいた種が、11年の月日を経て素敵な大人の姿として花を咲かせてくれたことを実感するとき、「あのとき、釜石小学校で教育をしていてよかった」という思いがこみ上げてきます。

さて、この本を読んでいただければおわかりになると思いますが、執筆していくうちに、私はこの種は、釜石小学校の防災教育そのものだけではなく、学校教育の全てが子どもたちを育み、私達教職員も深く貴重な学びをいただき、今につないでいるということに気づきました。

11年という月日が経っても、学校の子どもの澄んだ瞳、笑顔、歓声…は変わりありません。ただ、11年前の東日本大震災の記憶は日に日に薄れているのを感じます。この子どもたちが自分の命を守り、未来へ向かって明るく、力強く生き抜くことができるように、今自分がいる場所で種をまき、大事に育てていきたいと考えています。

この本を手にした皆様に、大津波を生き抜いた子どもたちとあのとき共に実践した釜石小学校の同僚達の思いがこもった種が新たな子どもたちや先生方、地域や行政の皆様に届きますように。

そして、たんぽぽの綿毛のように2011team 釜石小ぼうさいの種が各地に広がっていくことを願っています。

特別寄稿

片田敏孝氏 東京大学大学院情報学環 特任教授

【2011team 釜石小ぼうさい】

<分担執筆者>

大和田典明 及川美香子 室明美 寺田恵美子  
寺崎幸季 篠原優斗 内金崎愛海

<表紙絵・イラスト> 平山薫

<写真提供者> 谷澤通広

<編者> 加藤孔子

賛助寄稿

本山敬祐氏 岩手大学教育学部  
附属教育実践・学校安全学研究開発センター 准教授  
太田清治氏 九州産業大学 国際文化学部 日本文化学科 教授  
木村敏久氏 北九州市立皿倉小学校 教頭

<編集協力・写真提供>

釜石市 釜石市総務企画部総合政策課震災検証室  
大阪府高槻市教育委員会 北九州市教育委員会  
釜石市立鶴住居小学校 一関市立滝沢小学校 養護教諭 千田咲良氏  
岩手大学教育学部 准教授 小川春美氏

\*\*\*\*\*

書名 2011team 釜石小の軌跡  
釜石小学校防災教育

# このたねとばそ

—大津波を生き抜いた子どもたちのひみつが未来の命を救う—

発行日 2022（令和4）年 7月 28日

編者 加藤孔子

印刷所 セーコー印刷



\*\*\*\*\*







2022 防災教育チャレンジプラン